南島原市文化財調査報告書　第９集

日野江城跡

― 平成25年度から平成28年度にかけての調査成果 ―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書　第９集

日野江城跡

― 平成25年度から平成28年度にかけての調査成果 ―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

平成25年度～28年度調査範囲全景

日野江城跡二ノ丸上空から南方を望む

54区－2　廃棄土坑

発刊にあたって

このたび、平成25年度から28年度に市内遺跡発掘調査等事業で実施いたしました、日野江城跡内容確認調査の報告書を刊行する運びとなりました。

国指定史跡「日野江城跡」は、中世の戦国大名である有馬氏の本城です。平成７年度から12年度は二ノ丸地区を調査し、階段跡、城道関係の遺構を確認、13年度及び19年度から22年度は本丸地区を調査し、掘立柱建物跡、大型土坑を確認、法花、石製風炉等が出土しております。

二ノ丸地区では仏塔を使った階段の検出や金箔瓦の出土など多くの成果があり、日野江城跡に眠っていた多くの歴史的事実が明らかとなってきていますが、詳細な城道及び遺構の分布状況を確認することを目的として、平成25年度から二ノ丸地区の内容確認調査を実施しました。

これら発掘調査の成果をもとに、整備計画の策定、改訂を進めておりますが、近年の度重なる大雨や強風などの災害によるき損、崩落を繰り返しており、防災事業を中心とした整備も検討し、様々な計画を進めているところです。

最後になりましたが、日野江城跡の発掘調査に多大なご指導をいただきました文化庁記念物課、長崎県教育庁学芸文化課、長崎県世界遺産登録推進課、南島原市文化財専門委員会の先生方をはじめ、関係各位の皆さまに心から感謝申し上げます。

平成30年３月31日

南島原市教育委員会　　教育長　永田　良二

例　言

1　本書は、平成25年度から平成28年度にかけて実施した国指定史跡日野江城跡（長崎県南島原市北有馬町所在）における発掘調査の報告書である。

2　調査は、南島原市教育委員会が主体となって行った。

3　本書の作成にかかる整理調査の主体及び担当は以下のとおりである。

整理調査主体	南島原市教育委員会	教育長	永田　良二
	南島原市教育委員会事務局	教育次長	深松　良蔵
	文化財課	課長	松本　慎二
	文化財課文化財班	班長	木村　岳士
整理調査担当	文化財課	副参事	荒木　伸也
		主事	小川　慶晴

4　本書の作成にあたり発掘調査担当の伊藤健司（南島原市企画振興部世界遺産推進室副参事）の協力を得た。

5　調査における実測図は以下の業務委託業者及び伊藤が作成し、写真撮影は伊藤が行った。

平成25年度遺構等測量業務	㈱イビソク長崎営業所
平成26・27・28年度遺構等測量業務	㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店

6　遺物の洗浄・注記などの基礎整理は壹岐美由紀が行った。遺物の実測、拓本は小川、壹岐が行った。製図及び遺物の写真撮影は小川が行った。

7　本書における遺物・図面・写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室で保管している。

8　本書の執筆・編集は荒木、小川による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境（荒木）……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第Ⅱ章　調査組織と調査の経過（荒木）……3
　第１節　調査組織……3
　第２節　調査区の配置と調査の経過……5

第Ⅲ章　調査の成果（小川）……9
　（１）44区の調査……9
　（２）45区の調査……10
　（３）46区・47区・48区の調査……12
　（４）49区・50区の調査……17
　（５）51区の調査……24
　（６）52区の調査……25
　（７）53区の調査……27
　（８）54区・55区の調査……28
　（９）56区の調査……43
　(10)57区の調査……44
　(11)58区・59区の調査……45
　(12)60区の調査……47
　(13)61区の調査……48
　(14)62区の調査……49
　(15)63区の調査……50
　出土遺物観察表……52

第Ⅳ章　総　　括（荒木）……56

附編　地中レーダー探査の成果について（荒木）……77

挿 図 目 次

第１図　中・近世城跡分布図…… 2
第２図　二ノ丸地区・大手川地区調査区配置図（日野江城跡総集編Ⅰ抜粋）…… 5
第３図　平成25～28年度調査区配置図…… 7
第４図　44区－１　実測図…… 9
第５図　44区－２　実測図……10
第６図　45区　出土遺物実測図……10
第７図　45区　実測図……11
第８図　46区・47区・48区　実測図……13
第９図　46区・47区　出土遺物実測図①……14
第10図　46区・47区　出土遺物実測図②……15
第11図　46区・47区　出土遺物実測図③……16
第12図　49区　実測図……19
第13図　50区（平成26年度調査分）実測図……20
第14図　50区（平成27・28年度調査分）平面図……21
第15図　50区（平成27・28年度調査分）土層断面図……22
第16図　50区　出土遺物実測図……23
第17図　51区　実測図……24
第18図　52区　出土遺物実測図……25
第19図　52区　実測図……26
第20図　53区　実測図……27
第21図　54区（平成26年度調査分）実測図……30
第22図　55区　実測図……30
第23図　54区（平成27・28年度調査分）平面図……31
第24図　54区（平成27・28年度調査分）土層断面図……32
第25図　54区－１　掘立柱建物跡　平面図……33
第26図　54区－２　廃棄土坑　実測図……33
第27図　54区－２　大型土坑　実測図……34
第28図　54区－１　柱穴群　出土遺物実測図……36
第29図　54区－２　廃棄土坑　出土遺物実測図①……37
第30図　54区－２　廃棄土坑　出土遺物実測図②……38
第31図　54区－２　大型土坑　出土遺物実測図①……39
第32図　54区－２　大型土坑　出土遺物実測図②……40
第33図　54区－２　SX01　出土遺物実測図 ……41
第34図　54区・55区　包含層　出土遺物実測図……42
第35図　56区　出土遺物実測図……43

第36図　56区　実測図……43
第37図　57区　実測図……44
第38図　58区　出土遺物実測図……45
第39図　58区・59区　実測図……46
第40図　60区　実測図……47
第41図　61区　実測図……48
第42図　62区　実測図……49
第43図　63区　出土遺物実測図……50
第44図　63区　実測図……51

表　目　次

第１表　各調査年度成果概要表……６
第２表　45区　出土遺物観察表……52
第３表　46区・47区　出土遺物観察表……52
第４表　50区　出土遺物観察表……52
第５表　52区　出土遺物観察表……53
第６表　54区－１　柱穴群　出土遺物観察表……53
第７表　54区－２　廃棄土坑　出土遺物観察表……53
第８表　54区－２　大型土坑　出土遺物観察表……54
第９表　54区－２　SX01　出土遺物観察表 ……54
第10表　54区・55区　包含層　出土遺物観察表……55
第11表　56区　出土遺物観察表……55
第12表　58区　出土遺物観察表……55
第13表　63区　出土遺物観察表……55

図 版 目 次

図版１　44区・45区・46区・47区　調査写真……61
図版２　48区・49区・50区・52区　調査写真……62
図版３　53区・54区　調査写真……63
図版４　55区・56区・57区　調査写真……64
図版５　58区・59区・60区・61区　調査写真……65
図版６　62区・63区　調査写真、作業風景……66
図版７　45区　出土遺物、46区・47区　出土遺物①……67
図版８　46区・47区　出土遺物②……68
図版９　50区　出土遺物、52区　出土遺物……69
図版10　54区－１　柱穴群　出土遺物、54区－２　廃棄土坑　出土遺物①……70
図版11　54区－２　廃棄土坑　出土遺物②……71
図版12　54区－２　大型土坑　出土遺物①……72
図版13　54区－２　大型土坑　出土遺物②、54区－２　SX01　出土遺物 ……73
図版14　54区・55区　包含層　出土遺物、56区・58区・63区　出土遺物……74

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

日野江城跡は南島原市北有馬町に所在し、肥前有馬氏の本城として昭和57年７月３日に国の史跡に指定された。南島原市は島原半島の南東部に位置し、平成18年３月31日に旧南高来郡の８か町が合併、北は島原市、西は雲仙市と接し、南東は有明海に面している。平成30年２月末の人口は46,886人、合併当時の人口は56,003人、合併後12年で約10,000人減少しており、市では人口を維持し減少、流出を食い止めるために「雇用拡大策」と「定住・移住促進策」を両輪としたまちづくりを進めている。

北部の深江町から西有家町までは扇状地、緩やかな丘陵が多いが、北有馬町から南部の加津佐町までは山間部が多く、海岸線まで急峻な地形が迫っているところも多い。日野江城跡は雲仙山系から南へ延びる丘陵の先端部を縄張りとする。丘陵の東側は大手川、西側は有馬川が流れ有明海に注いでいる。標高は本丸が約80m、平成25年度に追加指定した大手川地区は約５m で、比高差は約75m である。

第２節　歴史的環境

南島原市内では現在約190の遺跡が知られており、大型公共事業や各種開発事業に伴う試掘調査、範囲確認調査等で新たな遺跡が確認されている。

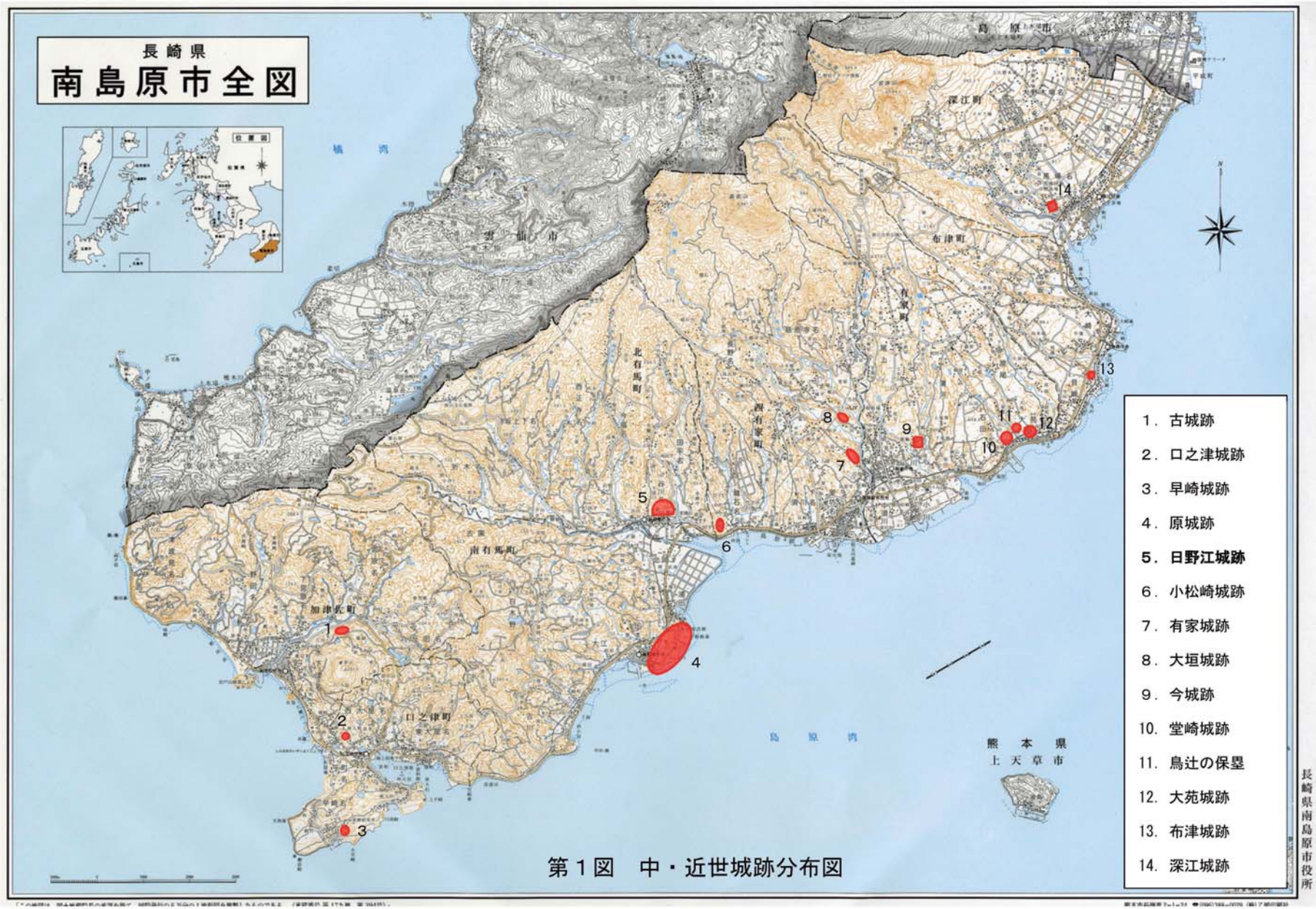
市内の発掘調査において旧石器時代のナイフ型石器、台形様石器などの遺物が出土した遺跡があるが、旧石器時代を主体とする遺跡の発掘調査事例はない。風呂川遺跡、今福遺跡では発掘調査の際に他の時代の包含層に混在して、論所原遺跡では分布調査、野向遺跡では現地踏査の際に旧石器時代の遺物を確認しており、南島原市内での土地利用が旧石器時代には始まっていたことが伺える。

縄文時代になると島原半島全体で遺跡数が急増する。市の北部の丘陵や台地上、またこれらの縁辺部では縄文時代早期、縄文時代後期から弥生時代初頭にかけての遺跡が多く確認されており、近年発掘調査が行われている権現脇遺跡からは縄文時代晩期から突帯文期にかけての土器が出土している。縄文時代晩期の代表的な遺跡として、山ノ寺梶木遺跡、原山支石墓群があげられる。

縄文時代から弥生時代移行期については多くの遺跡を確認できるが、弥生時代前期に関する遺跡、遺物は少ない。中期から後期にかけて再び遺跡が確認されるようになり、弥生時代中期の墓地である北岡金比羅祀遺跡、中期から古墳時代初頭にかけて大規模な集落遺跡を形成した今福遺跡がある。

古墳時代については終末期頃の天ヶ瀬古墳が確認されているが、以後の古代も含め調査例が少なく様相が明らかではない。

中世から近世にかけては、有馬氏の居城の日野江城跡や支城の原城跡などの城郭関係やキリシタンに関連する遺跡があり、原城跡の発掘調査では島原・天草一揆時の遺構、キリシタン遺物が確認されている。またキリシタン墓碑が多数確認されており、特に有家・西有家町域に集中し、国内で確認されている約190基のうち、約６割が南島原市内に残されている。



第１図　中・近世城跡分布図

第Ⅱ章　調査組織と調査の経過

第１節　調査組織

日野江城跡の発掘調査における調査組織は、以下のとおりである。

平成25年度

事業主体	南島原市		
総　　括	南島原市教育委員会	教 育 長	定方　郁夫
調査体制	南島原市教育委員会事務局	教育次長	水島　文昌
	文化財課　世界遺産登録推進室	課長兼室長	松本　慎二
		班　　長	鬼塚　俊範
調査担当	世界遺産登録推進室	主　　査	伊藤　健司

平成26年度

事業主体	南島原市		
総　　括	南島原市教育委員会	教 育 長	定方　郁夫（～平成26年７月１日）
			永田　良二（平成26年８月11日～）
調査体制	南島原市教育委員会事務局	教育次長	渡部　　博
	文化財課　世界遺産登録推進室	課長兼室長	松本　慎二
		班　　長	鬼塚　俊範
調査担当	世界遺産登録推進室	主　　査	伊藤　健司

平成27年度

事業主体	南島原市		
総　　括	南島原市教育委員会	教 育 長	永田　良二
調査体制	南島原市教育委員会事務局	教育次長	渡部　　博
	文化財課　世界遺産登録推進室	課長兼室長	松本　慎二
		班　　長	鬼塚　俊範
調査担当	世界遺産登録推進室	主　　査	伊藤　健司

平成28年度

事業主体	南島原市		
総　　括	南島原市教育委員会	教 育 長	永田　良二
調査体制	南島原市教育委員会事務局	教育次長	渡部　　博
	文化財課　世界遺産登録推進室	課長兼室長	松本　慎二
		班　　長	鬼塚　俊範
調査担当	世界遺産登録推進室	副 参 事	伊藤　健司

発掘調査指導（平成25～28年度）

文化庁

文化財部記念物課	史跡部門　文化財調査官	浅野　啓介

長崎県

教育庁学芸文化課文化財班	課長補佐	寺田　正剛
文化観光国際部世界遺産登録推進課	課長補佐	川口　洋平
文化観光国際部世界遺産登録推進課	主任主事	宮武　直人

南島原市文化財専門委員会

長崎大学　名誉教授	岡林　隆敏（土木工学）
奈良大学文学部　教授	千田　嘉博（城郭）
(元)和歌山県立紀伊風土記の丘　館長	高瀬　要一（整備）
(元)国立歴史民俗博物館　教授	玉井　哲雄（建築史）
くまもと文学・歴史館　館長	服部　英雄（中世史）
九州大学基幹教育院　教授	福田　千鶴（近世史）
佐賀大学全学教育機構　教授	宮武　正登（城郭）
長崎医療技術専門学校　校長	分部　哲秋（形質人類学）
南島原市文化財保護審議会　委員	佐藤　光典（地域有識者）

オブザーバー

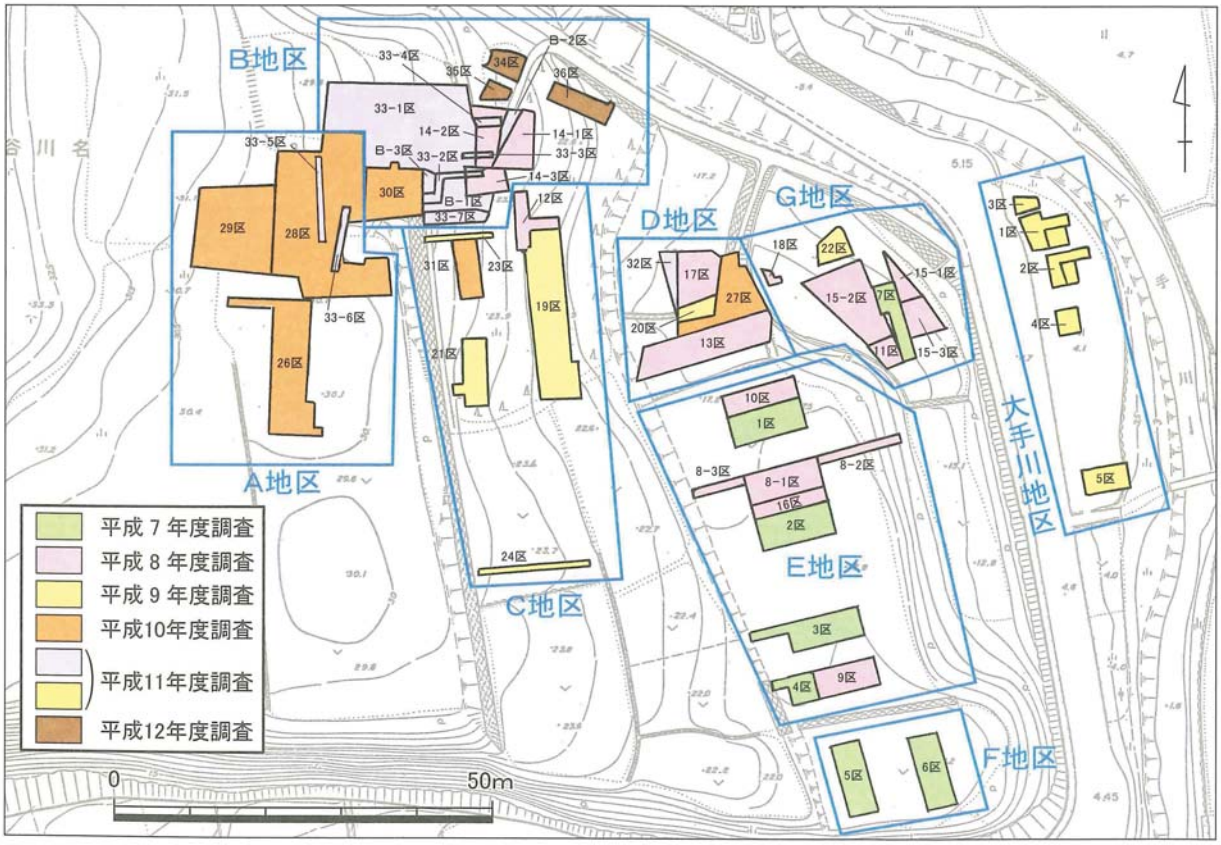
東京文化財研究所保存科学研究センター修復計画研究室	室長	朽津　信明（保存科学）
長崎県教育庁学芸文化課文化財班	主任文化財保護主事	松尾　俊幸

（所属等は平成29年度）

第２節　調査区の配置と調査の経過

日野江城跡二ノ丸地区の発掘調査は平成７～12年度、大手川地区は11年度に旧北有馬町教育委員会が実施している。特筆すべき成果として、大手口付近から城内へ向け直線的に伸びる階段跡の一部を検出している。全体の検出は行っていないが、少なくとも70m 程度の延長が推定される状況である。また二ノ丸の北側では、大量の石塔を踏石に転用した階段跡を検出した。この石塔を転用した階段の南側袖石垣は、凝灰岩を素材とする薄手の切石を立てて利用しており、外来系技術の導入が指摘されている。この階段は二ノ丸北側で曲輪５と曲輪６をつなぐ内枡形虎口を形成しており、階段を上がった踊り場状の空間では、瓦当に金箔を施した鳥衾瓦が出土している。このほか内枡形虎口の西側では掘立柱建物跡を検出し、また曲輪７の南端では土師質土器の大量廃棄土坑などを検出している。

このように日野江城跡の内容を明らかにしていく上で貴重な成果を得たものの、城道に関しては部分的な遺構の確認に留まっている一面があり、広大な二ノ丸において全体的な構造や遺構分布の把握などのため、さらに調査を推し進めて行く必要があった。そうした事から、25～28年度に発掘調査、29年度に報告書作成の５か年計画で実施したものである。各調査区における目的と調査の展開については、次章において詳しく述べていく。



第２図　二ノ丸地区・大手川地区調査区配置図（日野江城跡総集編Ⅰ抜粋）

第１表　各調査年度成果概要表

年度	調査区域	主な成果概要（検出遺構・遺物など）
平成７	二ノ丸　曲輪７	大量の土師質土器を廃棄した土坑を検出。陶磁器など。
平成８	二ノ丸　曲輪６・７	曲輪６北側で柱穴群、曲輪７北側で石垣、南側で階段遺構を検出。土師質土器、陶磁器など。
平成９	二ノ丸　曲輪６・７	曲輪６北側で直線的構造の階段遺構を検出。土師質土器、陶磁器、瓦など。
平成10	二ノ丸　曲輪５・６	曲輪５と６を繋ぐ虎口の階段を検出し、五輪塔、宝篋印塔などの石塔を大量に転用した踏石、南側袖に薄手の切石を立てた石垣等を確認する。階段西側で掘立柱建物跡を検出。階段踊り場の隅より金箔瓦出土。土師質土器、陶磁器、瓦など。
平成11	二ノ丸 曲輪５・６・７	10年度検出の虎口に伴う石垣の一部を検出。土師質土器、陶磁器、瓦など。
	史跡外　大手地区 （25年度に追加指定）	城域の東端を示す石垣の一部を検出。土師質土器、陶磁器、瓦など。
平成12	二ノ丸　曲輪５・６	柱穴列を検出。土師質土器、瓦など。
平成25	二ノ丸 曲輪５・６・７	二ノ丸における城道確認を中心に調査を実施。大手より延びる直線階段が二ノ丸最上段の曲輪５内部までは延びていない事を確認。 曲輪５の石垣天端付近においては、栗石と異なる大量の礫投棄がみられ、改変されている状況を確認。
平成26	二ノ丸　曲輪５・６	曲輪５・６の南側において、１ｍ幅を基本とするトレンチを十字状に設け、遺構等の分布状況を確認。曲輪５西側において玉石を充填した溝状遺構、曲輪６の南側において大型柱穴などを確認。このほか曲輪６の石垣背後において、栗石とは性格が異なる大量の礫投棄状況などを確認。
平成27	二ノ丸　曲輪５・６	26年度の成果に基づき、曲輪５西側および曲輪６南側の拡張調査などを実施。曲輪５西側では玉石を充填する溝、並行もしくは直交する溝などを検出。曲輪６南側においては大型柱穴が集中する状況を確認。
平成28	二ノ丸　曲輪５・６	26、27年度の調査を受け、曲輪５西側および曲輪６南側をさらに拡張して実施。曲輪５では溝状遺構、礎石などの石材を廃棄した土坑などを確認。曲輪６南側では大型土坑、廃棄土坑などを検出。廃棄土坑からは土師質土器、陶磁器のほか動植物遺存体が出土。 26年度に検出した曲輪６石垣背後の礫投棄について南北の分布域、曲輪５西側の切岸において石祠を確認。

第３図　平成25～28年度調査区配置図（Ｓ＝１/500）

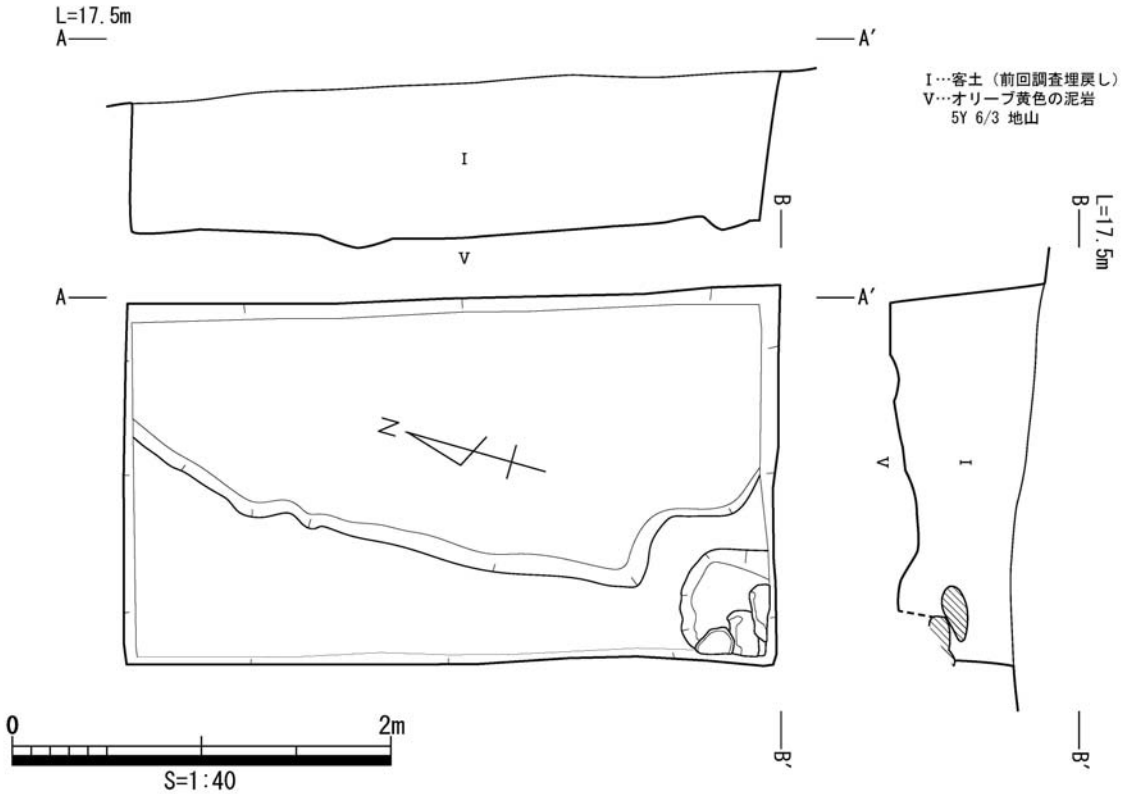
第Ⅲ章　調査の成果

（1）44区

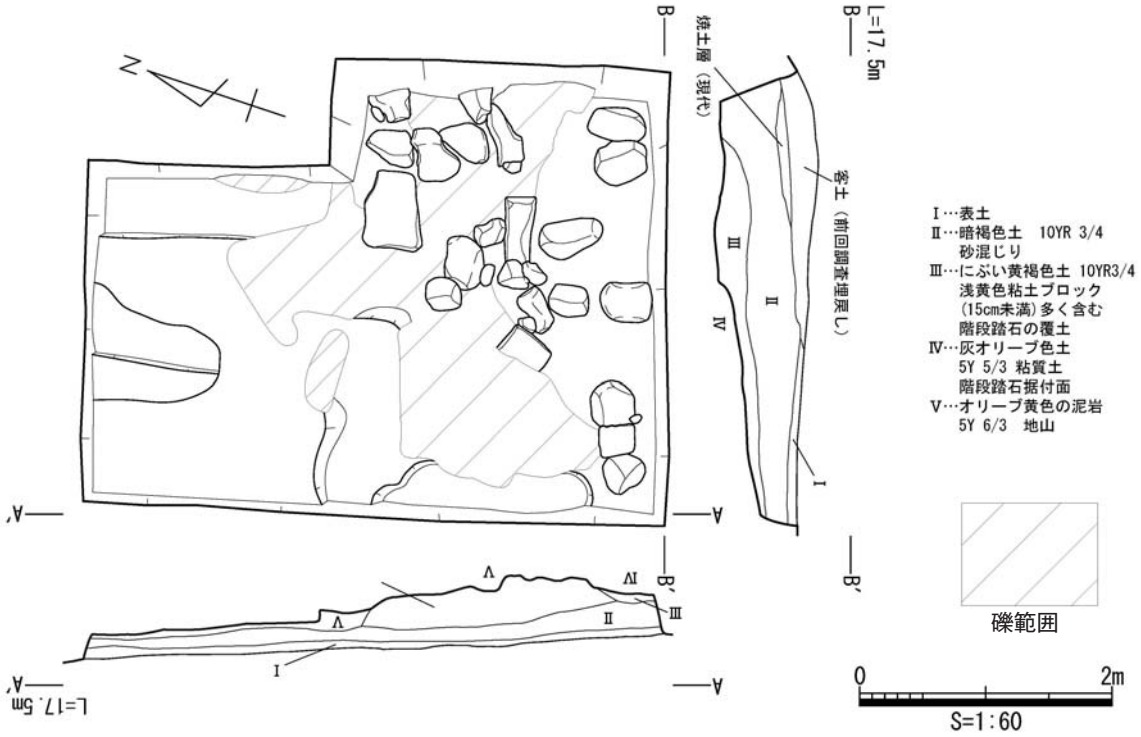
城道の詳細確認を目的として平成25年度に調査を実施した。過去調査の成果から、二ノ丸の城道については、大手川から城内へ直線的に登る古段階ルート及び城内へ進入した後に北へ折れ、大量の石塔を転用した階段4を経由する新段階ルートと、少なくとも2段階の変遷が明らかとなっている。ただし城道に伴う階段跡の確認は部分的であり、新段階ルートにおける階段３から階段４への連絡の在り方など、今後の検討課題としていた（本多2011）。

44区は曲輪７の北側に位置し、平成８～11年土に古段階ルートの階段２と新段階ルートの階段３を重複して検出した地点の西側に接する形で設けた。調査区は２分割し、階段３南袖の延長にあたる側を44区－１、北袖の延長を44区－２とした。

44区－１において遺構は見られず、土層の記録、撮影等の作業を行った。44区－２においては、階段３の延長と判断される踏石、袖石垣の一部、石垣の裏栗などを検出した。遺構は調査区内の東寄りで広がっており西側では徐々に見られなくなる。ただし階段、石垣が完結して収束しているのではなく、削平の影響を受けたような在り方である。検出した限りの踏石、石垣は西側を向いており、この地点において通路の折れを示唆する状況はみられなかった。



第４図　44区－１　実測図（S＝１/40）



第５図　44区－２　実測図（Ｓ＝１/60）

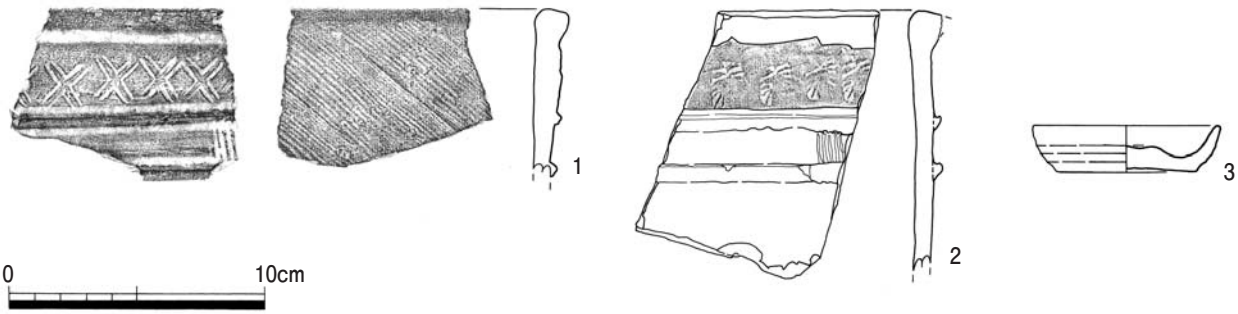
（２）45区

44区と同じく城道確認のため、平成25年度に曲輪６の北側で実施した調査区である。45区の南に接する地点では、平成９年度に古段階ルートの階段２を21区内で検出している。直線的に延びる城道から、北へつながる通路の有無確認のため調査区を設定した。

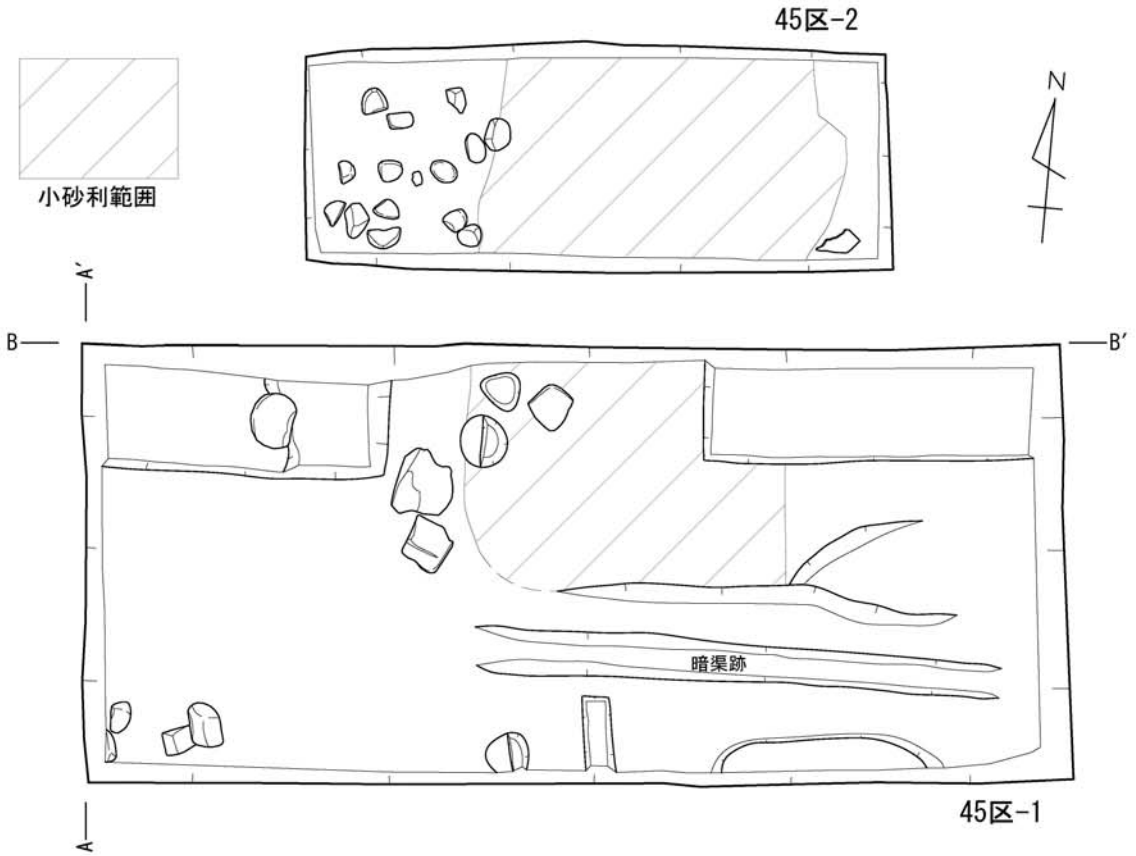
調査では、東西幅２ｍ余りの小砂利が敷き詰められた層を確認した。南側は暗渠に切られる形で消滅している。北側には広がりが認められたため、補足調査のためのサブトレンチを設け、当初調査区を45区－１、サブトレンチを45区－２とした。

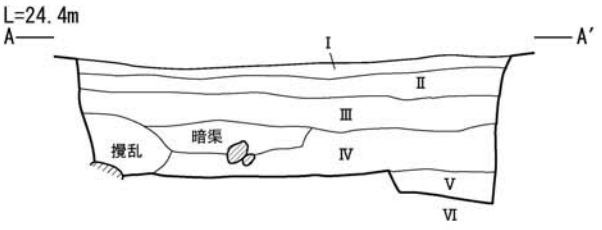
砂利面について、通路に伴う遺構の一部である可能性も検討したが、強度的には脆弱である。建物基礎などの可能性も考えられるが、明確な根拠を欠くため、性格不明遺構として取り扱った。

遺物：１・２は瓦質土器の火鉢である。どちらも口縁部は肥厚し、その下にスタンプ文と二条の突帯を巡らす。突帯の間には櫛描文が入る。**３**は土師質土器の小皿である。見込部分はドーナツ状の高まりを持つ。

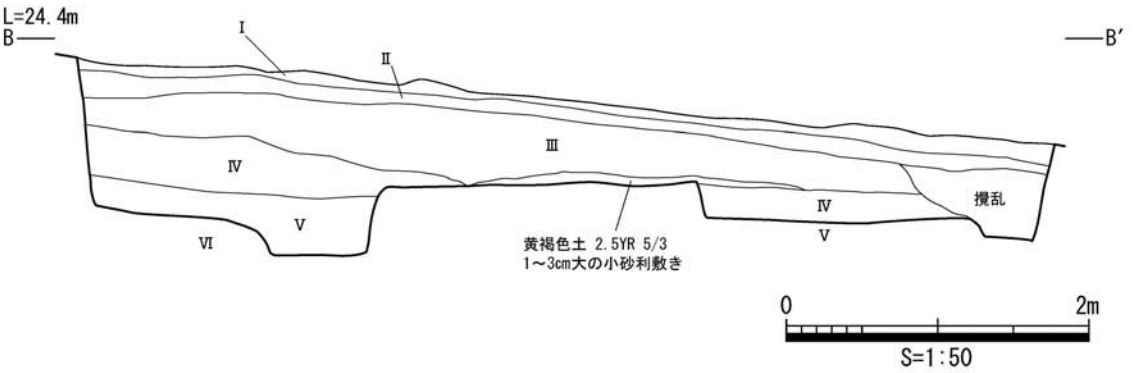


第６図　45区　出土遺物実測図（Ｓ＝１/３）





Ⅰ…表土
Ⅱ…耕作土　にぶい黄褐色土10YR 3/4
Ⅲ…褐色土　10YR4/4
　2～5cm大の浅黄色粘土ブロック多い
　1cm大程度の炭化物粒
Ⅳ…黄褐色土　2.5Y 5/3
　2～15cm大の浅黄色粘土ブロック多い
　1cm大程度の炭化物粒
Ⅴ…オリーブ褐色土　5Y 4/3　1cm大の炭化物粒
Ⅵ…にぶい黄色粘土2.5Y 6/4 小礫混じり　地山



第７図　45区　実測図（Ｓ＝１/50）

（３）46区・47区・48区

曲輪５の東側で、城道の確認目的で実施した調査区である。調査は25年度を中心に行い、26年度に補足のため48区を拡張して実施した。

過去の調査において、大手川から城内に向けて、延長約100m の直線状の城道があると想定している。曲輪６、曲輪７、大手川地区では階段跡が検出されているが、曲輪５については平成10年度に26区で検出された状況が根拠となっており、報告書より引用すると次のような理由である。

“階段の踏石列は確認していないが、調査区南西隅付近で検出した石の様相が階段２の踏石に近いことから、Ｃ・Ｄ地区より延びる階段２の一部と思われる。”（林田2011）

曲輪５においては、階段跡とした遺構の状態が不明瞭である事、また階段跡であったとしても、下方の曲輪で検出している階段跡からの連続性が認められるか検証が必要であったため、確認を行った。

46区は、東西２ｍ×南北９ｍで設定した。表土、耕作土を20～30cm 程度掘り下げると、薄い粘土層を挟んで、調査区全体に大量の礫が広がっている状況を確認した。礫群の平面的な分布を把握するため調査区を西側に２ｍ拡張した。結果、礫の落ち込みラインが不整形に蛇行している状況を確認した。礫群の性格を確認するため掘り下げを行った結果、調査区内においては最大2.5m 程の深度に達した。検出状況は、東落ちの斜面に大量の礫が投棄されたような状態であり、調査区の東側では、さらに礫の堆積深度が深くなると想定される。

礫は拳大～人頭程度のものが主体であり、間隙の多い状態で堆積している。また築石並みの１ｍにも及ぶ石も多く含まれている。礫に伴い16世紀末から17世紀前半ごろの瓦、陶磁器などが出土している。

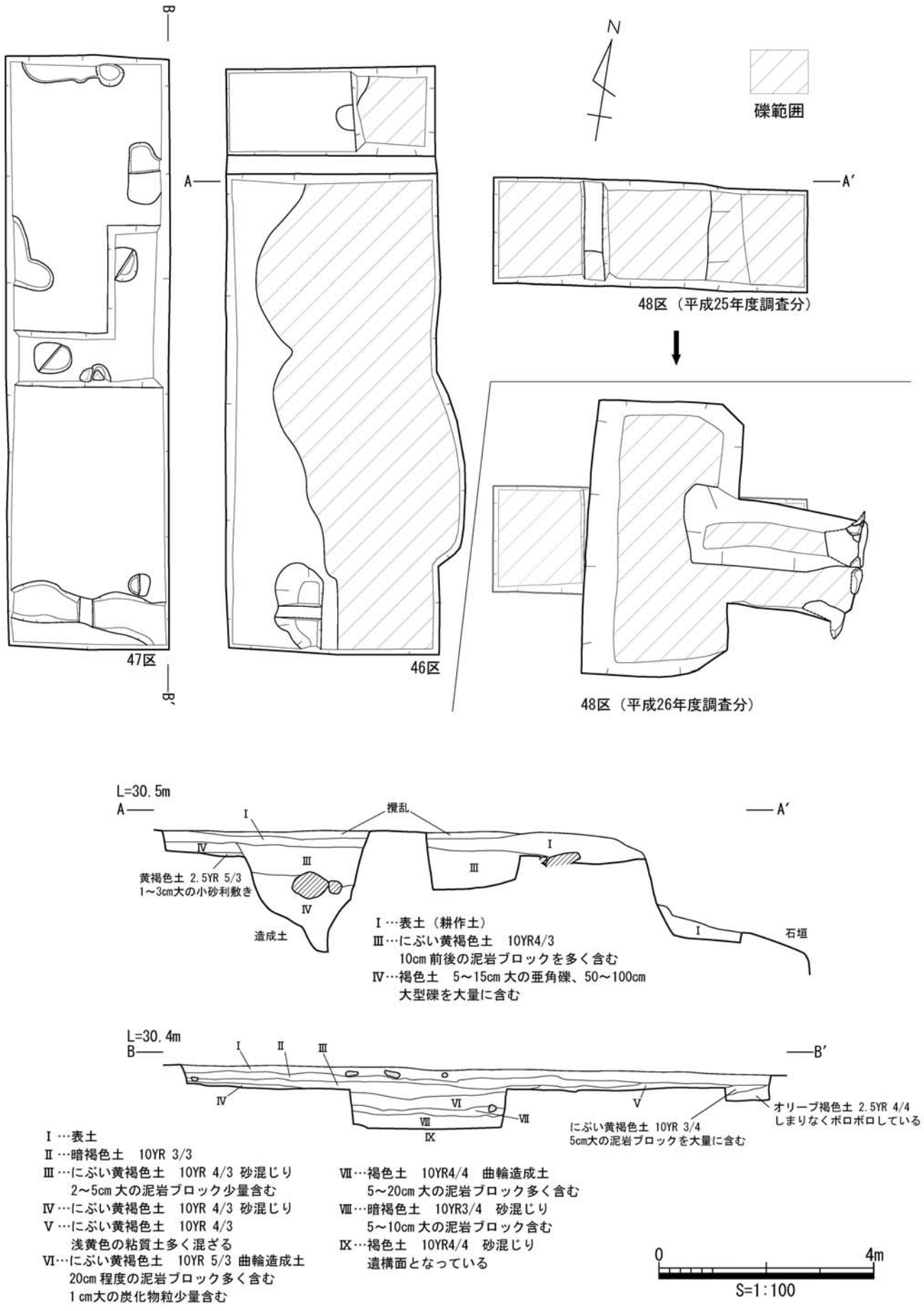
掘り下げを行った礫群の中から、踏石や袖石垣など階段に関係するものを含め、遺構は認められなかった。また、落込みの西側斜面の精査と観察を行ったが、階段に関係するような切通しの痕跡も見られなかった。

47区は、46区が礫の投棄による影響が大きかったため、当初の城道関係の確認目的を補足するため46区の西側に隣接して設けた。ピットなどを少数確認したが、46区同様、階段に係るような遺構は検出されなかった。

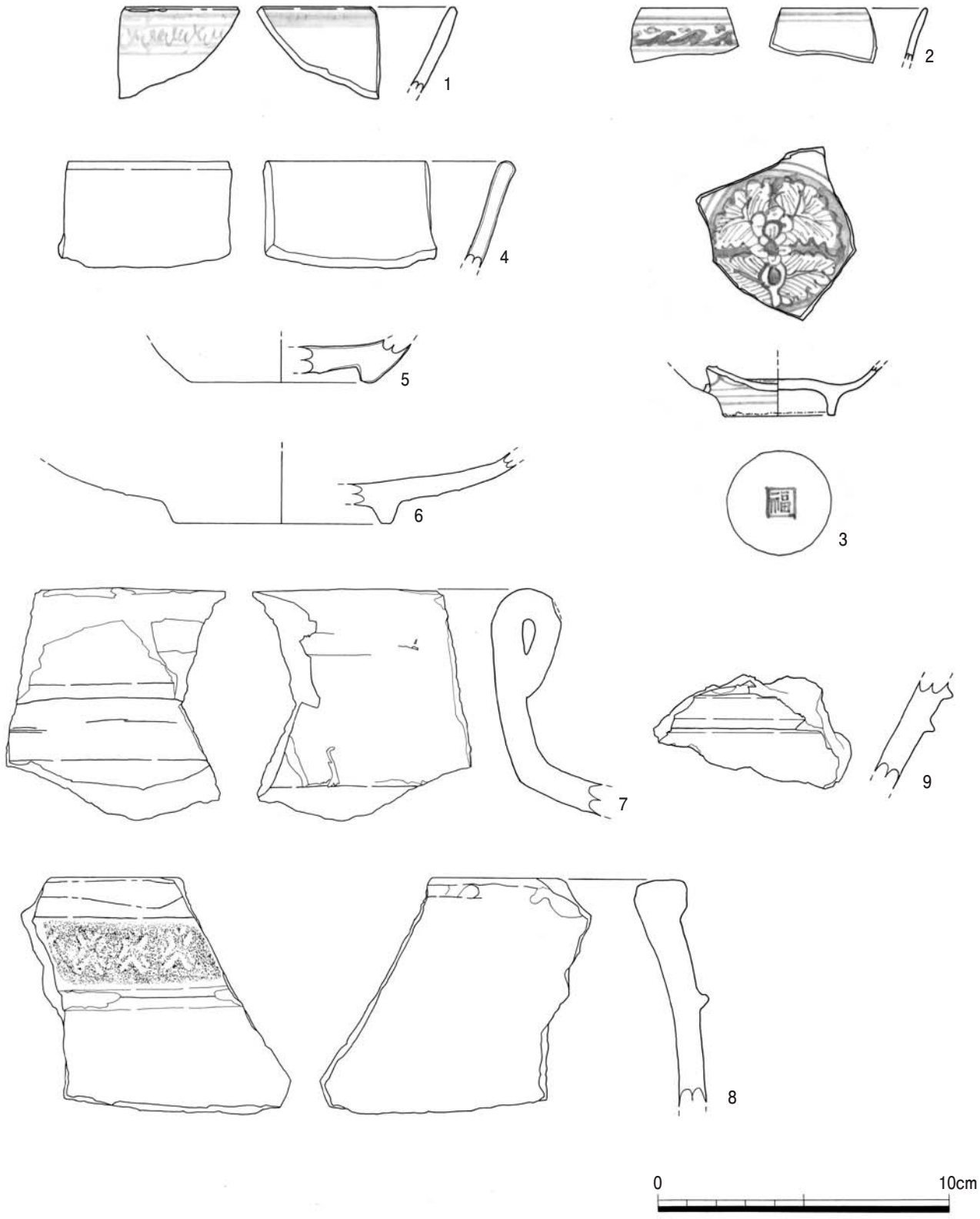
48区は、46区で検出した礫群と東側の石垣との関係性を確認するために設定した調査区であり、25年度から26年度にかけて調査を行った。結果、46区で検出した礫群は、東側の石垣天端の背後まで連続している状況を確認した。

石垣側からみると背後に礫が７～８ｍほど控えている状態であり、石垣の裏栗石としては異常に厚く、築石相当の巨石が多くみられる点も併せ、裏栗としての評価は難しい。状態としては、曲輪５の東側縁辺を大きく掘削してできた落込みに大量の礫が投棄され、その押さえとして現在の石垣が築かれている形である。

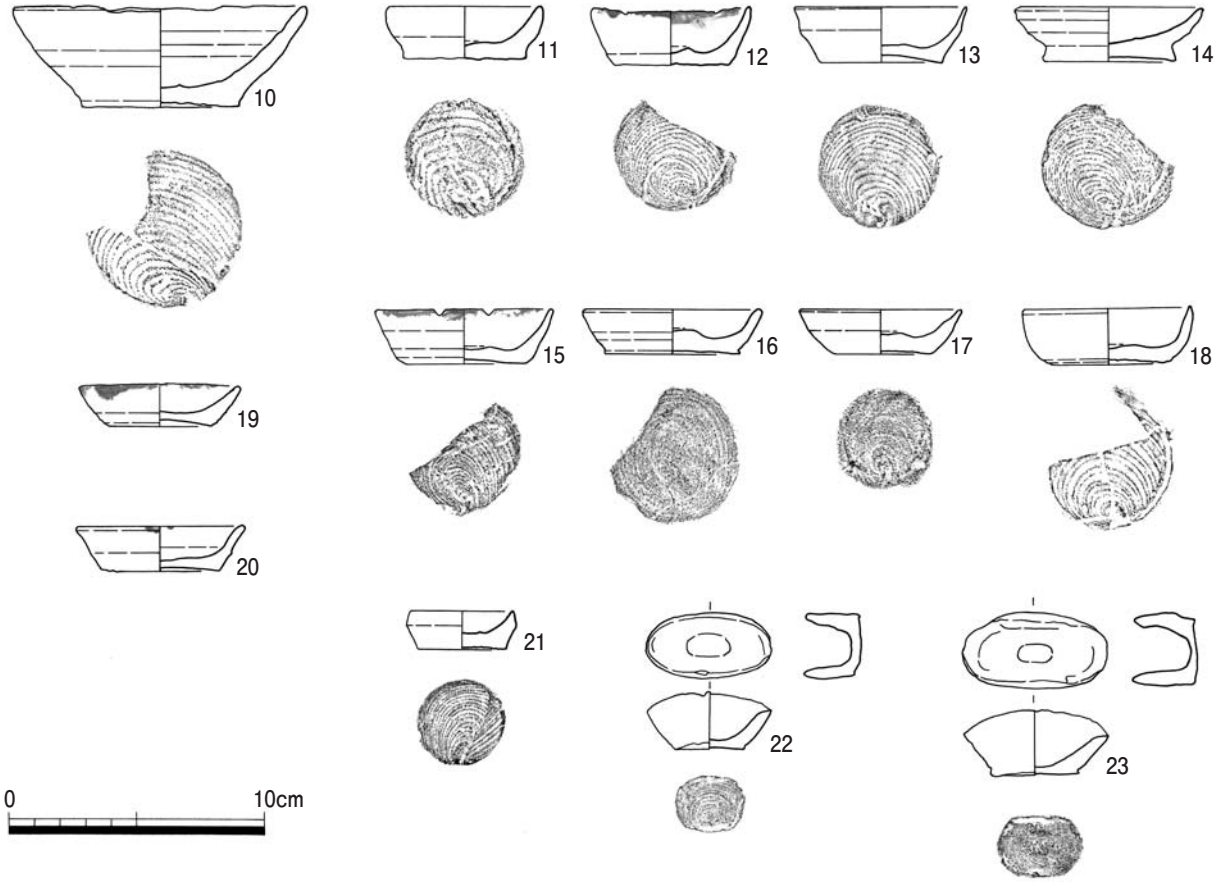
なお26年度に二ノ丸地区で実施した地中レーダー探査においては、このような礫の堆積状況が調査区付近だけではなく、曲輪５東側縁辺の大部分に広がっていることを示す結果を得ている。



第 8 図　46区・47区・48区　実測図（S＝1/100）



第 9 図　46区・47区　出土遺物実測図①（S＝1／2）



第10図　46区・47区　出土遺物実測図②（S＝1／3）

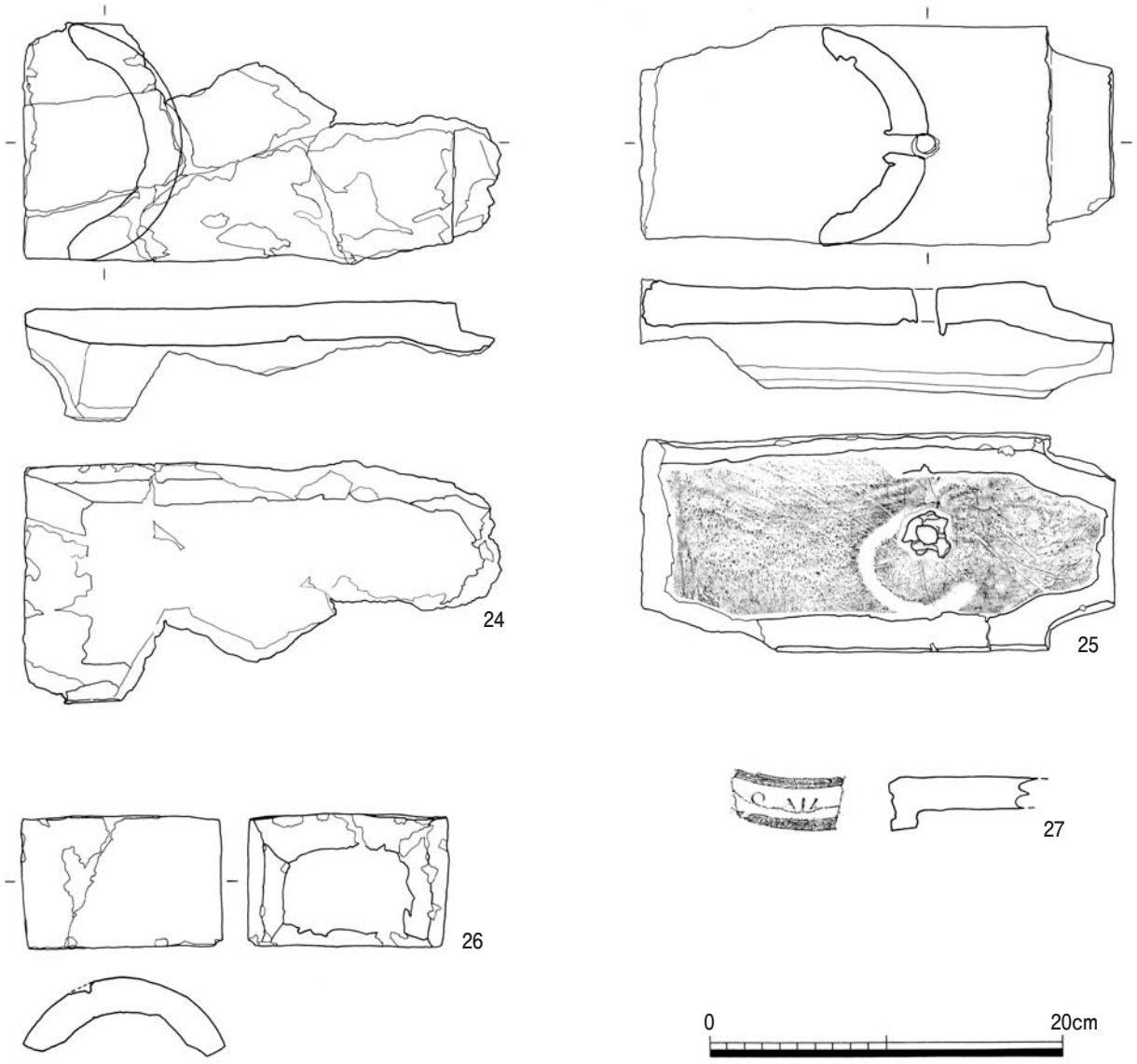
遺物： 1～3は青花の碗である。1は口縁部外面に複数の界線を入れ、その間に文様を描く。口縁部内面にも界線が入る。2は口縁部内外面に界線を入れ、外面には波濤文帯を描く。3は饅頭心碗である。見込部分に草花文を描き、高台内に角福を描く。高台外と高台際に界線が入る。

4・5は青磁の破片である。4は無文の碗口縁部で、口縁端部が僅かに膨らむ。5は底部で、碁笥底状である。6は白磁碗の破片である。見込には目跡が残る。高台脇には砂粒がまばらに熔着している。

7は陶器の壺と思われる。口縁部は玉縁状となり、外面には褐釉を施釉する。

8・9は瓦質土器の火鉢である。8は肥厚した口縁部下に十字のスタンプ文と突帯を巡らす。9は胴部の破片で、二条の突帯を巡らし外面は燻してある。

10～23は土師質土器である。10は土師質土器の坏である。胎土に大粒の赤色粒子を含む。器面はナデによる凹凸が残る。11～20は小皿である。12・13・14・15・19・20は口縁部に煤が付着している。13・15・16・17・18は見込にドーナツ状の高まりを持つ。11～20のいずれも胎土に赤色粒子を含む。底部は判別の難しい20を除いて全て右回転の糸切りである。11は糸切りの後に平行線の痕が残る。21はミニチュア土器である。精良な白色の胎土をしており、僅かに赤色粒子を含む。底部は左回転の糸切り痕に加え、異なる方向の糸切り痕を残す。22・23は耳皿である。どちらもミニチュアからの作り出しである。胎土には赤色粒子を含む。22の底部は右回転糸切りである。23は糸切り痕をユビナデに



第11図　46区・47区　出土遺物実測図③（S＝1／4）

よって消している。

24は丸瓦である。凸面はヘラ状工具によってナデを施す。凹面には布目痕、吊紐痕、コビキA痕を残し、周縁には面取りを施す。**25**は軒丸瓦である。凸面はヘラ状工具のナデ痕、棒状工具のオサエ痕が残る。凹面には布目痕、吊紐痕、コビキA痕が残る。釘穴を有し、凹面は釘穴からはみ出した胎土が瘤状に残る。瓦当部は欠損している。**26**は面戸瓦で、凹面はコビキA痕を残し周縁は面取りを施す。**27**は軒平瓦で、瓦当部の文様は三葉文、唐草文である。

（４）49区・50区

曲輪５において実施した調査区である。26年度は曲輪５における遺構の分布および検出深度を確認するため、十字状のトレンチを設けて調査を行った。南北方向の調査区が49区、東西方向を50区とした。49区は26年度のみの調査であり、50区は追加調査を要する状況があったため、27～28年度に西側の一部を拡張する形で調査を行った。

49区では、50区との交点より北側の範囲で、礫を充填した暗渠状の溝跡が３条みられた。東寄りの２条は、地表または表土直下からの堀込みで、近現代の耕作に伴う排水溝と考えられる。このほかピットが僅かに確認された。

一方、50区との交点付近から南側の範囲では平面的に遺構の検出はなく、土層の確認のため、最大で１ｍ余りの掘り下げを行った。結果、地山の砂泥互層が緩やかな南落ちの傾斜で堆積している状況を確認した。砂泥互層は、潮位の変化と砂泥の比重差により海底で形成されるものであり、城跡の南に接していた海の海底面が隆起したと考えられる。曲輪５の西側の露頭で貝殻片や水性研磨された小砂利が観察される点も関連があるだろう。

50区では、西端に近い付近で５～８cm 程度の玉石を充填した溝状遺構（SD01）を検出した。方向は東西で、延長約3.5m、幅約35cm、深さ約20cm の規模である。

SD01の東側では、素掘りの溝（SD02）が東に向けて７ｍほど延びる状況がみられたが、南側は徐々に浅くなり収束している。検出深度も浅くなっており、耕作等による削平の影響を受けていると考えられる。

50区の中ほどでは、49区でもみられた暗渠状の礫を伴う南北方向の溝跡などを検出した。50区東端の曲輪５縁辺付近においては、25～26年度調査の46区・48区と同様の、大量の礫投棄状況を確認した。先述の地中レーダー探査により、こうした状況が曲輪５東側縁辺の大部分で広がっていることが予測されたが、調査掘削により相違がないことを確認した。

50区の東端には低い石積みがあり、根石部分の確認を行った。結果、地山となっている固い泥岩層の上に石が直接のる格好であり、石垣構築にみられる地業の痕跡は認められなかった。

50区の西端付近でみられた玉石を伴う溝は、重要遺構の一部である可能性が高いと判断したため、平成27年度から28年度にかけて周囲を拡張する形で調査を行った。28年度調査の段階で、大幅に調査区拡張を行い、50区－１～50区－６と６区画に区分した。

トレンチ調査で検出していたSD01の周囲の状況だが、SD01の東西両端に直交方向の溝を検出した。西側がSD03、SD04である。またSD01から南に４ｍの位置には、SD01と平行する東西方向の溝（SD10）を検出した。SD01、SD03、SD04、SD10の４条の溝の内縁で東西約2.8m、南北約3.5m の方形の区画が認められる形である。

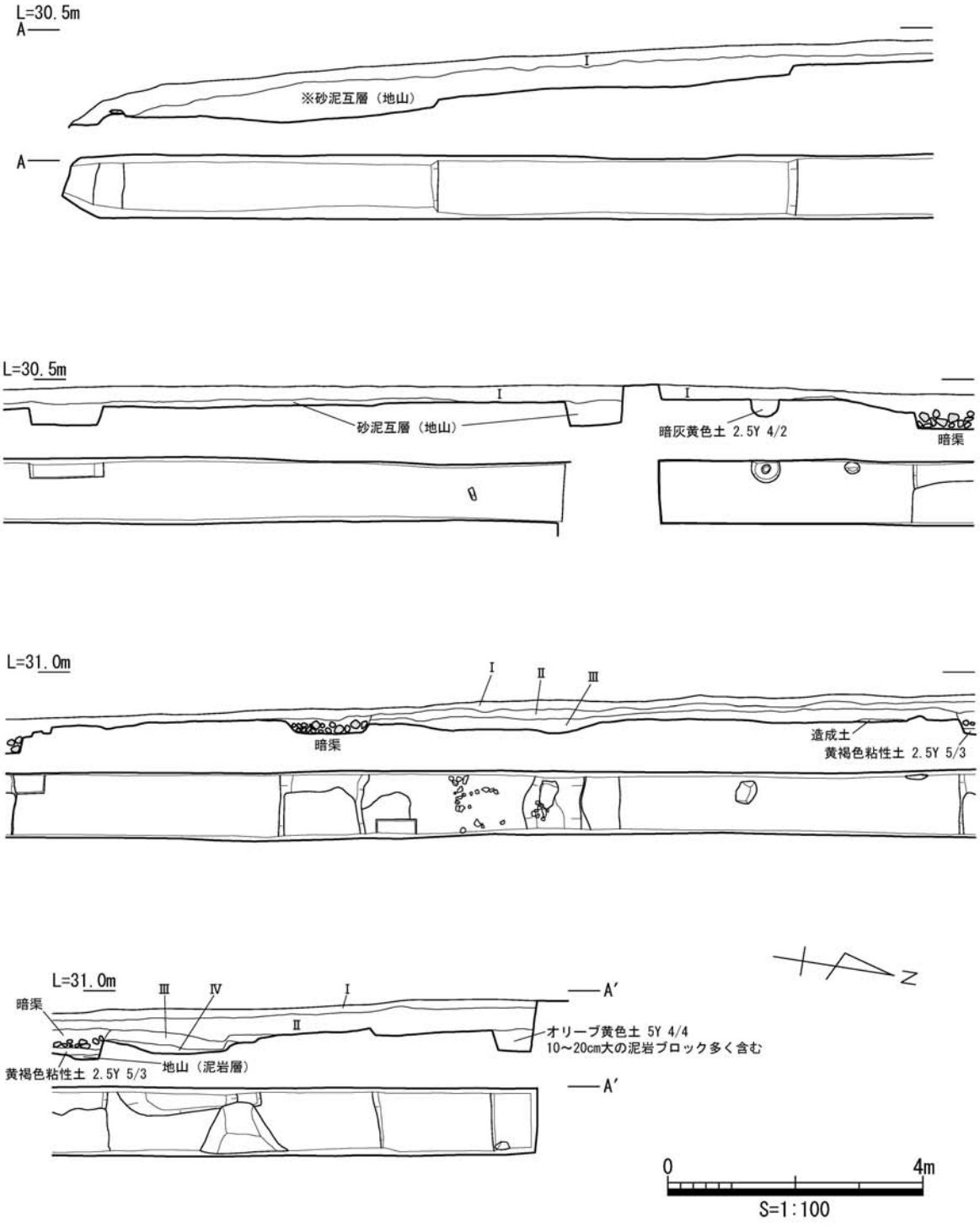
SD03は幅30～40cm 程度で、SD01との交点を起点として南側へ約９ｍの延長があり、50区－３内で一回り規模が大きい溝のSD19と合流する。深度は約50区－１内で40cm 程度であり、南にむけて緩やかに溝底が深くなる傾向が認められる。素掘りの溝であるが、堅い泥岩を工具により丁寧に掘り抜いており、溝の側壁はほぼ垂直に近い。溝の埋土は、地山の泥岩を切り崩したようなブロックが大量に含まれており、比較的短い期間で人為的に埋没した可能性が高い。また溝の底付近では、完形品の土師質土器が複数出土している。

SD03から南の50区－１へ続いているSD19は、幅50～70cm程度で深さは90cm程度ある。南側に向けて溝底の標高が低くなる傾向にあり、南の崖面まで抜けていることから曲輪の排水機能を持つ溝であったと考えられる。ただし溝底付近では水気が多く、水性堆積を示す砂質土の堆積が少しみられたが、上部の大部分はSD03と同様に地山を切り崩したブロックを大量に含む土砂が堆積しており、やはり短期間に埋没したと考えられる。

50区－４から50区－６にかけては、土坑と溝を組み合わせたような不整形の掘り込みがあり、内部には多くの石材が投棄されていた。投棄されている石は、長さ50～60cmのやや大振りのものが目立ち、整った平坦面を持つという特徴がある。中には、平坦面中央に十字状の細い線刻が残る石もみられた。これらの石は、形状的に礎石である可能性が高く、十字状の線刻は柱の通りを確認するための目印と考えられる。この堀込みは検出深度が浅く、SD16やSD22など他の遺構を切り込んでおり、相対的に新しい遺構である。日野江城の廃城以降の後世において、耕作などの支障となるため、掘り込みを設けて埋め込んだものと考えられる。本来は、近辺に礎石立ちの建物があり、その礎石として配列されていた可能性が高い。

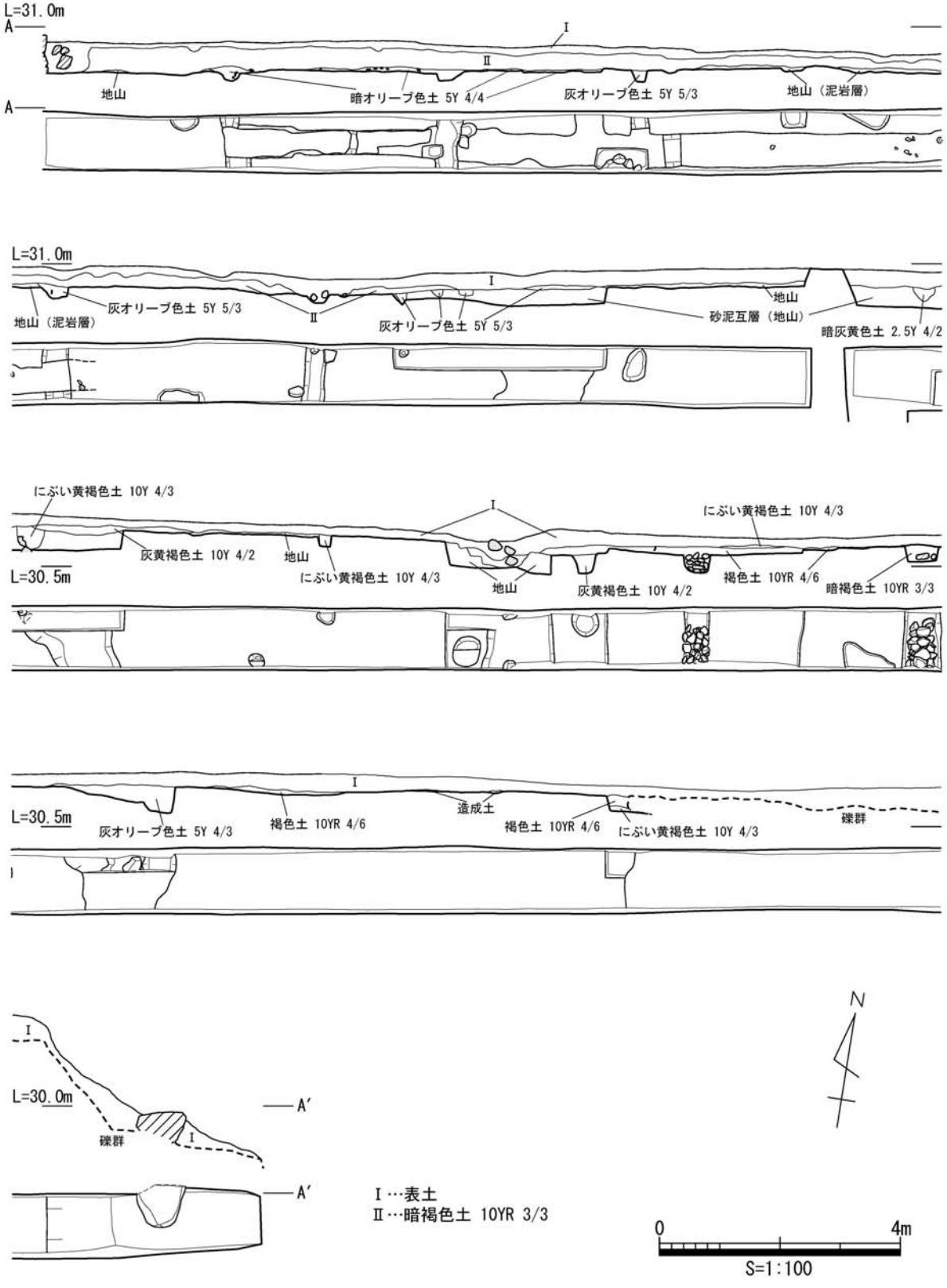
遺物： **1**は青磁の碗である。内外面ともに無文である。**2**は青花の碗である。見込部分には界線と草花文と思われる文様を描く。外面は高台脇に界線を描き、腰部にも文様を描く。高台内は高台を削り出しによって成形することで無釉となる。胎土は精良であり多少黄味を帯びる。**3**は青磁の香炉である。口縁部は内向する。内面の口縁部下は施釉しない。

4～9は土師質土器の皿である。**5・6・7・9**の口縁部には煤が付着する。いずれも底部は右回転糸切りであり、胎土に赤色粒子を含む。

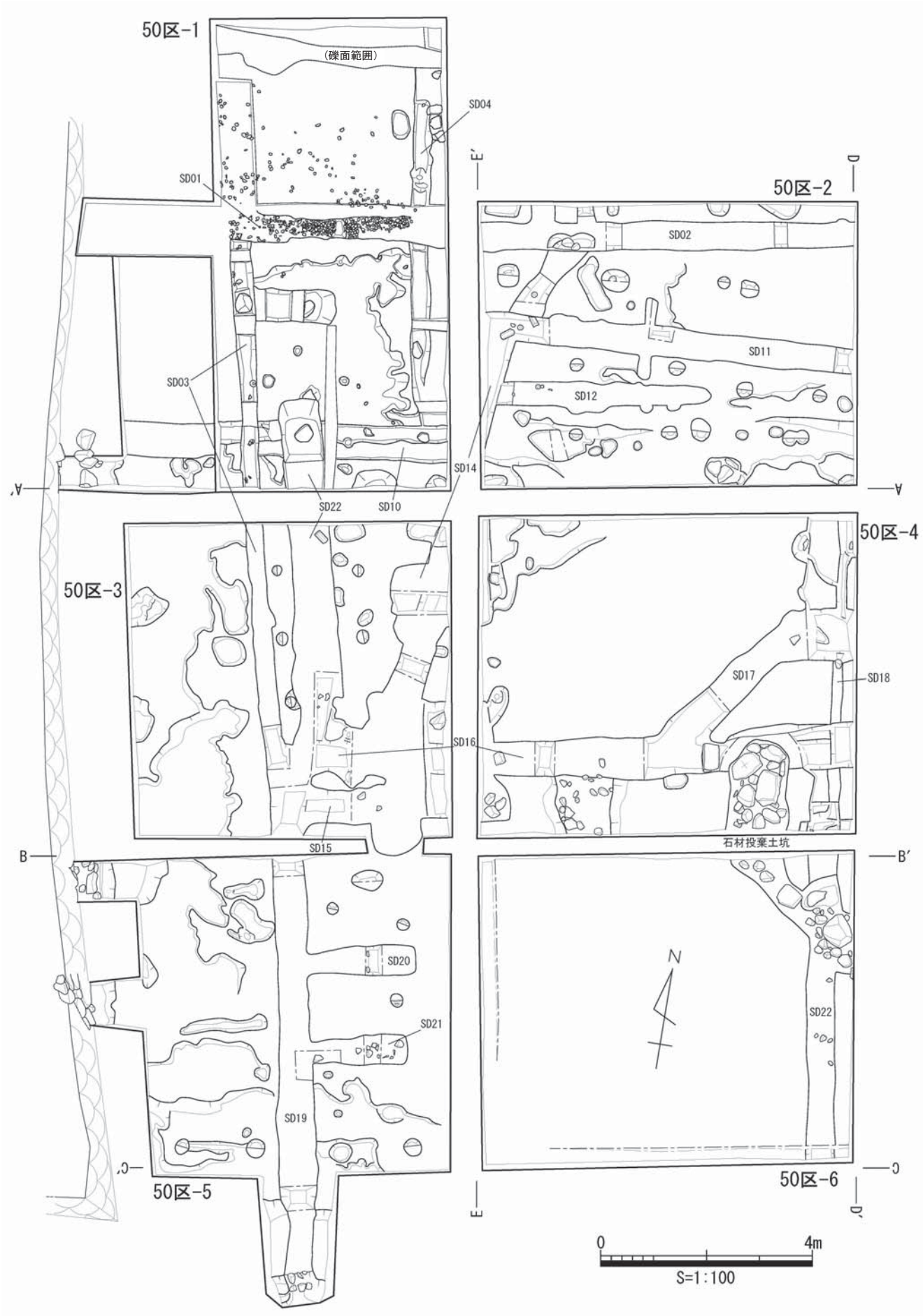


Ⅰ…表土
Ⅱ…にぶい黄褐色土 10YR 4/3
Ⅲ…黄褐色土　2.5Y 5/3
Ⅳ…黄褐色土　2.5Y 5/3　粘性やや強い　褐色土 7.5YR 4/6 少量混ざる
※2～4cmほどの薄い砂質土層と泥岩層が交互に堆積
　海底の水性堆積層が隆起したものと考えられる

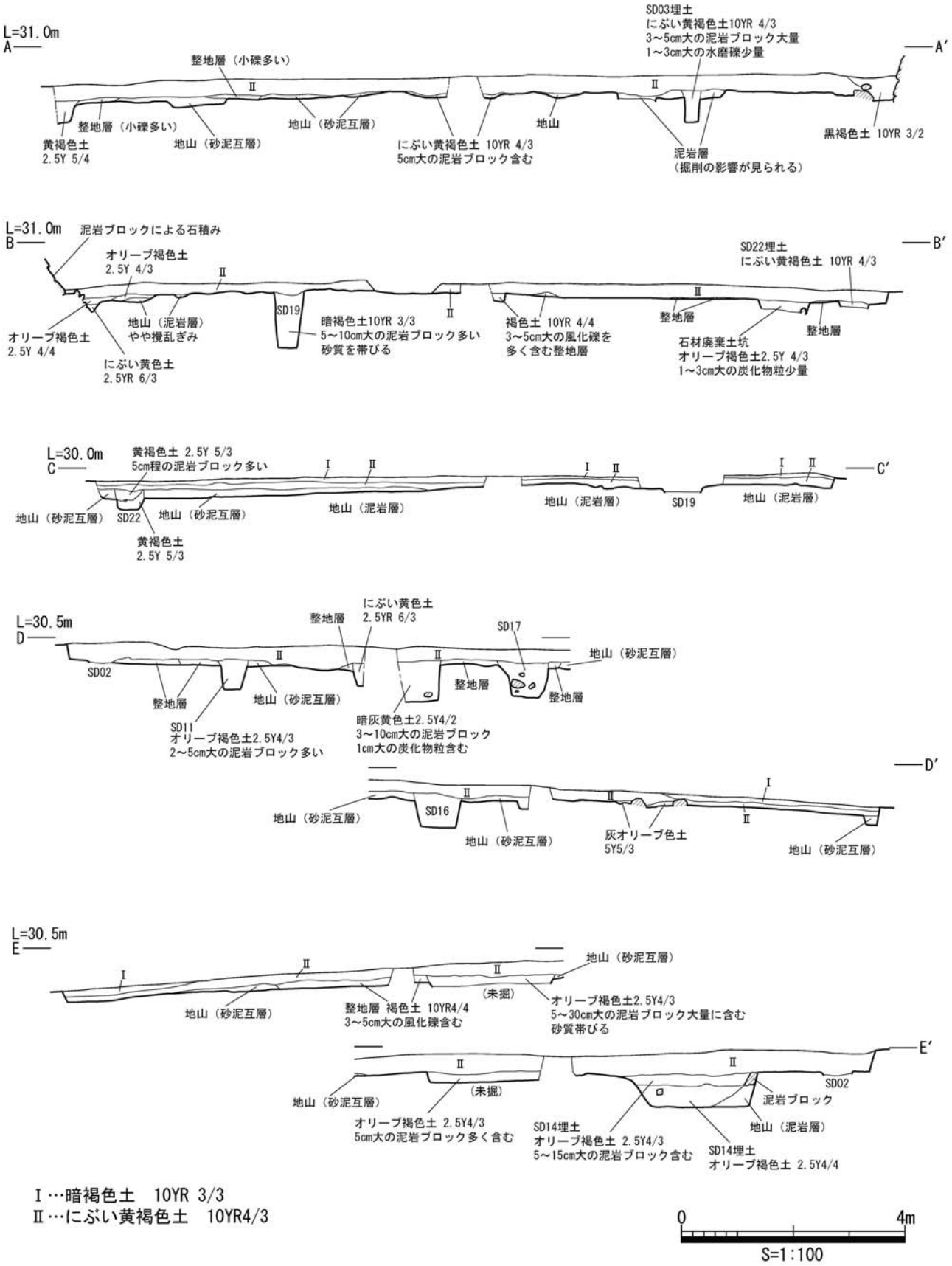
第12図　49区　実測図（S＝1／100）



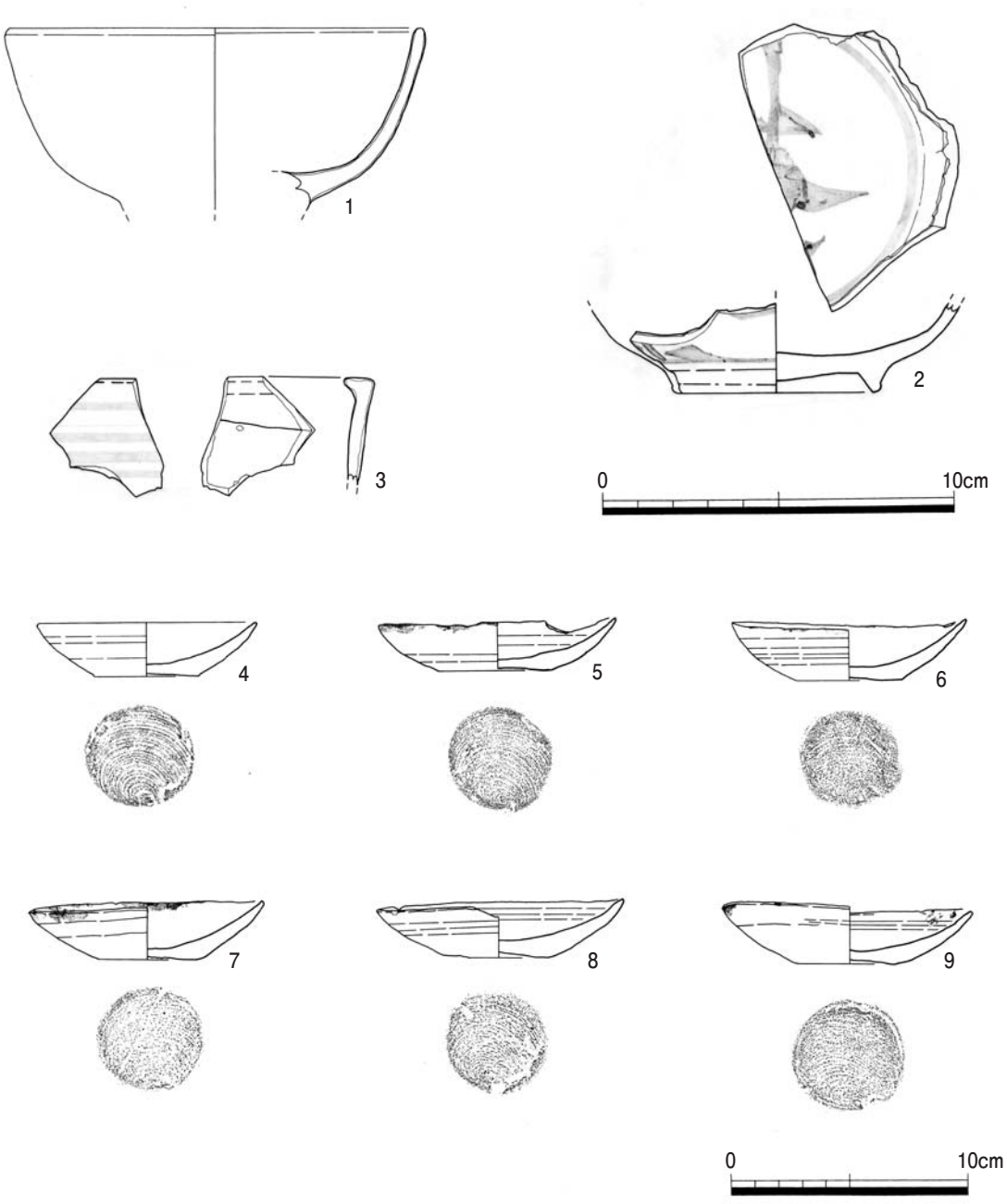
第13図　50区（平成26年度調査分）実測図（S＝1/100）



第14図　50区（平成27・28年度調査分）平面図（S＝1/100）



第15図　50区（平成27・28年度調査分）土層断面図（S＝1/100）

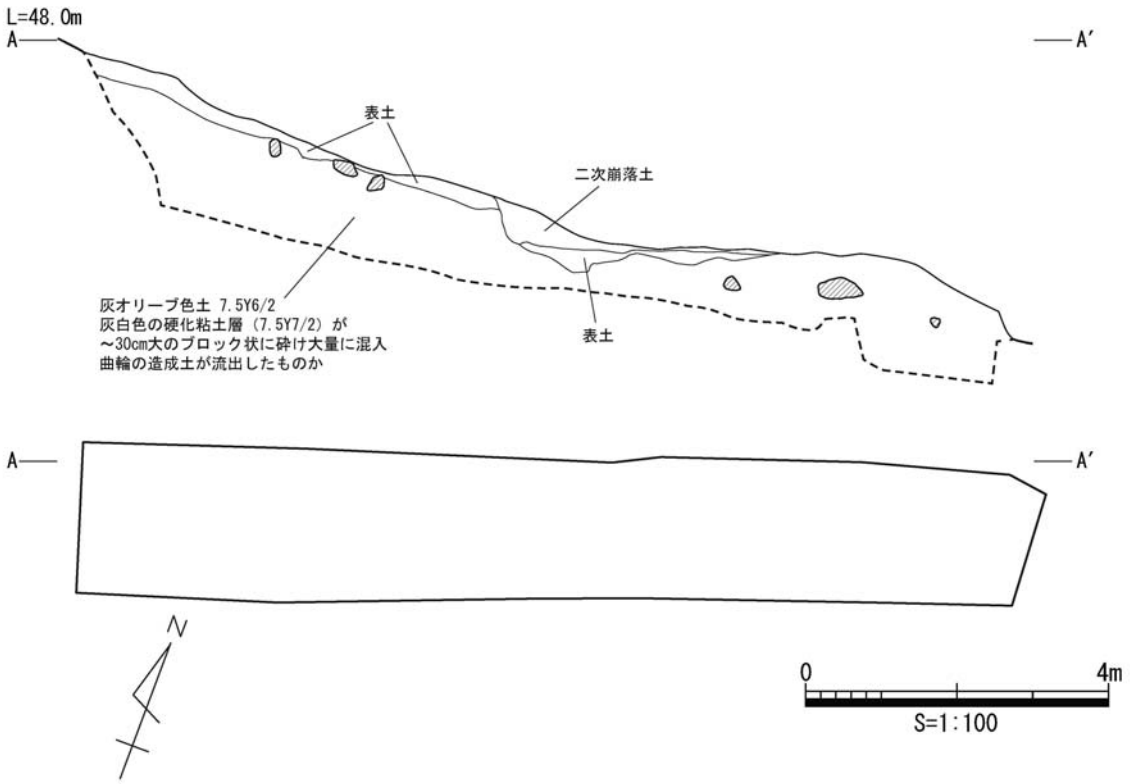


第16図　50区　出土遺物実測図（１～３：Ｓ＝１／２、４～９：Ｓ＝１／３）

(5)51区

本丸曲輪３の東側にみられる大規模な崩落面において、崩落土の堆積状況を確認するためトレンチを設けた。崩落は昭和57年の集中豪雨、いわゆる長崎大水害の際に発生しており、現在まで対策整備には至っていない。

人力掘削により一定の掘り下げを行ったが、崩落土の堆積が非常に厚く、人力での掘削を続けることは安全上困難と判断し、崩落以前の面を確認するには至らなかった。史跡の保存、防災対策としてさらに対応が必要な地点である。



第17図　51区　実測図（S＝1/100）

（６）52区

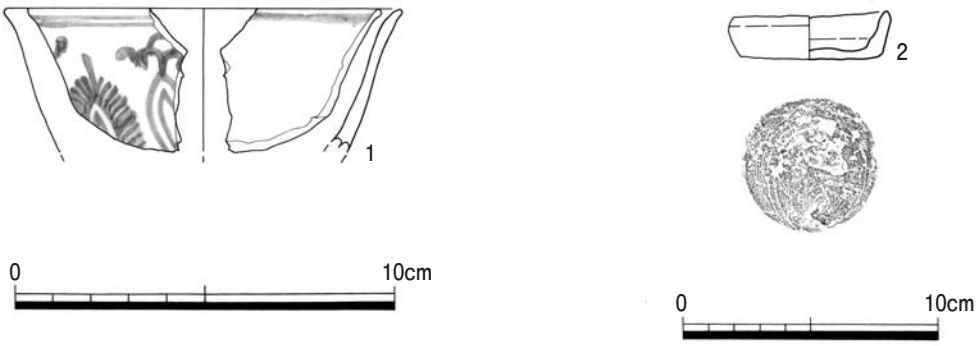
曲輪５の南東部において遺構の分布等を確認するため、27年度に実施した調査区である。調査区は便宜上４分割し、北東より時計回りに52区－１～52区－４とした。

52区全体に渡り、南北方向に暗渠状の溝跡が走る状況を確認した。溝跡は概ね幅50～70cm 程度で、深さは20～30cm 程度となっている。溝内部には礫を充填し、上部を粘質土で覆う構造となっている。廃城以降の耕作時に利用された排水施設と考えられる。

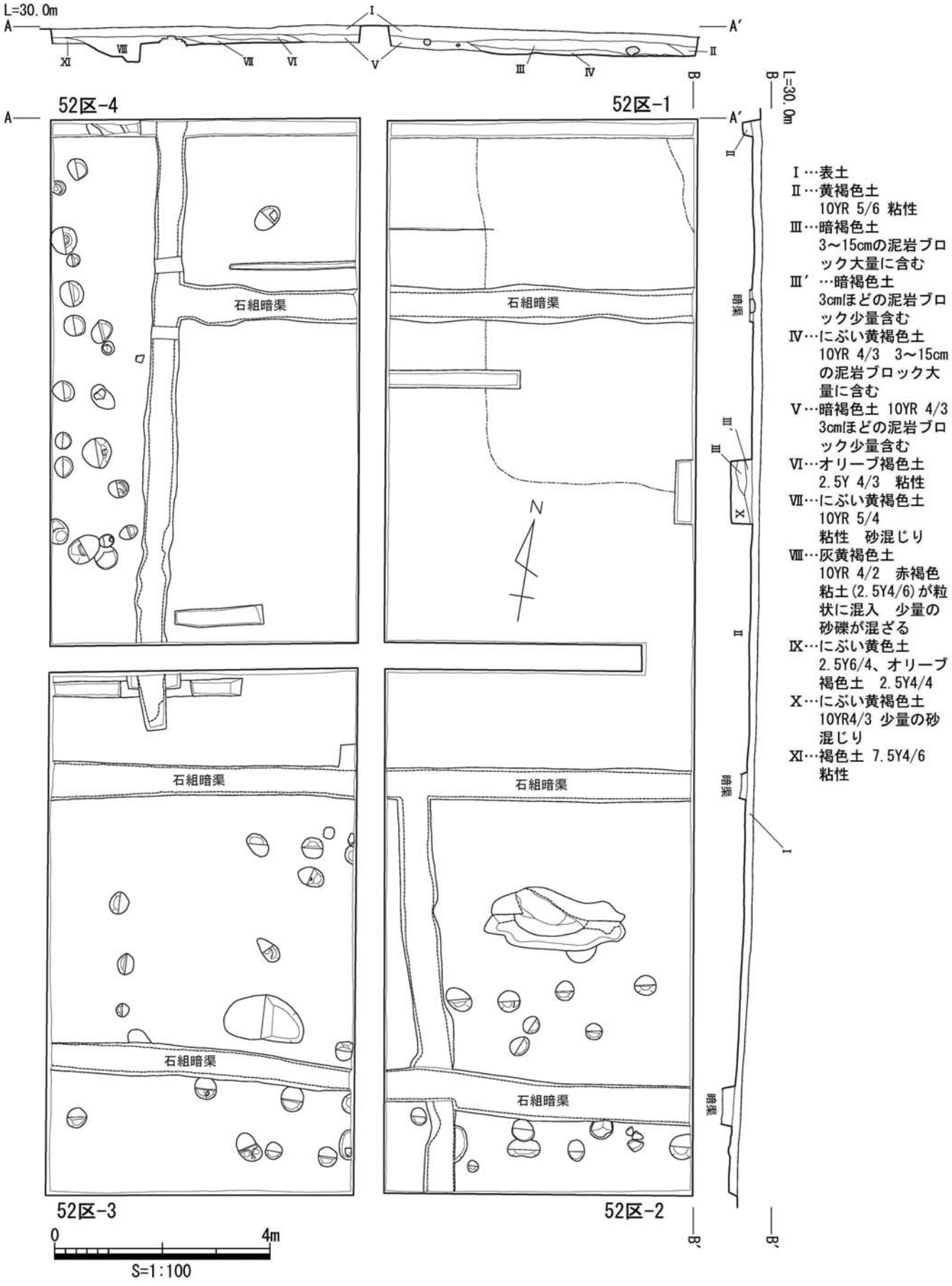
52区－２の中央付近では、東西約２m、南北約１m の不整形の土坑状の掘り込みがあり、内部には礫が投棄され、中央には築石相当の巨石が一石みられた。機能は不明であるが、廃城以降の耕地利用時に支障となる石を投棄した可能性などが想定される。

日野江城に伴う可能性がある遺構として、52区－２および52区－３の南寄り、52区－４の西側で、ピット状遺構を複数検出しており、掘立柱建物に伴う可能性がある。調査期間の関係により、今回は調査区拡張、プランの追跡は行わなかったが、今後追加の調査を要する。

遺物：1 は青花の碗である。口縁部は外側に反る。口縁下の外面に界線を二条、内面に界線を一条描く。胴部には文様を描く。胎土は精良である。**2** は土師質土器の小皿である。体部内外面はナデにより成形されるが、見込部分は不整形である。胎土は赤色粒子を含む。底部は左方向の回転糸切りである。



第18図　52区　出土遺物実測図（１：Ｓ＝１／２、２：Ｓ＝１／３）

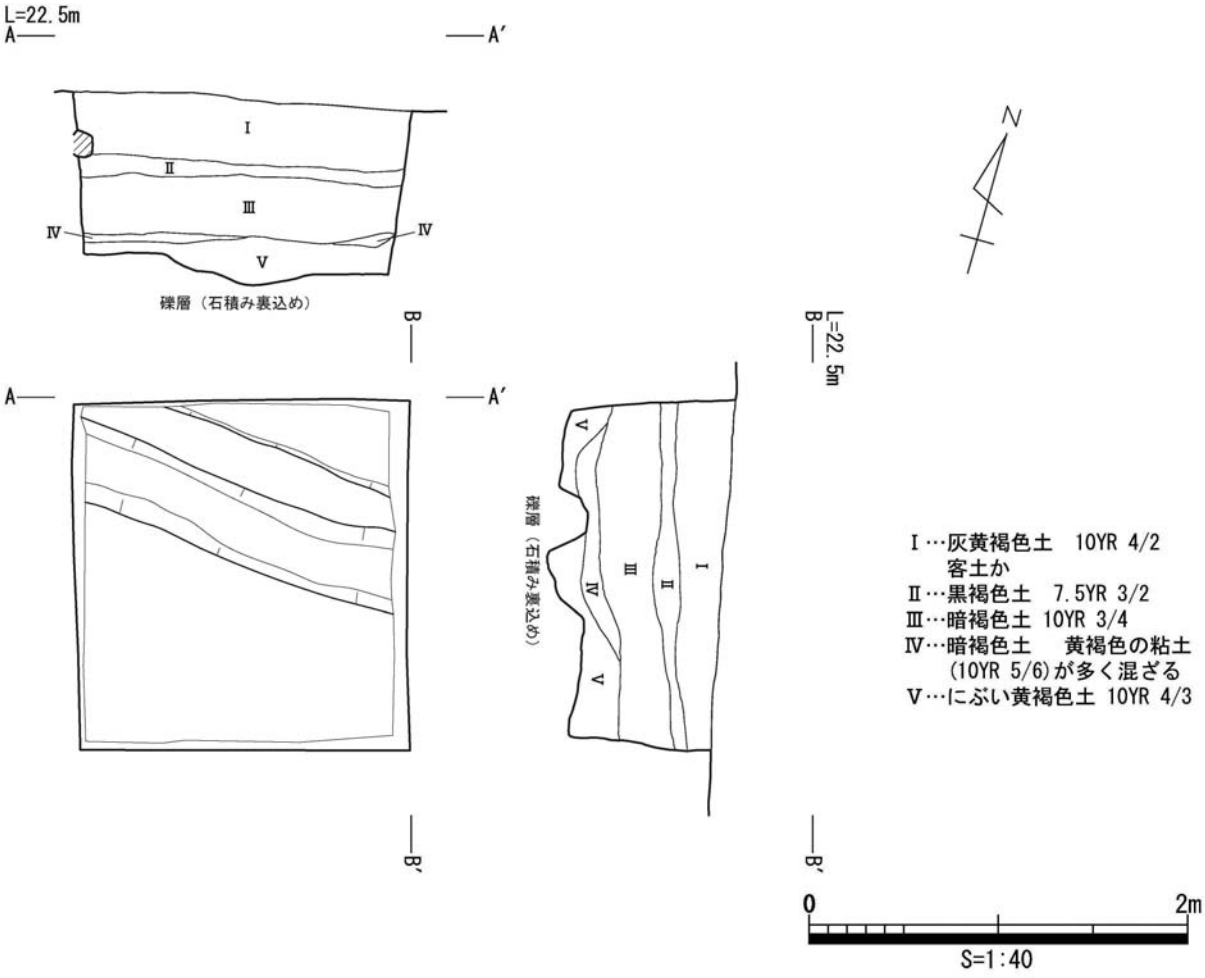


第19図　52区　実測図（S＝1/100）

（７）53区

平成27年度に実施した調査区である。曲輪６と曲輪７の間に見られる突出した石積みの性格を確認するため、天端側でテストピットによる確認を行った。地表より約90㎝までは石垣の裏栗石に相当する礫の充填はなく、良質の土砂が堆積しており、以下に礫石が堆積している状況であった。また礫層の検出面近くではビニール片がみられ、近現代の改変の影響を受けていると判断される。

当該部分の石積みの形状も踏まえ、当該地点は、東西両側で検出されている城道（階段）に連なる切通しが本来は抜けており、廃城以降に人為的に埋没したものと考えられる。



第20図　53区　実測図（Ｓ＝１/40）

（8）54区・55区

曲輪６中央付近から南側にかけての遺構分布等を確認する目的で実施した調査区である。１ｍ幅を基本とするトレンチを十字状に設定し、南北方向を54区、東西方向を55区とした。55区は26年度に実施し、54区については南端付近を拡張しての追加調査を要した事から、26～28年度の３か年で実施した。

55区は、54区との交点から西側で直径20～40cmほどの小規模なピットが10基余り散見される状況である。ちょうど54区との交点付近から東にかけては東西約３ｍの幅で緩やかな落込みとなっている。落込み内の一部には集石状の礫の集中があり、集石内には径30～40cmほどの被熱痕がみられた。礫の直上からは滑石製の石鍋片などの遺物が出土している。

落込みのさらに東には、南北方向に礫を並べた痕があり、これを境として東側は地山の混土礫層となっている。

54区は、55区との交点付近より北側で、上述の55区の状況と対応するよう緩い落ち込みとなる。55区との交点より南側では、柱穴および素掘りの溝状遺構などを検出した。特に注目すべき成果として、54区の南端付近において直径70～110cmほどの大型柱穴を集中的に検出した点が挙げられる。重要遺構の一部である可能性が想定されたことから、54区の南端を拡張する形で平成27～28年度に追加調査を実施した。最終的に、27年度に行った拡張調査区を54区－１、28年度において54区－１の東側に設けた調査区を54区－２として整理した。

54区－１は拡張調査の結果、柱穴が大幅に増加し26年度のトレンチ調査分を含め100基余りを検出した。このほか幅20～40cm程度の浅い溝状遺構などを検出している。柱穴群については掘立柱建物跡としてのプラン検討（第25図参照）を行った結果、南北３間×東西１間のプランを少なくとも２棟分見出す事が可能である。一部、柱穴を欠く箇所があるが、地山となっている泥岩層が非常に硬質で安定しているため、部分的には直立ちまたは礎石立ちであった可能性を想定しておきたい。「柱穴の南北方向の間隔は芯々で約２ｍである。柱の太さを10cm程度考慮するならば、６尺３寸を基本とする京間の寸法を採用した建物であったと考えられる。南北方向は１間が2.5m程度となっており、同じ寸法により割り戻す事ができないが、縁の張り出しによる影響などを考慮しておきたい。」

想定した２つのプランは極めて類似しており、軸がややずれている点、プランの一部に重複がみられる事から、同じ機能の建物が建て替えられた可能性がある。

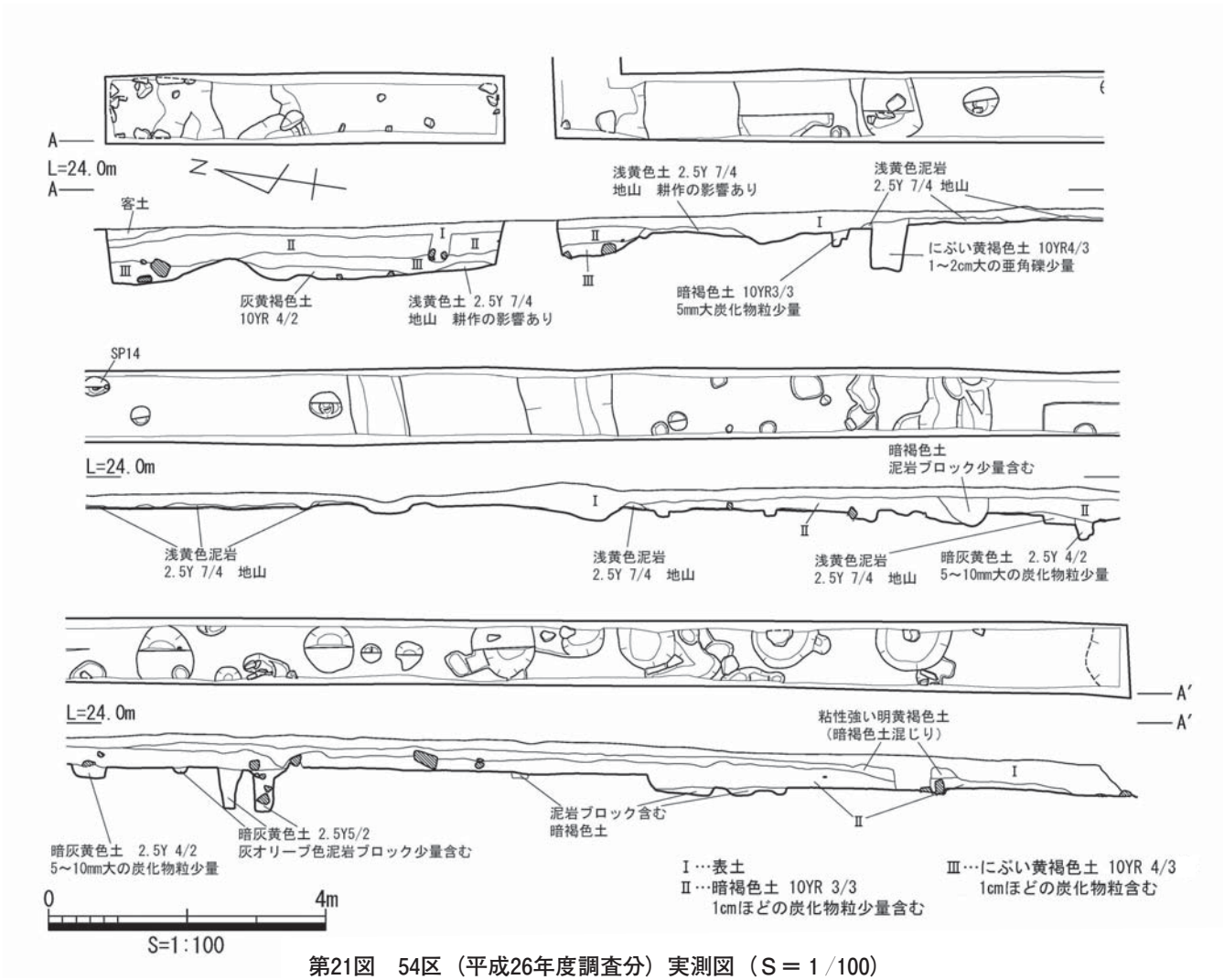
54区－２は、54区－１で検出した柱穴群の収束状況を確認するため、平成28年度に54区－１の東側に設定したものである。結果、54区－２においては54区－１のような大型柱穴はみられず、分布密度も疎らとなっている。こうした状況から、曲輪６区の南側においては54区－１付近が、建物が置かれるエリアの中心であったと考えられる。

このほか54区－２の特筆すべき成果として、２基の土坑の検出が挙げられる。うち１基は、調査区の北寄りで検出した廃棄土坑である。調査区北端では上層より掘りこまれた瓦などの廃棄跡SX01（近現代の遺構）を残す形で調査を行っていたため、およそ南側半分を検出して調査を行った形である。

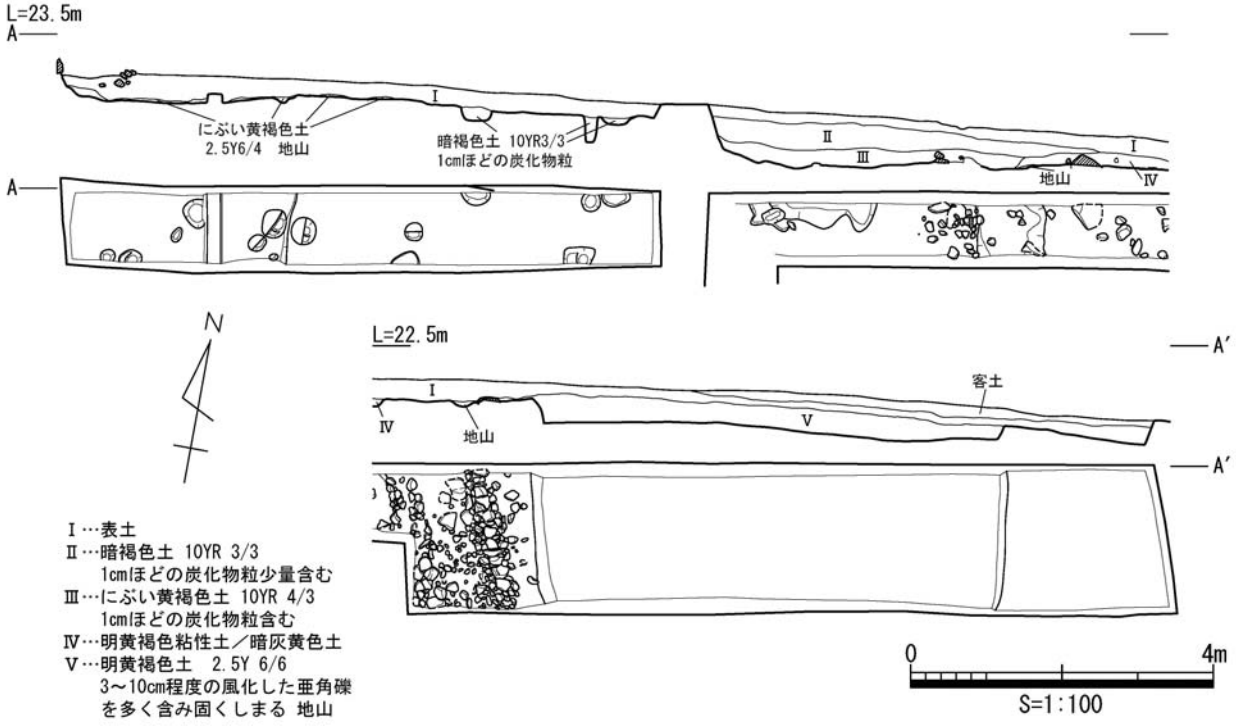
土坑の規模は東西幅が約2.5mで、南北は全面検出を行っていないため不明であるが、同程度と推定される。中央からやや西寄りが最も深くなっており約50cmの深度である。土坑内の埋土は粘性が強く、炭化物粒を多く含んでおり、最深部付近では、20～30cm程度の礫がみられる。遺物は土師質

土器を中心に、16世紀末～17世紀初頭の陶磁器、ガラス製品、金属製品、動植物遺存体などが出土している。土師質土器の器種としては坏、小皿、耳皿などがみられる。

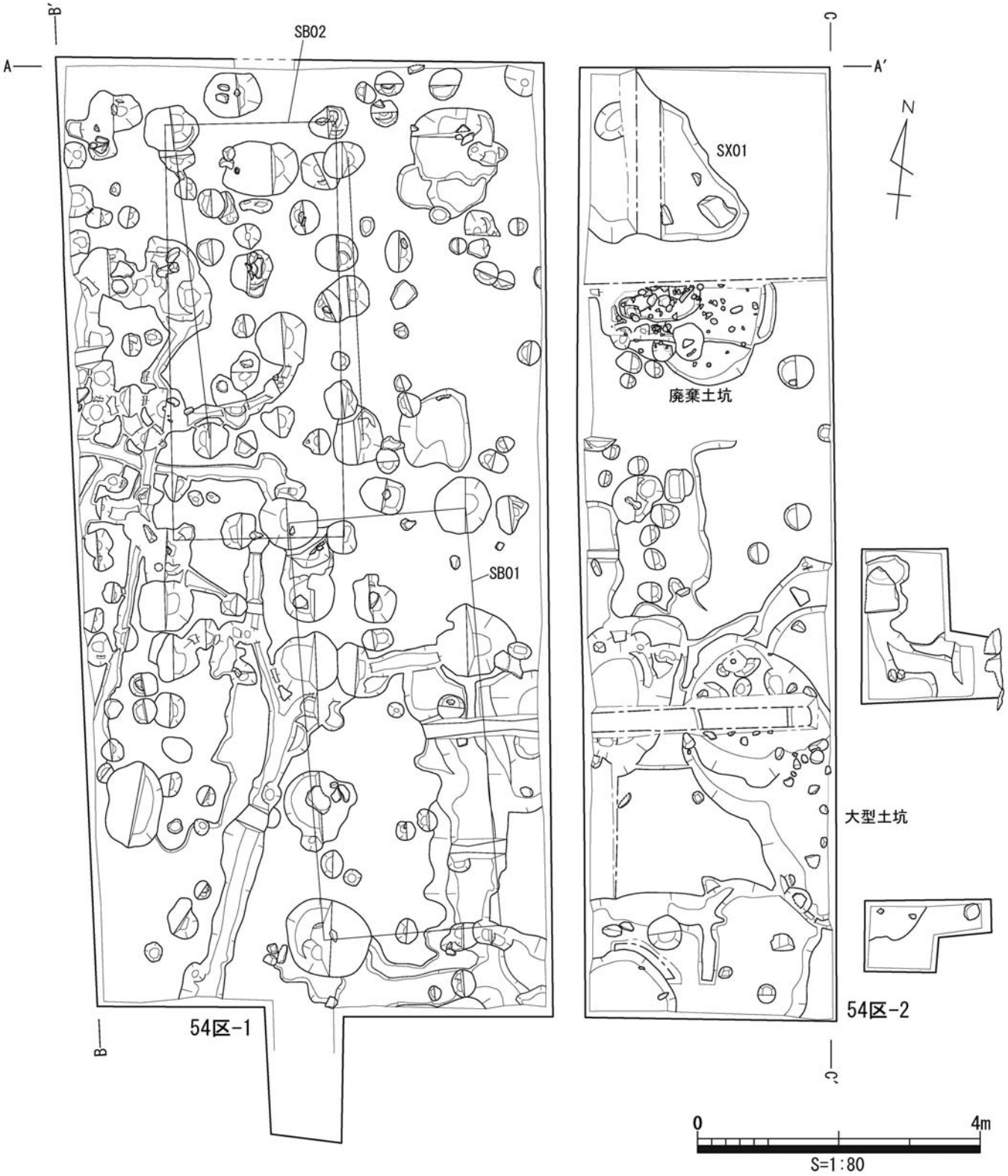
もう一方の土坑は、調査区の南半で検出した大型土坑であり、南北幅5.2m、深さは最大で約70cmである。東西幅および東側の立ち上がりを確認するためサブトレンチによる追跡を行った結果、現在の畑の石積みに改変され不明であったが、東西は幅４m超の規模であることが判った。土坑南側の法肩には、調査区南端の落込みからの水叩きのような石が据えられている。池状遺構の可能性も考えられるが、護岸については確認できなかった。土師質土器や陶磁器の投棄が見られ、上述の廃棄土坑と同じく16世紀末～17世紀初頭頃の遺構と考えられるが、廃棄土坑ほどの密集した出土状況ではない。



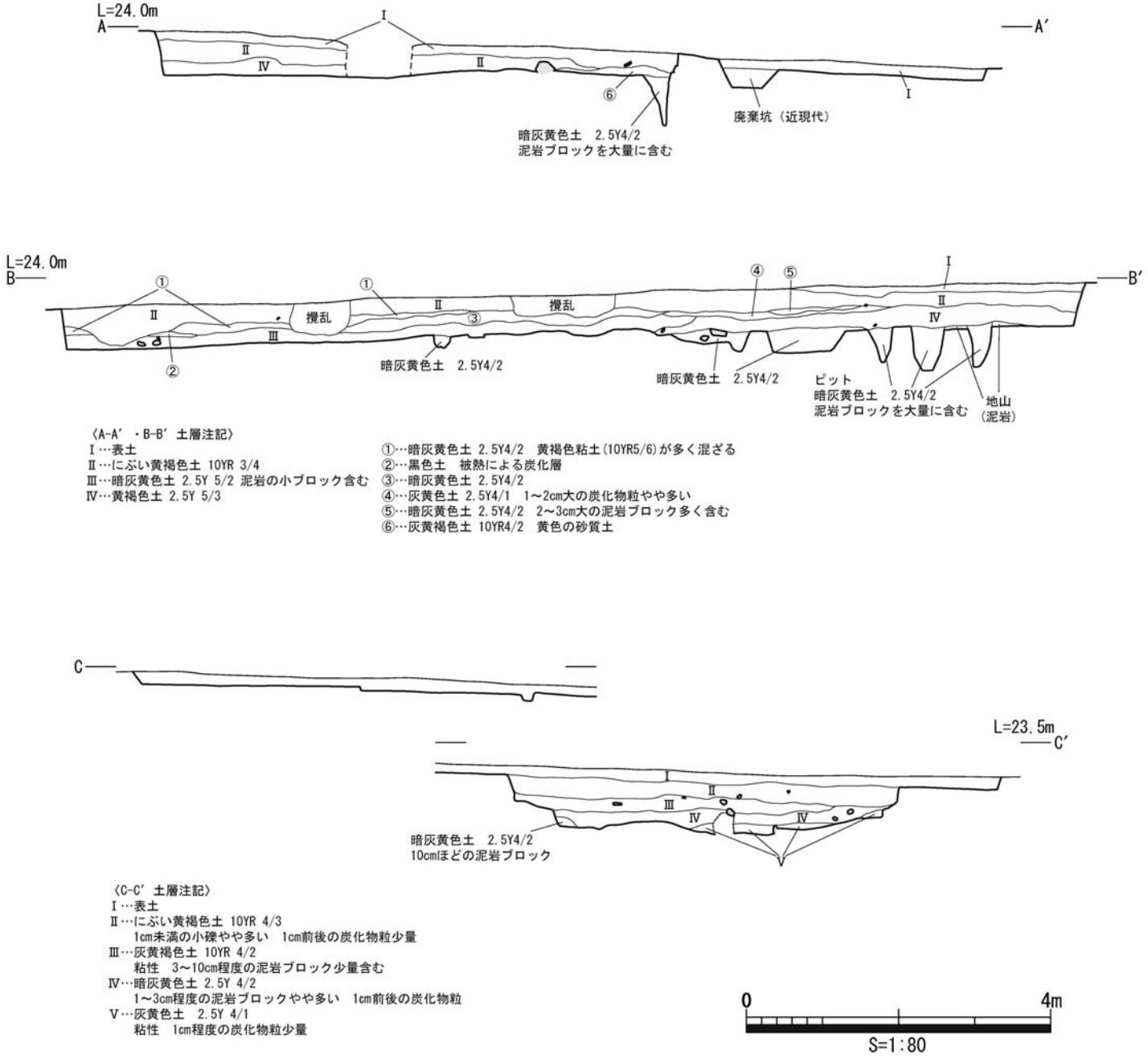
第21図　54区（平成26年度調査分）実測図（S＝1/100）



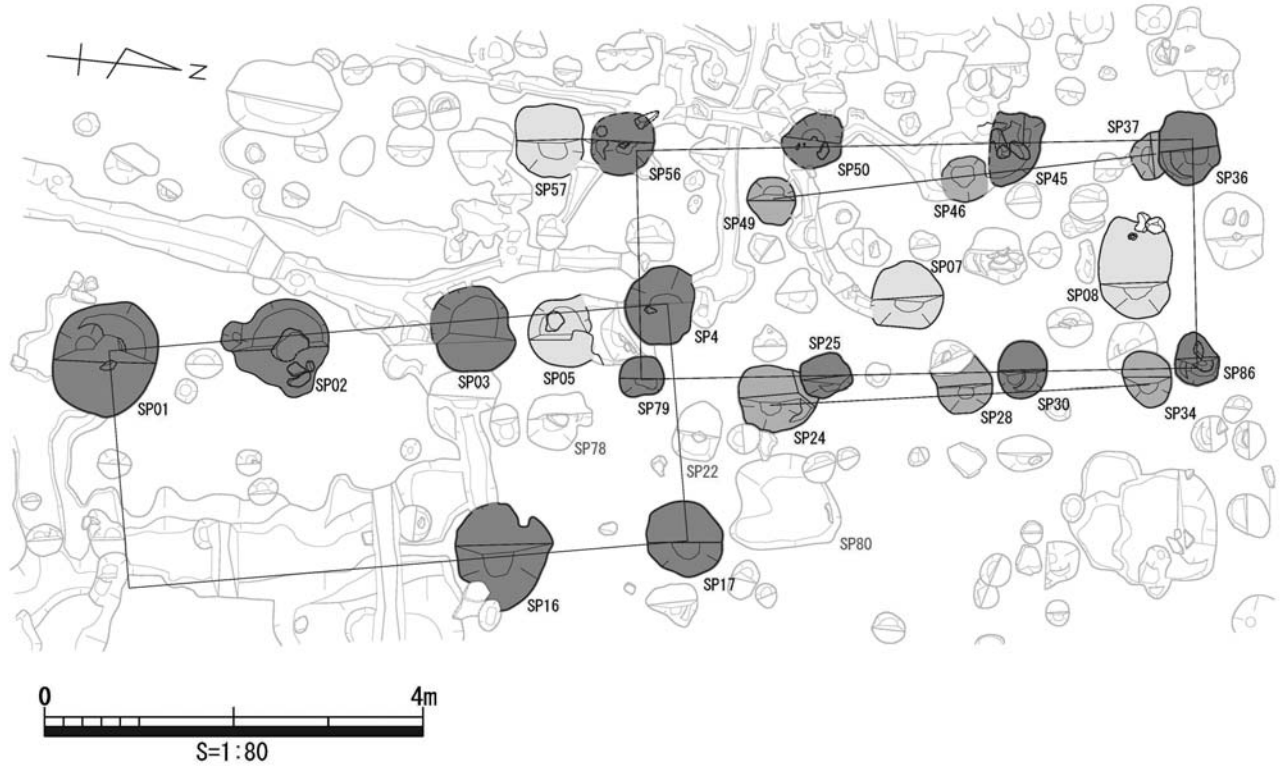
第22図　55区　実測図（S＝1/100）



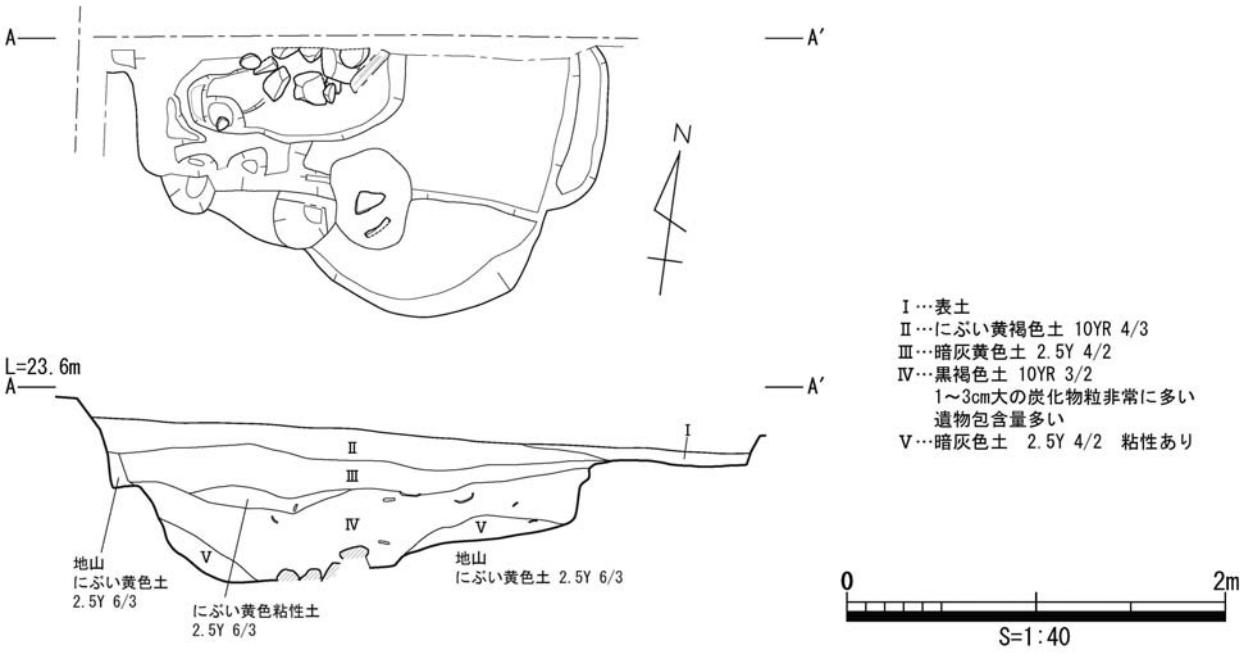
第23図　54区（平成27・28年度調査分）平面図（S＝1/80）



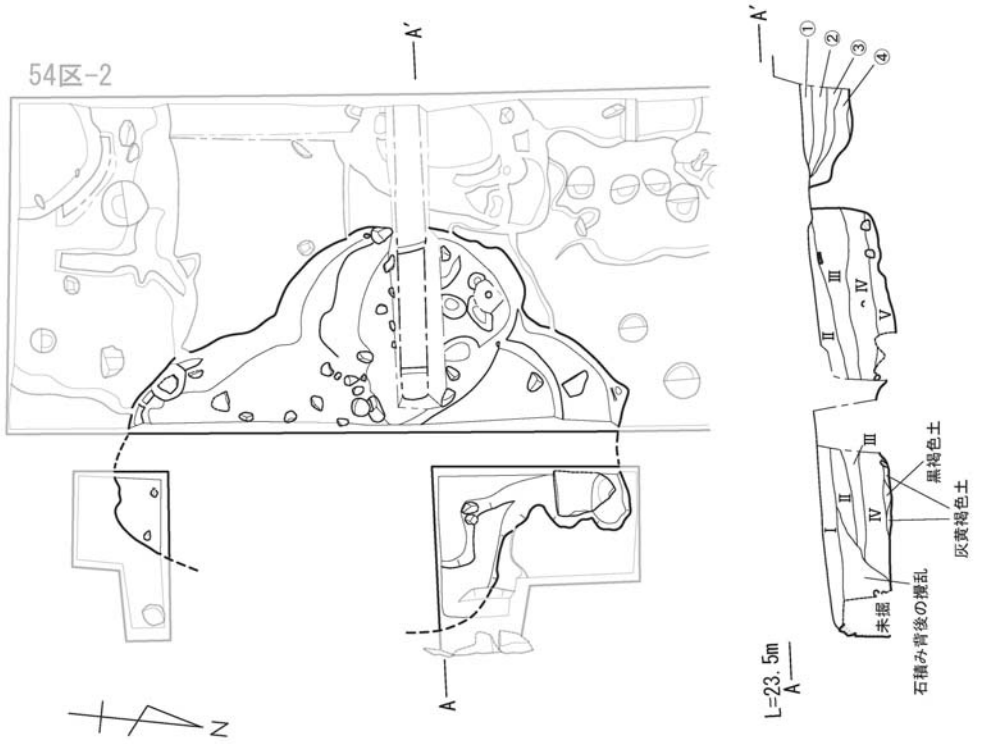
第24図　54区（平成27・28年度調査分）土層断面図（S＝1/80）



第25図　54区－１　掘立柱建物跡　平面図（Ｓ＝１/80）



第26図　54区－２　廃棄土坑　実測図（Ｓ＝１/40）



Ⅰ…表土
Ⅱ…にぶい黄褐色土 10YR 4/3
　1cm未満の小礫やや多い　1cm前後の炭化物粒少量
Ⅲ…灰黄褐色土 10YR 4/2
　粘性　3～10cm程度の泥岩ブロック少量含む
Ⅳ…暗灰黄色土 2.5Y 4/2
　1～3cm程度の泥岩ブロックやや多い　1cm前後の炭化物粒
Ⅴ…灰黄色土　2.5Y 4/1
　粘性　1cm程度の炭化物粒少量

①暗灰黄色土 2.5Y 5/2 5mm程の炭化物粒
②オリーブ褐色土 2.5Y 4/3 2～3cm大の泥岩ブロック多い
③暗灰黄色土 2.5Y 4/2 3～5cm大の炭化物粒少量
④灰オリーブ色土 5Y 5/2 3～10cm大の泥岩ブロック多い

0　4m
S=1:80

第27図　54区－2　大型土坑　実測図（S＝1/80）

遺物：〈柱穴群〉 1は青磁の碗である。見込部分は蛇の目釉剥ぎを行う。高台内は無釉であるが、一部畳付の釉薬が垂れている。

2～6は土師質土器である。いずれも底部は右方向の回転糸切りである。2は坏で、口縁部に煤が付着している。3・4は小皿である。3は見込にドーナツ状の高まりを持つ。底部の糸切り痕は荒い。3・4の胎土には赤色粒子が混じる。5はミニチュアである。胎土は他の土師質土器に比べ精良である。6は耳皿で、焼成が甘く成形は荒い。赤色粒子を含む。

7は石製品である。在地産のデイサイト質安山岩を素材としている。風炉といった用途が考えられるか。

〈廃棄土坑〉 1・2は白磁の碗である。1は端反り碗で、胎土は精良である。2の胎土は黄味を帯びている。内面は細かい凹凸がある。高台は削り出しによって成形し、高台内は無釉となる。3～6は青花の資料である。3は端反りの碗である。胎土・釉調ともに灰色を帯びる。外面は口縁下部に界線を入れ、体部に文様を描く。絵付けは滲んだような線で描かれており、明瞭でない。人物と馬を描いたものか。内面は見込に界線を描く。4は碁笥底の皿である。見込には二重の界線に花文を描く。外面には波濤文を巡らせる。5は口縁部下の内外面、見込部分、高台際にそれぞれ二重の界線を描く。畳付は無釉で、離れ砂が僅かに熔着している。6は口縁部下内面に四方襷文を描く。外面は口縁部下に二条の界線、草花文を描く。口縁部は外反する。

7・8は瓦質土器の火鉢である。どちらも胎土に赤色粒子を含む。7は口縁部が肥厚し、突帯を一条巡らせる。口縁部と突帯の間に花形のスタンプ文を巡らせる。8は口縁部が外側に張り出す。口縁部下にはスタンプ文を施す。

9～15は土師質土器である。9・10は坏である。どちらも内面に煤が付着し、胎土に赤色粒子を含む。底部は右方向糸切りである。10は強いナデによって外面に凹凸が残る。11は皿である。12は坏と思われる。胎土は白く精良で、白色雲母を含む。見込部分は螺旋状の工具痕が残る。底部は右回転の糸切りである。13・14は小皿である。胎土に赤色粒子を含み、底部は右方向の回転糸切りである。15は耳皿である。強いナデの凹凸を持つミニチュアからの作り出しで、底部は右回転糸切りである。

16は青銅製品である。ほぼ直角に曲がっており、両端で太さが異なる。17はガラス製品である。濃い青色をしている。小さい玉が二つ連なった形状をしており、紐を通す目的か遺物の長軸方向に穴が開いている。18は烏賊の足部分と思われる。吸盤は碗状の形をしている。19は大型魚類の椎骨にあたる部分と思われる。

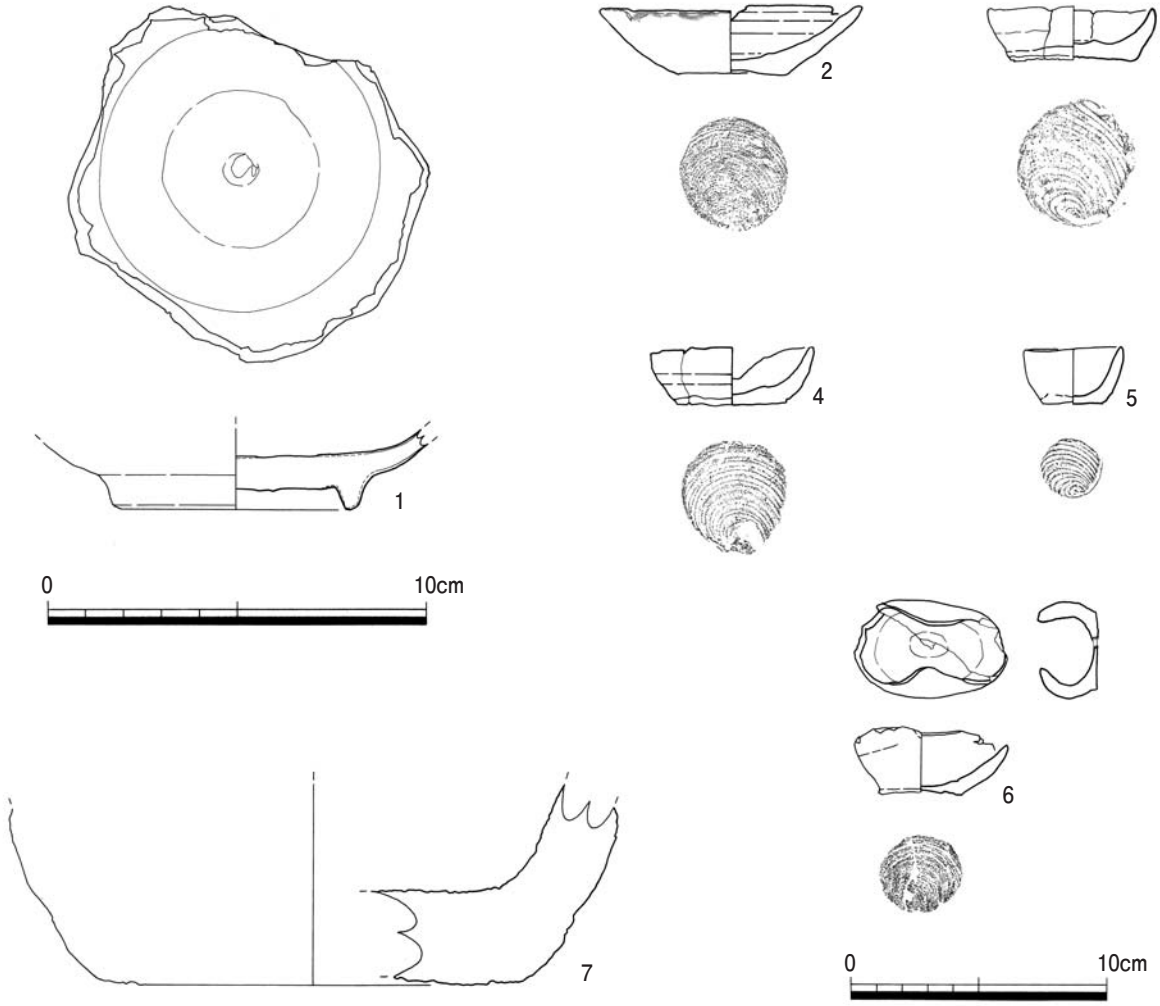
〈大型土坑〉 1は白磁の碗である。口縁部は端反りとなり、畳付周辺は無釉である。胎土は精良である。2は青磁の碗と思われる。精良な胎土を持つ。器面に厚く釉がかかり、高台内は輪状に釉を掻き取っている。3・4は青花である。3は端反り碗で、口縁部下の内外面に二条の界線を入れる。外面には文様を描く。4は破片資料で、皿の見込と高台内にあたる部位と思われる。片面に草花文、もう片面に二条の界線と文字を描く。

5は瓦質土器の擂鉢である。口縁部は肥厚する。内面にクシ目を放射状に入れる。6～20は土師質土器である。6・7は坏である。6は精良な胎土を持つ薄手の坏である。見込部分には螺旋状の工具

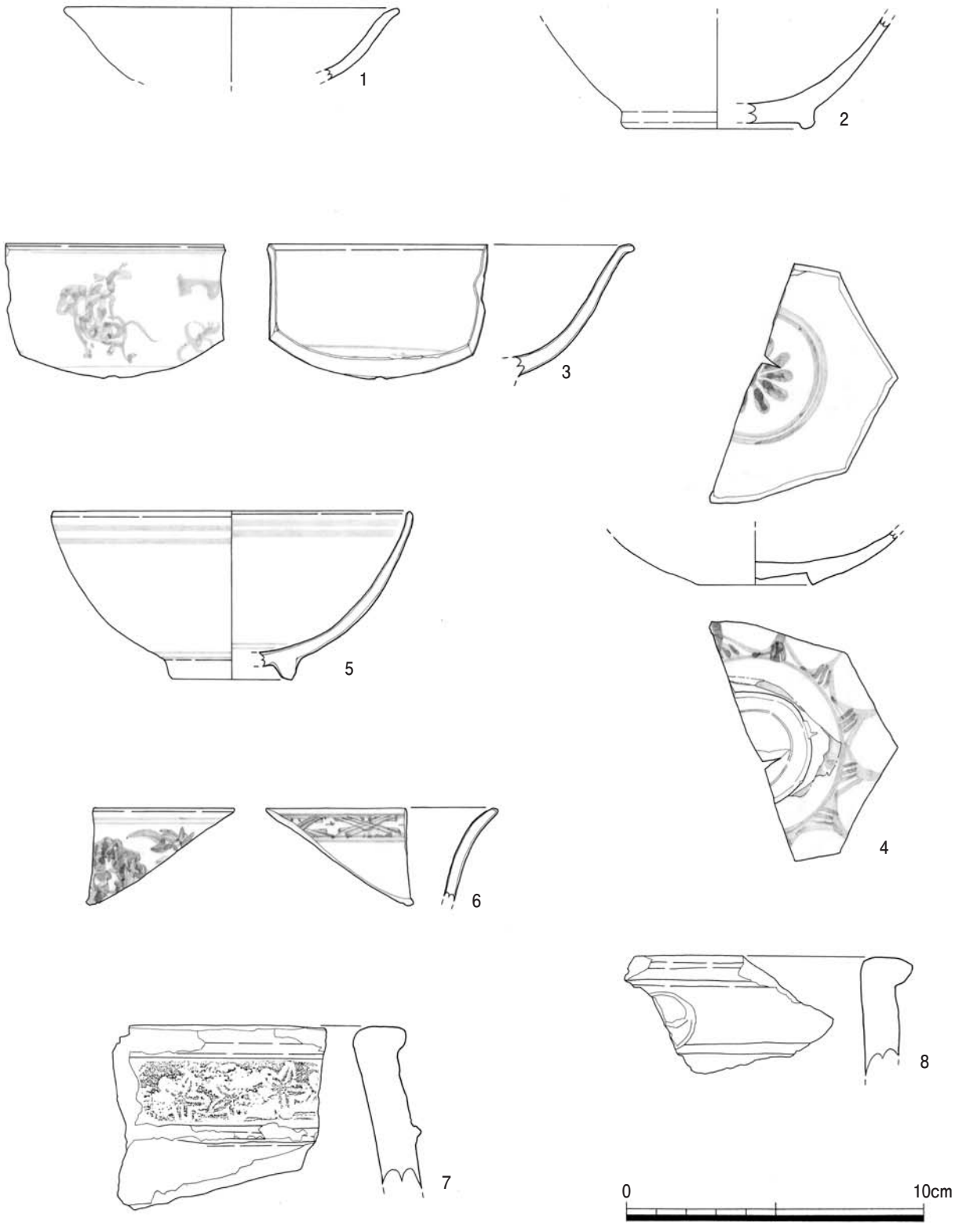
痕を残す。底部は丁寧にナデられ、粘土柱からの切り離し痕は確認出来ない。7は底径が大きく、焼成にムラがある。見込部分は強いナデにより輪状にくぼんでいる。底部は右回転糸切りである。

8～14は小皿である。12を除き底部は全て右回転の糸切りで、14を除き全て胎土に赤色粒子を含む。8・9・10・11・13は見込にドーナツ状の高まりを持ち、9・11は内外面に煤が付着している。12は胎土に含まれる赤色粒子が多い。底部は回転糸切りの痕とスダレ状の圧痕を残す。13は胎土が精良である。14は被熱の痕が顕著である。15～17は支脚を持つタイプの坏である。15は粘土塊を坏に貼り付け、工具によって面取りをした後にナデつける工程を確認できる。底部は回転糸切りの痕を残す。16はほぼ正六角形の支脚を持つ。底部に糸切り痕は確認出来ない。17は四角形の支脚を持つ。底部は回転糸切りである。16・17も15と同じく坏に貼り付けた後工具で面取りを行うが、ナデつけた痕は確認できない。いずれも胎土に赤色粒子を含む。18・19は耳皿である。どちらも底部は右回転糸切りで、胎土に赤色粒子を含む。18は口縁部の対になる2点を内向させる。19は遺物全体に力を加えて成形する。20はミニチュア土器である。胎土は白色に近く精良である。赤色粒子を含む。底部は右回転糸切りである。

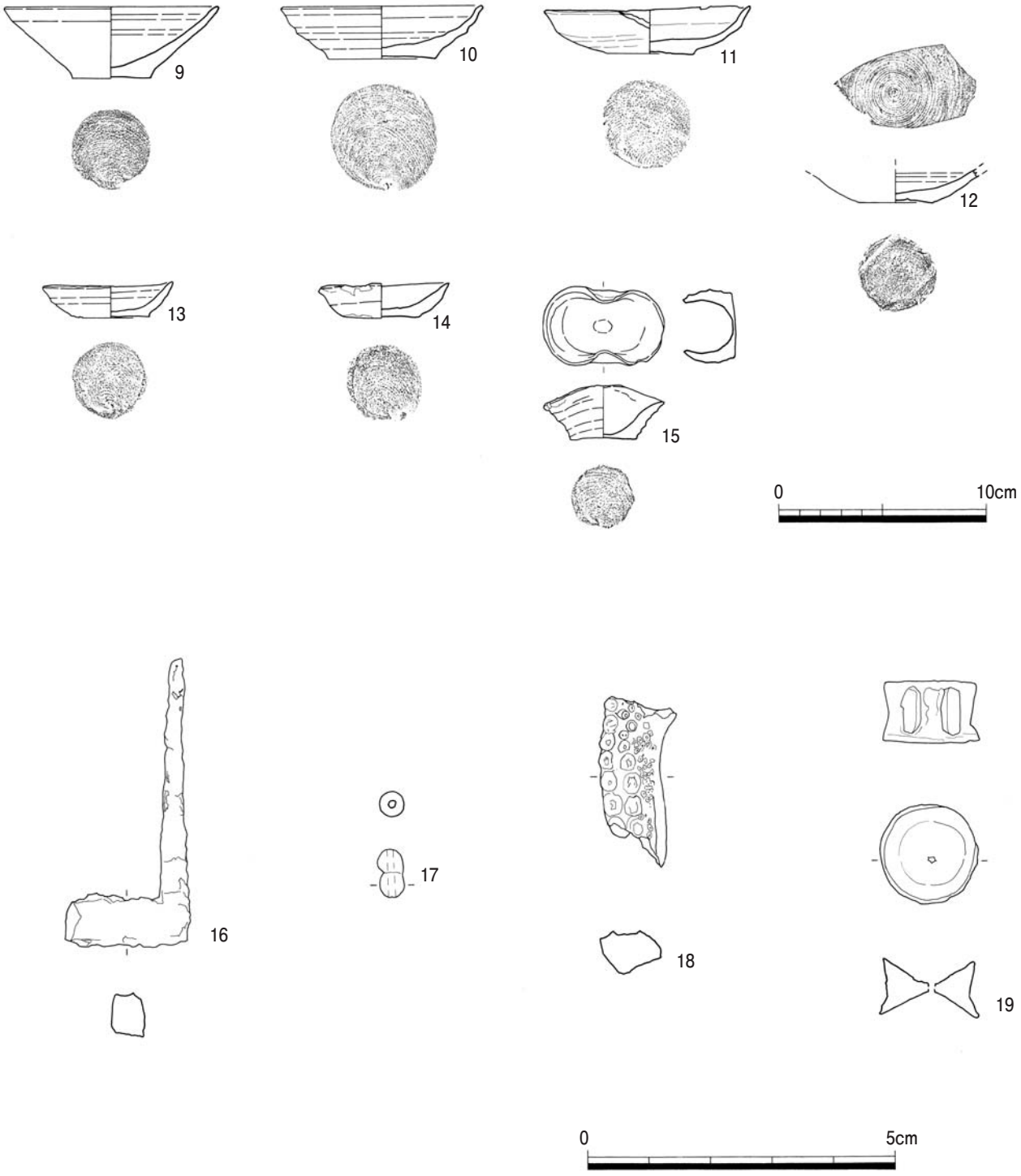
21・22は土錘である。22は紡錘形をしている。23は石鍋の破片である。内外面にノミ状工具の痕が



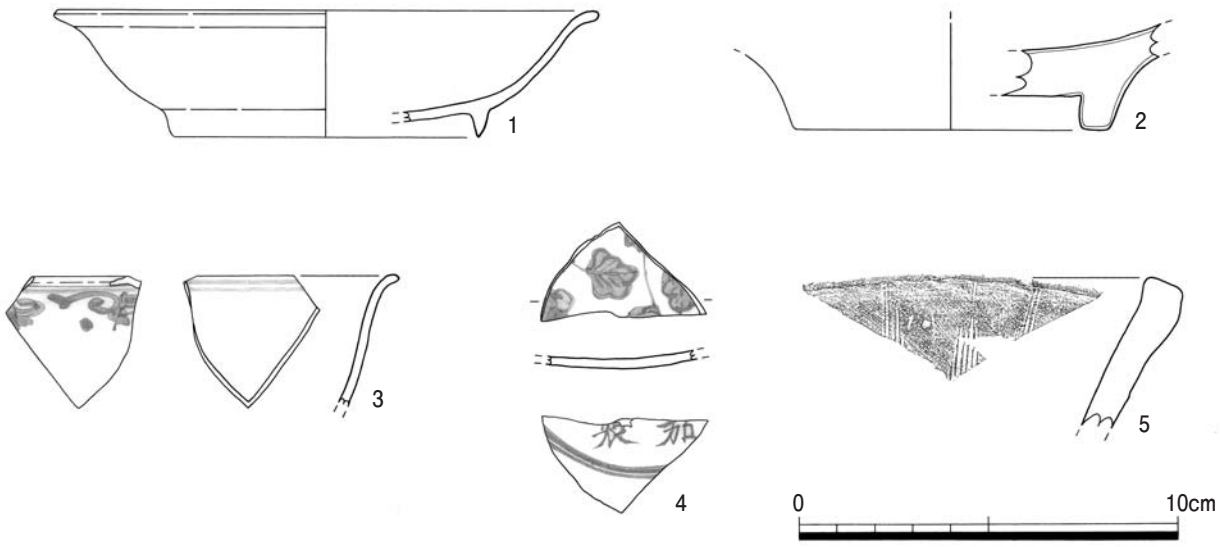
第28図　54区－1　柱穴群　出土遺物実測図（1：S＝1/2、2～7：S＝1/3）



第29図　54区－２　廃棄土坑　出土遺物実測図①（Ｓ＝１／２）



第30図　54区－2　廃棄土坑　出土遺物実測図②（9～15：S＝1／3、16～19：S＝1／1）



第31図　54区－２　大型土坑　出土遺物実測図①（Ｓ＝１／２）

残る。24は青銅製品である。筒状で片側が細くなる。

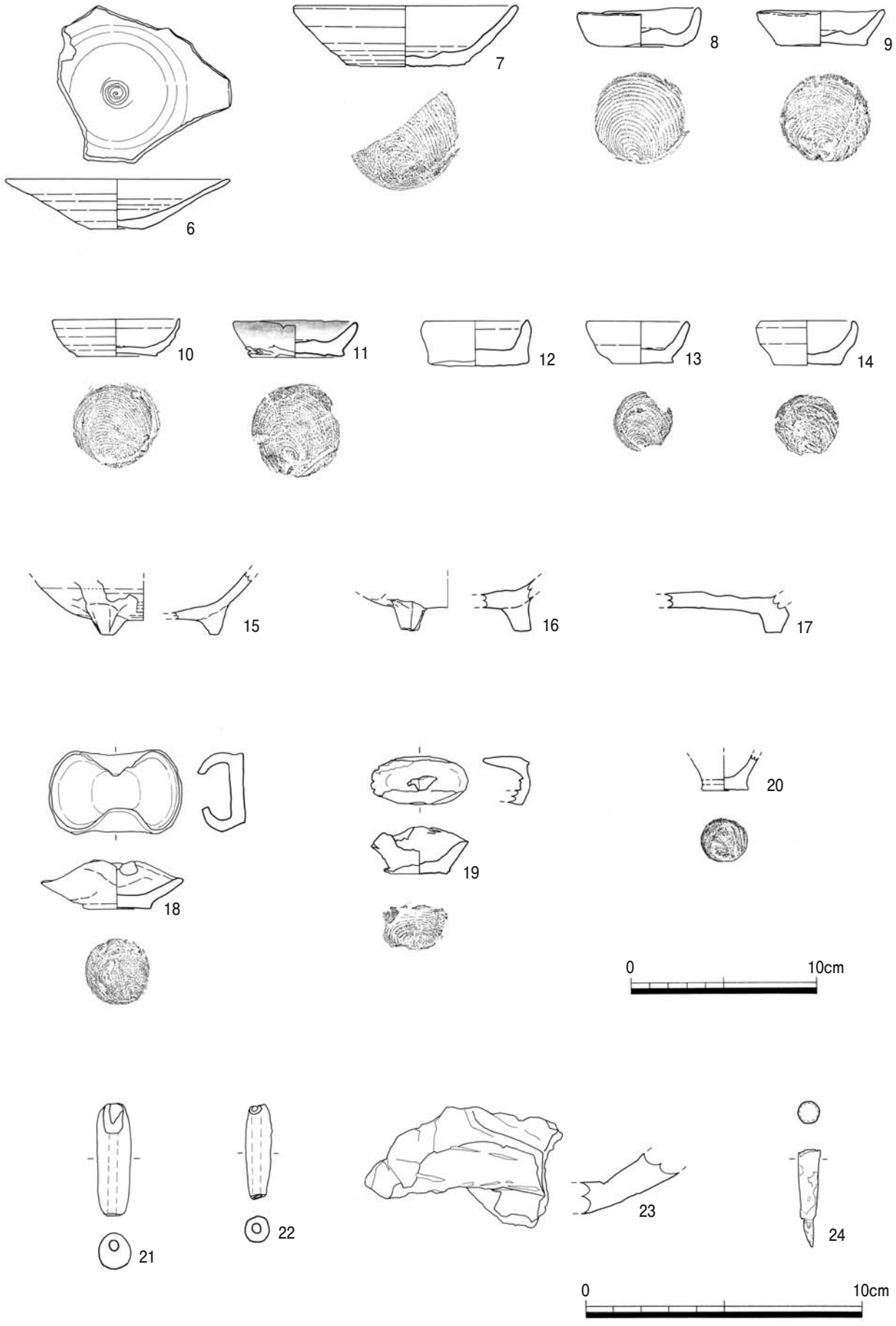
〈SX01〉 1・2は青磁碗の破片である。1は精良な胎土を持ち、口縁部は僅かに外反する。2は外面に線描蓮弁文を描く。3は青花の破片である。口縁部は僅かに内向する。口縁部下内外面に界線を二条描き、体部に丸文を充填する。4は瓦質土器の擂鉢である。8本を一単位としたクシ目を見込部分に入れる。5は瓦質土器の火鉢脚部と思われる。面取りをした脚部の両側に沈線で螺旋状の文様を描く。胎土には赤色粒子を多く含む。

6～9は土師質土器である。6は坏で、7～9は小皿である。底部はいずれも右回転糸切りで、胎土に赤色粒子を含む。7は口縁部に煤が付着する。被熱により全体がほぼ黒色となる。8・9は見込部分にドーナツ状の高まりを持つ。

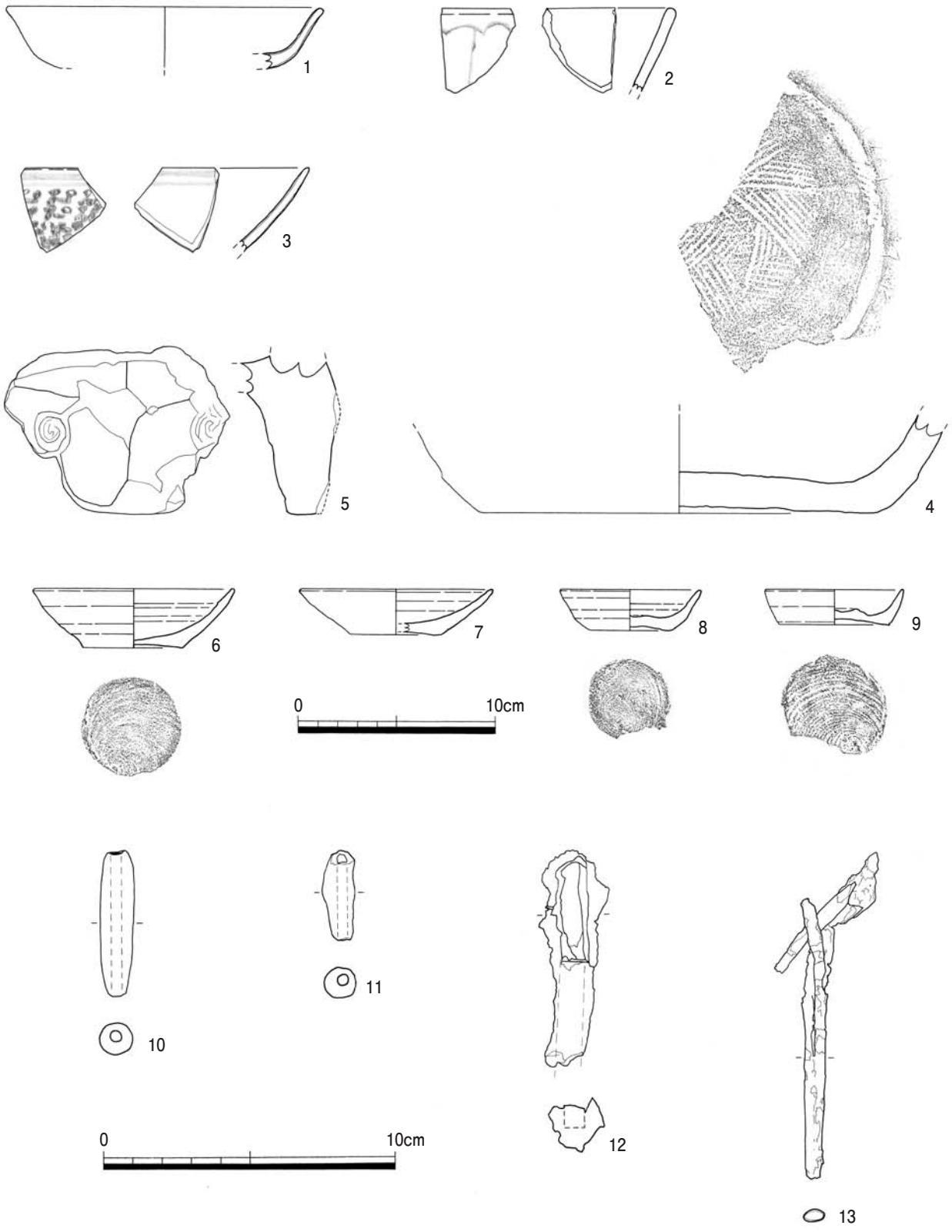
10・11は土錘である。10は胎土に赤色粒子を含む。12は角釘である。13は青銅製品である。残存状態は悪い。一枚の薄い板を折り曲げて筒状にしているのが見て取れる。

〈54区・55区　遺物包含層〉 1は青花の水滴である。何らかの動物を模しており、４本の足が確認できる。頭部は欠損している。背中部分と頭部に穴が開いている。2は青花の皿である。薄く精良な胎土を持つ。口縁部は外反する。畳付周辺は離れ砂が残る。内面は口縁部に界線を入れ、見込に二条の界線と文様を描く。外面は口縁部に一条の界線を入れ、高台際に二条界線を入れる。体部は文様を描く。3～7は土師質土器である。いずれも底部は右回転糸切りで、胎土に赤色粒子を含む。3は坏で、内外面には煤が付着する。ナデによる凹凸は殆ど見られず、丁寧な作りである。4は皿で、底部の糸切り痕は乱れている。5・6は小皿である。5は口縁部に煤が付着する。6は見込にドーナツ状の高まりを持つ。内面には煤が付着する。7はミニチュアである。１～２㎜程度の大粒の赤色粒子を含む。

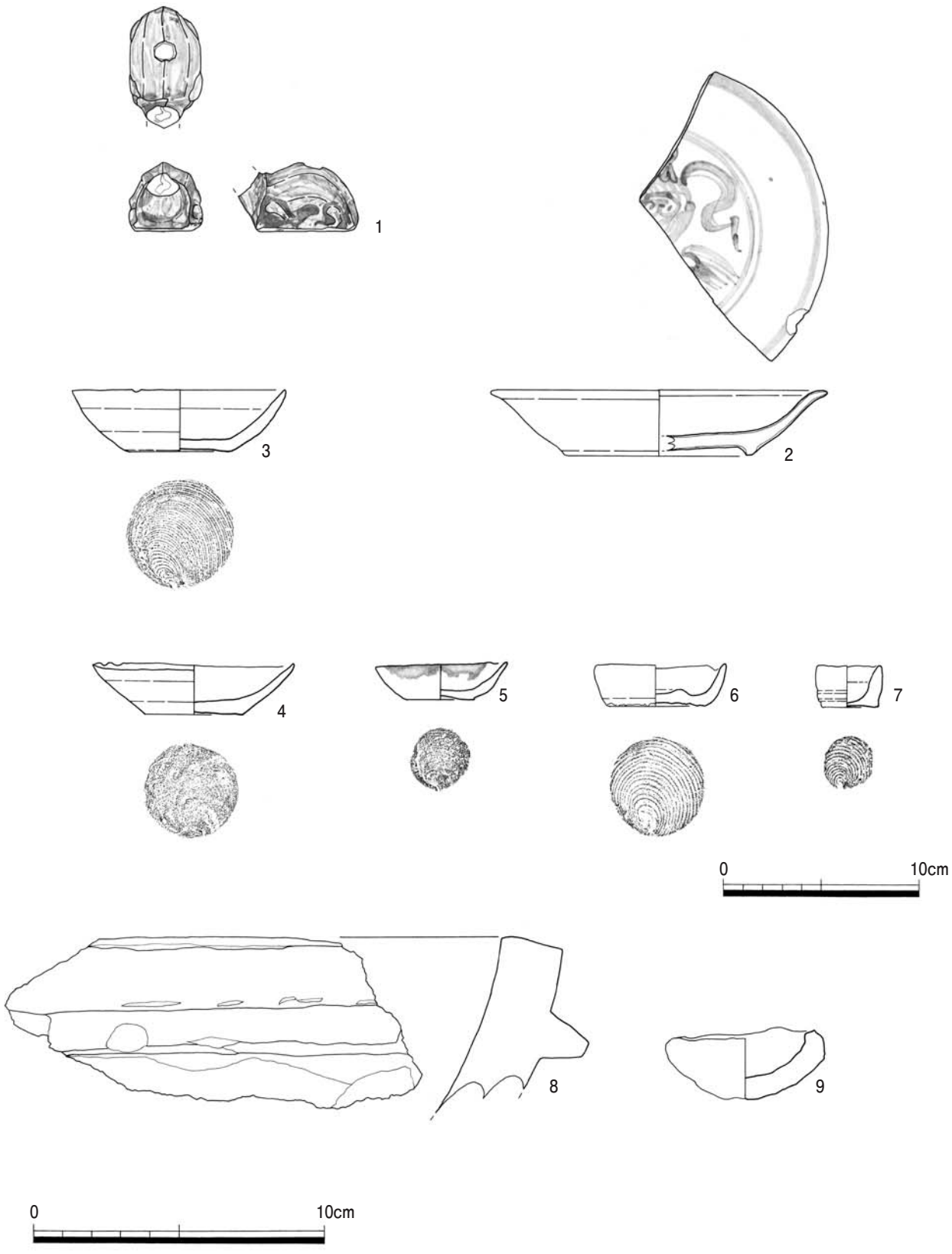
8は口縁部下に鍔を持つタイプの石鍋破片である。55区焼土付近から出土している。9は坩堝である。



第32図　54区－2　大型土坑　出土遺物実測図②（6～20：S＝1／3、21～24：S＝1／2）



第33図　54区－２　SX01　出土遺物実測図（１～５・10～13：Ｓ＝１／２、６～９：Ｓ＝１／３）

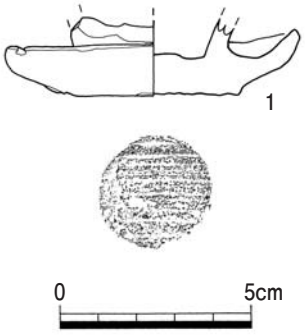


第34図　54区・55区　包含層　出土遺物実測図（1・2・8・9：S＝1/2、3～7：S＝1/3）

（9）56区

曲輪５と曲輪６を隔てる石垣の中央付近から北側においては、石垣の前面に沿って石列が見られる。古い段階の石垣根石の痕跡である可能性も想定されたことから、平成26年度にトレンチによる確認を行った。

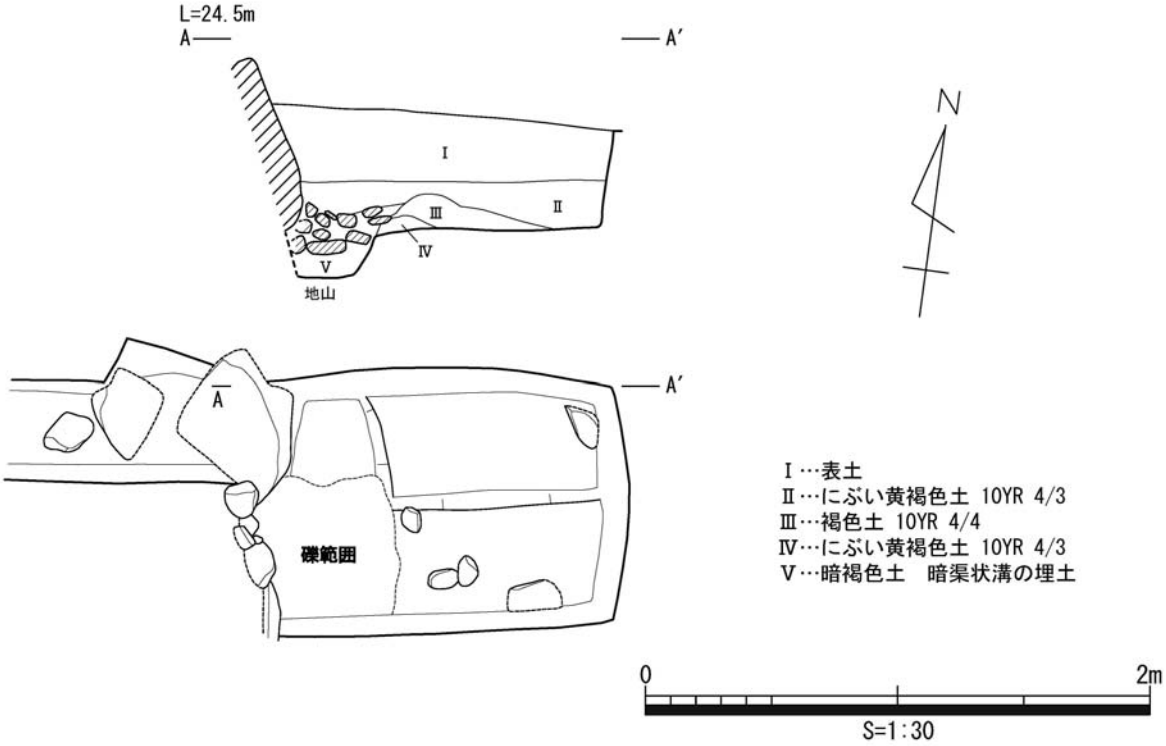
調査の結果、築石に相当する大型石材の背後において、栗石にあたる礫の充填は十分でなく、また根石部分においても地業の痕跡は認められなかった。



第35図　56区　出土遺物実測図（S＝1／2）

並べられている石材は、本来は石垣に伴うものであった可能性があるものの、いったん崩れた後で、後世に整理されたものと考えられる。

遺物：1は陶器製の灯明皿である。内外面に褐釉がかかる。底部は糸切りの後に平行線が入り、釉薬のかかり方にムラがある。



第36図　56区　実測図（S＝1／30）

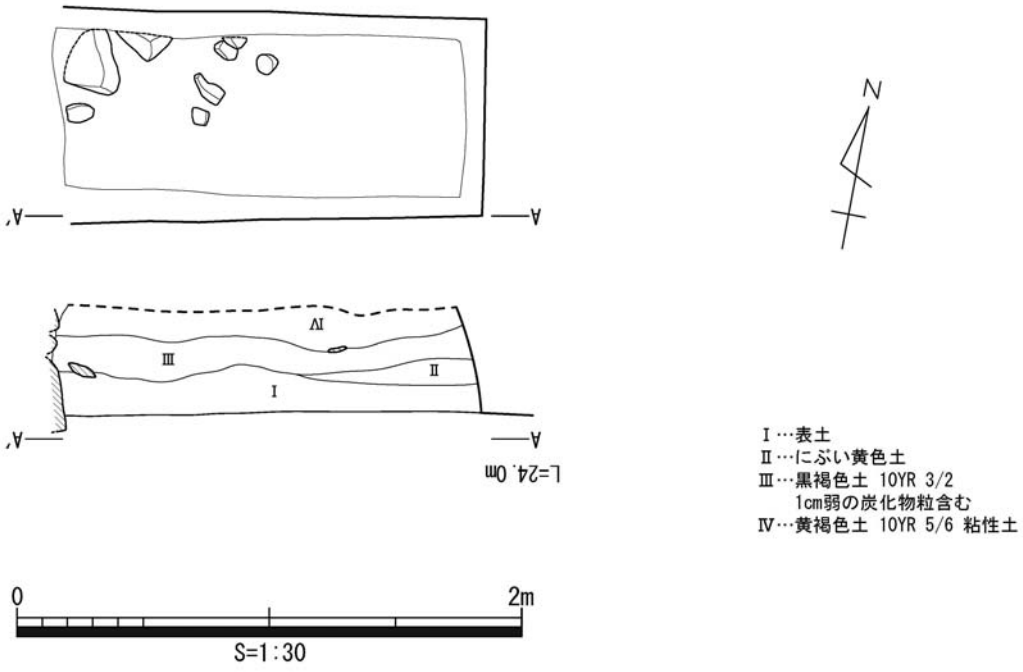
(10)57区

曲輪５と曲輪６の間にみられる石垣南端の根石付近で行った調査である。この石垣を全体的に観察すると、築石の大きさ、目地の通り、間詰め石の在り様などが場所によってまちまちであり、廃城以降もたびたび積み直しによって修理された様子が伺える。

そうした中、残存する石垣の南端付近は自然石を横目地が通るように積み、間詰めもぎっしりとは詰め込まない状態であり、特徴的に近世初頭頃の石垣である可能性が想定されたため、根石部分の確認を行った。トレンチは、より多くの情報を得られるよう、この横目地が通る箇所から落とし積みに変化している付近に設定した。

結果、目地が通る南側では根石の下に十分な飼石があることを確認した。また飼石は近世初頭頃の遺物を包含する層によって被覆されていることから、この石垣南端の一部は、近世初頭に築かれた石垣の痕跡である可能性が高いと考えられる。

一方、北側の落とし積みとなっている石垣の下部に飼石はなく、石垣覆土に遺物の包含も認められない状況であることから、改変の影響を受けていると考えられる。



第37図　57区　実測図（S＝1/30）

(11)58区・59区

曲輪６と曲輪７の間に見られる法面を観察すると、概ね下半が地山の堅い泥岩層であり、その上部に石積みが載る状態である。しかし法面の南端においては、石積みが曲輪７の地表まで幅約1.5mに渡り落ち込む状態となっていた。こうした現地の観察や、過去に二ノ丸の他の虎口が検出された状況から、虎口空間が大量の石などによって閉塞されている状況を想定し平成26年度より確認調査に着手した。

まず58区では、黄色系の厚い粘質土に覆われる形で、大量の礫群が埋没している状況を確認した。粘質土からは、土師質土器の皿や埦、日野江城で使用されていたと考えられる瓦片などを多く含んでいる。礫群は、最大で１ｍに及ぶ大型の石を含む。間隙が多く、人為的に投棄されている可能性が高い。部分的に礫群の掘削を行い深度の確認を試みたが、堆積が分厚く、下層の確認が困難と判断したため、西側に新たに59区を設けて同様の調査を行った。

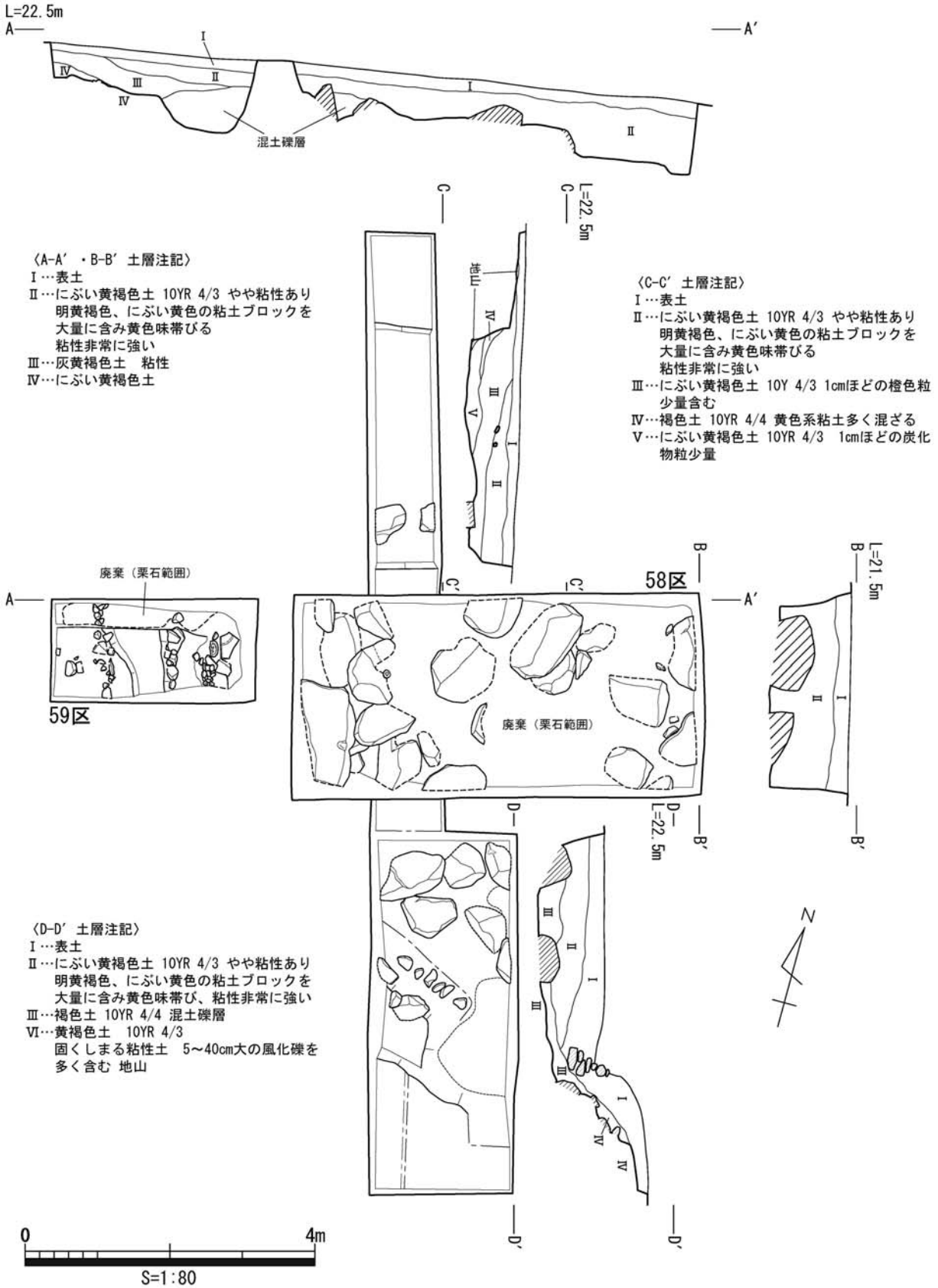
59区では、西に向けて地山がせり上がる形で、礫の堆積が徐々に薄くなり収束していた。礫群は東側の石垣上部を起点とすると、西側に約12mの広がりがある事を確認した。

27年度は同地点の調査を休止しているが､礫群の南北方向の広がりが不明であったため､58区の南・北の拡張区としてトレンチを設けて28年度に調査を実施した。

調査の結果、26年度に検出していた礫群の南北方向の広がりは、約10mである事が明らかとなった。南側には一段小高くなった地形があり、これにぶつかる形で収束している。

遺物：１は飾瓦の一種と思われる。全体の器形はゆるく湾曲しており、表面は工具によって細かい沈線を入れる。鳥類の羽根を模しているものか。裏面は剥離した痕跡を残している。

第38図　58区　出土遺物実測図（Ｓ＝１／２）

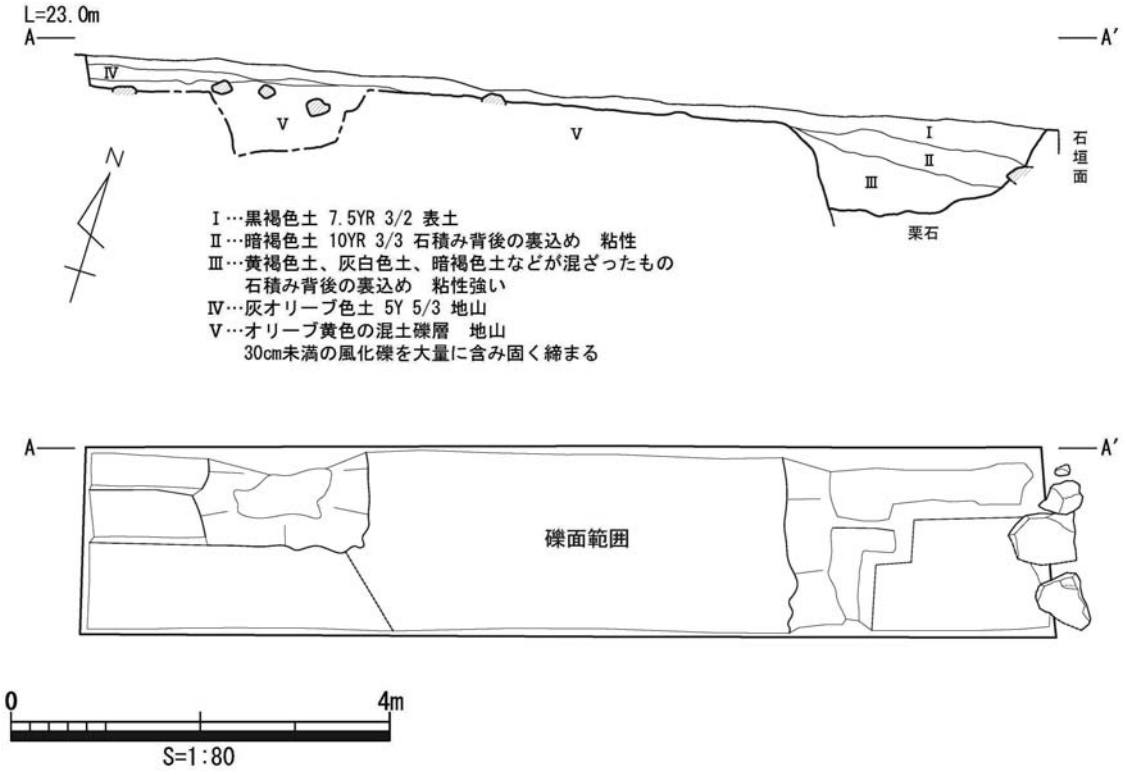


第39図　58区・59区　実測図（S＝1/80）

(12)60区

平成26年度に実施した地中レーダー探査において、曲輪６の南東に帯状の反応が認められたため、平成27年度にトレンチ調査による確認を行ったものである。帯状の反応はおよそ南北方向に走る形であったため、トレンチは東西に長軸を置くよう設定した。

調査の結果、帯状の反応については地山の礫層である事を確認した。礫層の幅は東西約６ｍである。礫層が帯状に分布している点であるが、調査区の西側においては、斜面堆積が削平の影響を受けて礫層より下層の粘質土層が同レベルに分布し、一方の東側においては、石積みの天端背後に沿う形で人為的な粘質土の堆積が認められ、結果として南北方向の帯状の反応となったと判断される。



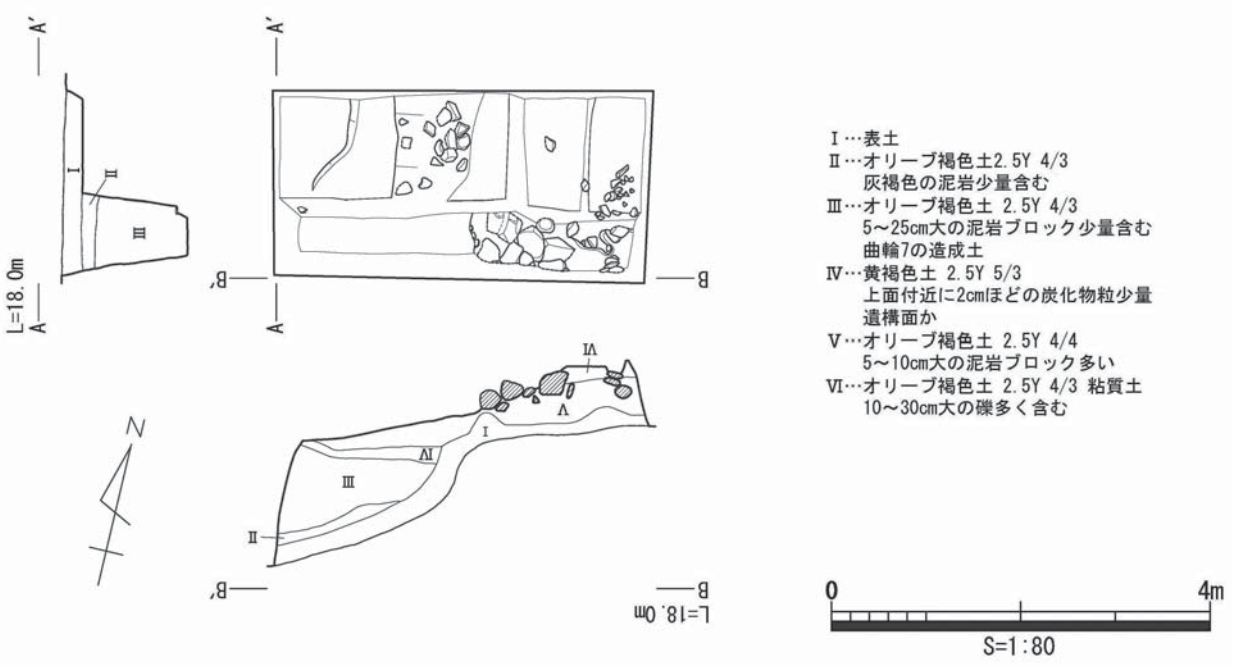
第40図　60区　実測図（S＝１/80）

(13)61区

平成27年度に曲輪７南東付近の法面で実施した調査である。26年度の地中レーダー探査で斜面堆積状の反応が見られたため、城道関係の遺構の可能性を考慮し、トレンチでの確認を行った。

調査の結果、表土下ではブロック状に切り崩された地山の泥岩が１ｍ以上堆積しており、曲輪の造成と捉えられる状況であった。また泥岩ブロックの堆積層の東側が斜面状となっているため、これが地中レーダーに反応したと考えられる。

地表より約1.2mの深度では、泥岩ブロックの堆積下にほぼ水平の堆積層を確認し、その上面において中世末～近世初頭頃の陶磁器片が出土している。過去の調査においては、同じ曲輪における１ｍほどの深度で、礎石らしき配石を確認しており（平成８年度／16区）、これに対応する遺構面の可能性がある。



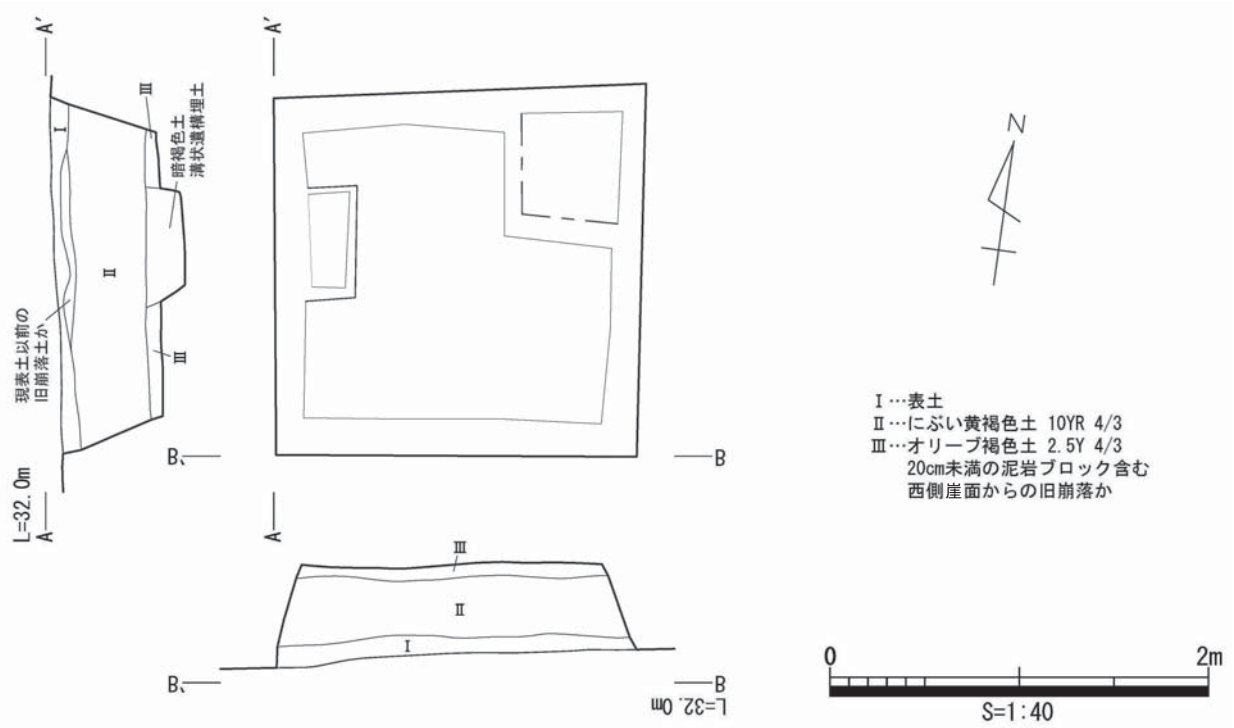
第41図　61区　実測図（S＝１/80）

(14)62区

曲輪５の西側で、一段高くなっている小規模な平場の性格を確認するため、平成28年度にテストピットによる調査を実施した。

表土下には西側崖面の崩落と考えられる土砂が堆積し、この崩落土に掘りこまれた東西方向の溝１条を検出した。廃城以降の遺構と考えられるものである。

この地点においては西側崖面が高く、崩落の可能性もあることから、深掘は危険と判断し、地山までの掘り下げ、確認は今回行っていない。



第42図　62区　実測図（S＝１/40）

(15)63区

62区と同様、曲輪５の西にある平場の内容を確認するため、平成28年度に実施した。63区は平場の南端付近において、当初２m×２mのテストピットとして設定した。

調査の結果、西側崖面からの崩落と考えられる泥岩のブロックが厚く堆積しており、崩落土下に南北の溝状遺構があることが判った。溝が比較的大きく、深くなると想定されたこと、また溝の検出面と西側切岸および曲輪５の遺構検出面との関係を理解する必要があるため、この時点で調査区の拡張を行った。

確認を進めた結果、溝跡は検出面で幅が東西約0.9m、深度は約1.6mである。断面形は逆台形状となっており、底付近では0.2～0.3m程まで狭くなる。溝底において水性堆積の砂や粘質土が15cm程度堆積しているが、それより上部は、地山の泥岩が崩れたブロックで一気に埋没した状態となっている。西側切岸の自然崩落または人為的な切り崩しであるかは判断し難い状況であったが、溝内の泥岩ブロック層より、17世紀前半台の磁器片が出土しており、廃城以降に埋没したと考えられる。

溝の性格であるが、雨天後に、南側の崖面を確認したところ、溝底と同レベル付近から水が抜けており、排水の機能を果たしていた溝と考えられる。50区と同程度のレベルにおいて、地山の泥岩層に掘りつけている点から日野江城に伴う遺構と考えられる。北西の本丸側から雨水が集まってくる付近であることから、大型の溝を設け、曲輪の保全を図った可能性を想定しておきたい。また二ノ丸と本丸の境界にあたる付近であり、そうした意図が含まれる可能性もある。

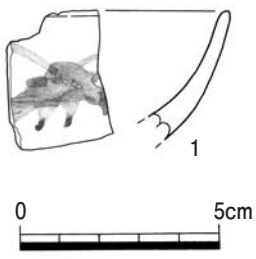
溝跡の東側は、泥岩ブロックの堆積が曲輪５との境まで続いており、天端のみ小さい石積みで止められているが、下部は泥岩のブロックが石積み風に積まれている。

溝の西側は緩やかに上っており、切岸付近で段上の地形が２段みられる。切岸との境には幅、深さともに20cmほどの溝があるが、表土が埋没している状態であり、日野江城に伴う遺構であるかは不明である。

このほか、西側の切岸を精査していた際に、石祠を１基検出した。崩落土の堆積によって、切岸の形状が判然としなかったが、この付近では泥岩層の露頭の一部がテラス状となっており、その上に石祠が置かれている状態である。上台、中台、芝石が残存する。棹石を欠き、銘を確認することはできなかったが、18～19世紀頃のものと考えられる。

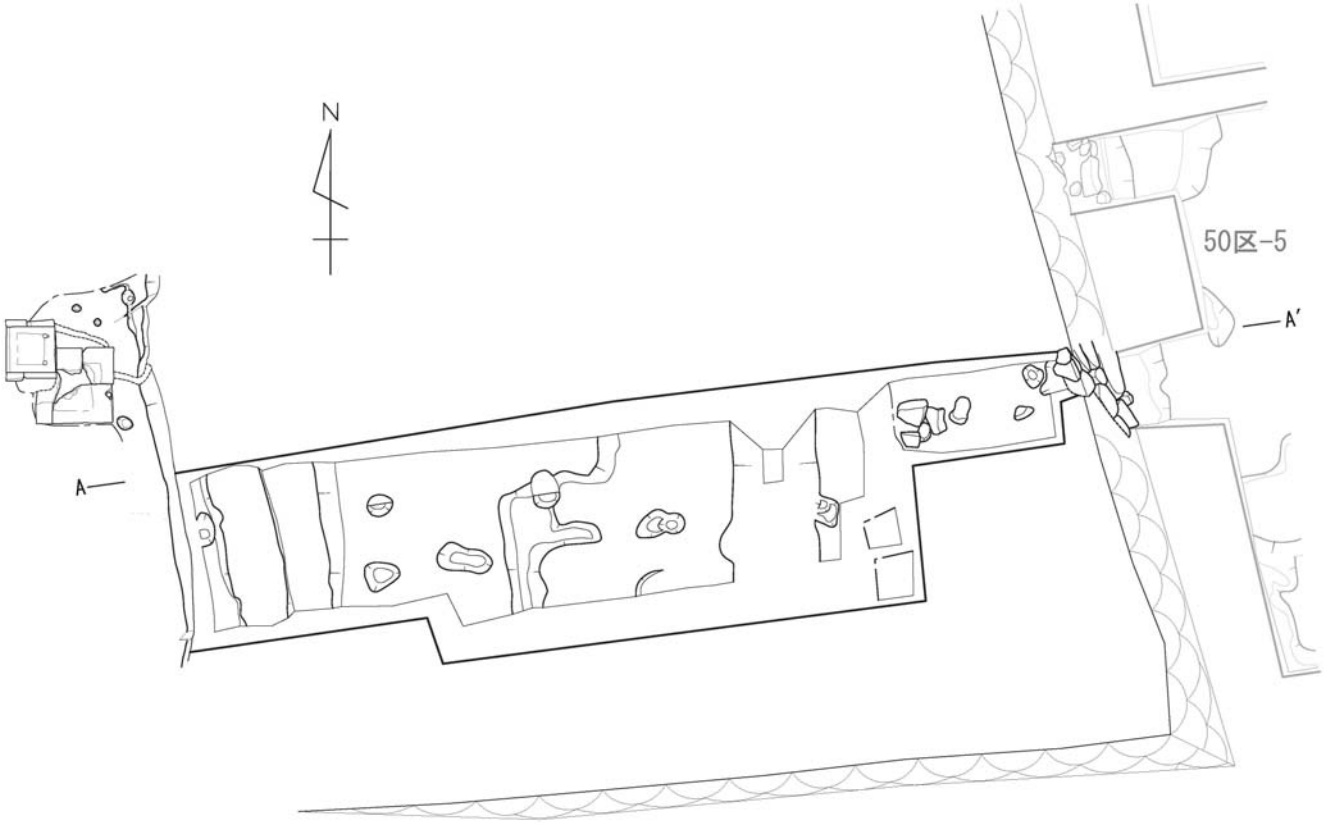
中台および上台は、芝石に対して大きなずれがあり、前傾している。また間には崩落土を介していることから、本丸側からの崩落土に押される形で転倒したものが積み直されている状況と判断できる。

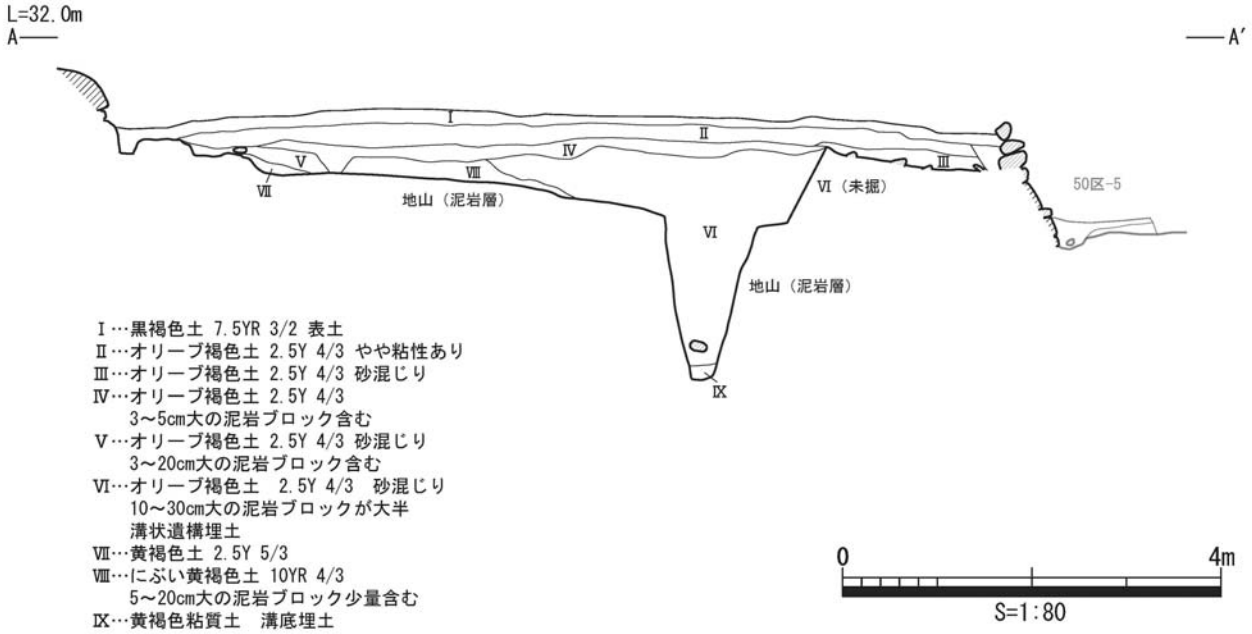
石祠の前面には、泥岩層の露頭が平坦面に変化した付近で小規模なピット状の掘り込みが２基みられる。本来は石祠に伴う社があり、その柱穴と考えられる。



遺物： **1**は大型の溝内部から出土した染付碗の破片である。色調や胎土から17世紀中頃以降の国産磁器と思われる。

第43図　63区　出土遺物実測図（S＝１／２）





Ⅰ…黒褐色土 7.5YR 3/2 表土
Ⅱ…オリーブ褐色土 2.5Y 4/3 やや粘性あり
Ⅲ…オリーブ褐色土 2.5Y 4/3 砂混じり
Ⅳ…オリーブ褐色土 2.5Y 4/3
　3～5cm大の泥岩ブロック含む
Ⅴ…オリーブ褐色土 2.5Y 4/3 砂混じり
　3～20cm大の泥岩ブロック含む
Ⅵ…オリーブ褐色土　2.5Y 4/3　砂混じり
　10～30cm大の泥岩ブロックが大半
　溝状遺構埋土
Ⅶ…黄褐色土 2.5Y 5/3
Ⅷ…にぶい黄褐色土 10YR 4/3
　5～20cm大の泥岩ブロック少量含む
Ⅸ…黄褐色粘質土　溝底埋土

第44図　63区　実測図（S＝1/80）

第 2 表　45区　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
1	瓦質土器	火鉢	45区－1　Ⅴ層	黒褐色	－	－	－	突帯二条、スタンプ文
2	瓦質土器	火鉢	45区－1　Ⅴ層	黒褐色	－	－	－	突帯二条、スタンプ文
3	土師質土器	小皿	45区－1　Ⅱ層	黒褐色	(7.2)	(5.4)	1.8	底部糸切り（右）

第 3 表　46区・47区　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	青花	碗	46区 Ⅳ層	－	－	－	
2	青花	碗	46区 Ⅲ層	－	－	－	
3	青花	碗	47区 中央サブトレンチ	－	3.9	－	饅頭心碗、高台内角福
4	青磁	碗ヵ	46区 Ⅳ層	－	－	－	
5	青磁	碗ヵ	46区 Ⅱ層	－	(6.4)	－	底部碁笥底
6	白磁	碗	46区 Ⅳ層	－	(7.6)	－	見込目跡
7	陶器	壺	46区 Ⅳ層	－	－	－	褐釉

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
8	瓦質土器	火鉢	46区 Ⅱ層	灰黄褐色	－	－	－	突帯一条、スタンプ文
9	瓦質土器	火鉢	46区 Ⅳ層	黒褐色	－	－	－	突帯二条
10	土師質土器	坏	46区 Ⅱ層	橙色	(11.4)	6.2	4.0	底部糸切り（右）
11	土師質土器	小皿	46区 Ⅲ層	橙色	(5.8)	4.8	2.0	底部糸切り（右）
12	土師質土器	小皿	46区 Ⅲ層	橙色	(6.1)	4.5	2.3	底部糸切り（右）
13	土師質土器	小皿	46区 Ⅳ層	橙色	(6.7)	4.8	2.2	底部糸切り（右）
14	土師質土器	小皿	46区 Ⅳ層	橙色	(7.2)	5.3	2.1	底部糸切り（右）
15	土師質土器	小皿	46区 Ⅳ層	橙色	(6.9)	(4.7)	2.1	底部糸切り(右)、口縁部煤付着
16	土師質土器	小皿	47区 Ⅰ層	橙色	(6.8)	5.4	1.7	底部糸切り（右）
17	土師質土器	小皿	47区 中央サブトレンチ	橙色	6.3	3.8	1.7	底部糸切り（右）
18	土師質土器	小皿	46区 Ⅱ層	橙色	(6.5)	(4.7)	2.2	底部糸切り（右）
19	土師質土器	小皿	46区 Ⅰ層	橙色	6.1	4.1	1.6	底部糸切り(右)、口縁部煤付着
20	土師質土器	小皿	46区 Ⅳ層	橙色	(6.5)	(4.7)	1.7	底部糸切り、口縁部煤付着
21	土師質土器	ミニチュア	46区 Ⅲ層	浅黄橙色	4.0	3.5	1.5	底部糸切り（左）
22	土師質土器	耳皿	46区 Ⅲ層	橙色	4.9	2.8	2.3	底部糸切り（右）
23	土師質土器	耳皿	46区 Ⅱ層	橙色	5.7	3.5	2.6	底部糸切り

番号	種別	出土層位・地点	色調	法量（cm）	備考
24	丸瓦	46区 Ⅰ層	凹面：灰色、凸面：黒色	長さ27.0、幅13.5、高さ6.4	凹面布目・吊紐痕・コビキA
25	軒丸瓦	46区 Ⅱ層	凹面：灰色、凸面：灰色	長さ26.8、幅12.4、高さ6.2	凹面布目・吊紐痕・コビキA、釘穴有り
26	面戸瓦	46区 Ⅰ層	凹面：灰色、凸面：灰色	長さ7.5、幅11.2、高さ4.5	吊紐痕
27	軒平瓦	47区 Ⅰ層	凹面：灰色、凸面：灰色	長さ－、幅－、高さ2.9	三葉文、唐草文

第 4 表　50区　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	青磁	碗	50区－2　SD11	(11.8)	－	－	
2	青花	碗	50区－2　SD11	－	(5.8)	－	
3	青磁	香炉	50区－4　SP29	－	－	－	

カッコ付は復元値

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
4	土師質土器	皿	50区 SD02	橙色	9.3	4.5	2.3	底部糸切り（右）
5	土師質土器	皿	50区 SD03	橙色	10.1	4.6	2.3	底部糸切り（右）、口縁部煤付着
6	土師質土器	皿	50区 SD03	橙色	10.0	4.5	2.5	底部糸切り（右）、口縁部煤付着
7	土師質土器	皿	50区－2 SD11	橙色	9.8	4.2	2.5	底部糸切り（右）、口縁部煤付着
8	土師質土器	皿	50区－2 SD12	橙色	10.3	4.3	2.5	底部糸切り（右）
9	土師質土器	皿	50区－2 SD24	橙色	10.4	4.3	2.6	底部糸切り（右）、口縁部煤付着

第5表　52区　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	青花	碗	52区－1 サブトレンチ	(10.4)	－	－	

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
2	土師質土器	小皿	52区－4 Ⅱ層	橙色	6.2	5.4	1.9	

第6表　54区－1　柱穴群　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	青磁	碗	54区 SP08	－	6.2	－	見込蛇の目釉剥ぎ

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
2	土師質土器	坏	54区 SP16	橙色	10.2	4.3	2.7	底部糸切り（右）、口縁部煤付着
3	土師質土器	小皿	54区 SP14上面	橙色	6.4	4.7	2.2	底部糸切り（右）
4	土師質土器	小皿	54区 SP22	橙色	6.4	4.3	2.2	底部糸切り（右）
5	土師質土器	ミニチュア	54区 SP80	橙色	3.8	2.3	2.2	底部糸切り（右）
6	土師質土器	耳皿	54区 SP78	にぶい黄橙色	5.9	3.2	2.6	底部糸切り（右）

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）	備考
7	石器	風炉ヵ	54区 SP01上面	底径（16.8）	

第7表　54区－2　廃棄土坑　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	白磁	碗	54区－2 廃棄土坑	(11.1)	－	－	
2	白磁	碗	54区－2 廃棄土坑	－	－	(6.3)	
3	青花	碗	54区－2 廃棄土坑	－	－	－	
4	青花	皿	54区－2 廃棄土坑	－	(3.8)	－	底部碁笥底
5	青花	碗	54区－2 廃棄土坑	(12.0)	(4.0)	5.7	
6	青花	碗	54区－2 廃棄土坑	－	－	－	

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
7	瓦質土器	火鉢	54区－2 廃棄土坑	灰色	－	－	－	スタンプ文
8	瓦質土器	火鉢	54区－2 廃棄土坑	灰白色	－	－	－	
9	土師質土器	坏	54区－2 廃棄土坑	橙色	10.2	3.8	3.4	底部糸切り（右）
10	土師質土器	坏	54区－2 廃棄土坑	橙色	(9.6)	5.2	2.6	底部糸切り（右）、内面煤付着
11	土師質土器	皿	54区－2 廃棄土坑	にぶい黄橙色	9.8	4.3	2.4	底部糸切り（右）
12	土師質土器	坏ヵ	54区－2 廃棄土坑	灰白色	－	3.6	－	底部糸切り（右）、見込螺旋状跡
13	土師質土器	小皿	54区－2 廃棄土坑	にぶい黄橙色	6.2	3.8	1.7	底部糸切り（右）
14	土師質土器	小皿	54区－2 廃棄土坑	にぶい黄橙色	6.1	3.8	1.6	底部糸切り（右）
15	土師質土器	耳皿	54区－2 廃棄土坑	にぶい黄橙色	5.8	3.1	2.6	底部糸切り（右）

カッコ付は復元値

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）	備考
16	金属製品	－	54区－2 廃棄土坑	長さ4.6、幅2.0、厚さ0.5	
17	ガラス製品	ガラス小玉	54区－2 廃棄土坑	長さ0.8、幅0.4、厚さ0.4	
18	動物遺存体	烏賊　足	54区－2 廃棄土坑	長さ2.5、幅1.0、厚さ0.6	
19	動物遺存体	魚骨	54区－2 廃棄土坑	長さ1.6、幅1.6、厚さ1.0	

第8表　54区－2　大型土坑　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	白磁	碗	54区－2 大型土坑	(14.1)	(8.1)	3.3	
2	青磁	碗ヵ	54区－2 大型土坑	－	(8.2)	－	
3	青花	碗	54区－2 大型土坑	－	－	－	
4	青花	皿ヵ	54区－2 大型土坑	－	－	－	

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
5	瓦質土器	擂鉢	54区－2 大型土坑	灰色	－	－	－	
6	土師質土器	坏	54区－2 大型土坑	にぶい黄橙色	(11.9)	2.8	2.7	見込螺旋状跡
7	土師質土器	坏	54区－2 大型土坑	橙色	(12.0)	(6.4)	3.3	底部糸切り（右）
8	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	橙色	6.4	4.6	2.1	底部糸切り（右）
9	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	橙色	6.7	4.7	2.0	底部糸切り（右）
10	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	にぶい橙色	(6.8)	4.4	2.0	底部糸切り（右）
11	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	橙色	6.4	5.1	2.0	底部糸切り（右）、口縁部煤付着
12	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	にぶい橙色	5.5	5.3	2.4	
13	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	にぶい黄橙色	(5.3)	3.3	2.3	底部糸切り（右）
14	土師質土器	小皿	54区－2 大型土坑	黒褐色	(5.0)	3.6	2.4	底部糸切り（右）
15	土師質土器	坏	54区－2 大型土坑	にぶい橙色	－	(6.2)	－	脚部有り
16	土師質土器	坏	54区－2 大型土坑	にぶい橙色	－	(7.0)	－	脚部有り
17	土師質土器	坏	54区－2 大型土坑	にぶい橙色	－	－	－	脚部有り
18	土師質土器	耳皿	54区－2 大型土坑底面	にぶい橙色	7.4	3.6	2.6	底部糸切り（右）
19	土師質土器	耳皿	54区－2 大型土坑	橙色	5.2	3.0	2.5	底部糸切り（右）
20	土師質土器	ミニチュア	54区－2 大型土坑	にぶい橙色	－	2.5	－	底部糸切り（右）

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）	備考
21	土製品	土錘	54区－2 大型土坑	長さ4.0、幅1.2、厚さ1.3	
22	土製品	土錘	54区－2 大型土坑	長さ3.4、幅0.9、厚さ0.9	
23	石器	石鍋	54区－2 大型土坑	長さ4.0、幅6.6、厚さ1.1	
24	金属製品	－	54区－2 大型土坑	長さ3.5、幅0.7、厚さ0.8	

第9表　54区－2　SX01　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	青磁	碗	54区－2 SX01	(10.8)	－	－	
2	青磁	碗	54区－2 SX01	－	－	－	連弁文
3	青花	碗	54区－2 SX01	－	－	－	

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
4	瓦質土器	擂鉢	54区－2 SX01	灰色	－	(13.6)	－	
5	瓦質土器	火鉢	54区－2 SX01	にぶい黄橙色	－	－	－	脚部螺旋状文様
6	土師質土器	坏	54区－2 SX01	にぶい橙色	(10.0)	5.1	3.0	底部糸切り（右）
7	土師質土器	小皿	54区－2 SX01	黒褐色	(9.6)	(4.7)	2.3	底部糸切り（右）
8	土師質土器	小皿	54区－2 SX01	橙色	(7.0)	4.2	2.1	底部糸切り（右）
9	土師質土器	小皿	54区－2 SX01	橙色	(7.0)	(5.6)	1.8	底部糸切り（右）

カッコ付は復元値

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）	備考
10	土製品	土錘	54区－2 SX01	長さ5.0、幅1.1、厚さ1.0	
11	土製品	土錘	54区－2 SX01	長さ3.0、幅1.1、厚さ1.0	
12	金属製品	角釘	54区－2 SX01	長さ7.4、幅1.8、厚さ1.4	
13	金属製品	－	54区－2 SX01	長さ9.6、幅0.7、厚さ0.4	

第10表　54区・55区　包含層　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	青花	水滴	54区 包含層	長さ4.2	幅2.5	厚さ2.4	
2	青花	皿	55区 Ⅱ層	（11.7）	（6.4）	2.3	

番号	種別	器種	出土層位・地点	色調	法量（cm）			備考
					口径	底径	器高	
3	土師質土器	坏	54区 包含層	にぶい橙色	11.0	5.5	3.2	底部糸切り（右）
4	土師質土器	皿	54区 包含層	にぶい橙色	10.4	5.0	2.7	底部糸切り（右）
5	土師質土器	小皿	54区 Ⅱ層	にぶい橙色	6.8	3.4	1.9	底部糸切り（右）、口縁部煤付着
6	土師質土器	小皿	54区 Ⅱ層	橙色	6.6	5.1	2.1	底部糸切り（右）、内面煤付着
7	土師質土器	ミニチュア	54区 Ⅱ層	橙色	3.3	2.9	2.2	底部糸切り（右）

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）	備考
8	石器	石鍋	55区 東側焼土付近	長さ5.6、幅13.0、厚さ4.0	
9	石器	坩堝	54区 Ⅱ層	口径5.5、底径1.2、器高2.4	

第11表　56区　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	陶器	灯明皿	56区 Ⅲ層	7.7	4.3	1.7	底部糸切り、褐釉

第12表　58区　出土遺物観察表

番号	種別	出土層位・地点	色調	法量（cm）	備考
1	飾瓦ヵ	58区 排土中	灰色	長さ10.2、幅2.6、厚さ2.0	羽根状ヵ

第13表　63区　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土層位・地点	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
1	染付	碗	63区 大溝内	－	－	－	

カッコ付は復元値

第Ⅳ章　総括

二ノ丸地区における城道の把握を主目的として、平成25～28年度にかけて４か年の調査を実施した。城道に関して一定の成果はあったが全容は明らかとなっておらず、今後も継続した調査が必要である。また今回の調査の過程においては、遺構等分布における重要な成果もあった。今回の調査の主要成果を簡単に整理しておきたい。

階段２及び階段３は、平成８～10年度の旧北有馬町教育委員会の調査で一部を検出した階段跡である。16世紀後半の遺構と推定され、改修前後で少なくとも２段階がある日野江城跡二ノ丸の階段（城道）のうち、古段階に相当する。大手方面より城内に向け、直線的に約100ｍの延長があると推定されていた。これまで限定された範囲での確認であったため、追加の確認調査を行った。

44区では、曲輪７のＤ地区（本多編2011）から西側の踊り場における階段の展開を確認した。やや削平の影響があり残存状態は良くないものの、南北に折れる様相はみられず、曲輪６方向へ直線的に延びる従来の想定を追認する事ができた。（平成25年度調査）

53区は、Ｄ地区の西側、曲輪６と７の間にある突出した石積み天端に設定した調査区である。石積みの表面観察から廃城後における階段（城道）の閉塞と想定したが、石積みが城の石垣ではなく後世のものと判断できた。（平成27年度調査）

45区は、Ｃ地区（21区）で検出した階段２から、北側の階段４方面へ向けて通路の展開がないか捕捉を試みたが、結果として通路などは確認できなかった。（平成25年度調査）

46～48区は、曲輪５の中ほどの26区（Ａ地区）において直線階段の一部とされた状況が不明瞭であったため、東側の隣接地点で追加の確認を行ったが、階段跡と評価できる状況はなく、また切通しの痕跡も認められなかった。調査に伴い、曲輪５の東側縁辺は大きく改変され、大量の礫が投棄されている状況も明らかとなった。（平成25・26年度調査）

これまで延長約100ｍと想定されていた階段跡だが、今回の調査では確認できなかった。階段が直線状に延びていると確実な評価ができる範囲は、大手口から曲輪５に接続するまでの約80ｍ強である。改変が著しく確認の困難さもあるが、直線階段は曲輪５の中ほどまでは進入していないと考えられる。

南側虎口推定地点とし、平成26・28年度に実施した58区および59区は、調査区東側にある石積みの表面観察から城道の閉塞状況を想定して調査を行ったもので、結果として大量の礫の投棄を確認した。礫の中には石垣の築石となり得る大型のものも見られる。礫群の掘り下げについては、安全面および東側の石積み解体などが必要となることから部分的に留めたが、状況としては当初想定したとおり虎口の閉塞である可能性が考えられる。

曲輪５で平成26～28年度に実施した50区の調査であるが、曲輪５における遺構の状況がほぼ不明であったため、26年度は細長いトレンチを設定して遺構の分布状況を確認する調査を行った。結果、調査区の西端付近で、玉石を充填した溝状遺構（SD01）を検出した。重要遺構の可能性を想定したため、平成27～28年度に調査区を拡張し継続調査を行った結果、SD01を含む溝状遺構に囲まれた４畳半ほどが収まる方形の空間（50区－１）が確認された。また近辺では原位置から離れた状況で礎石と思われる扁平な石を確認したことなどから、この地点には礎石建物が存在していた可能性が考えられる。その他にSD03からは完形品の土師質土器の出土もあり、意図的に埋置した可能性も考えられる。

建物跡を城内での立地的な観点から評価を行うと、二ノ丸地区最上段の曲輪５にあり、また曲輪５への入口である階段４付近から見ると、対角線上の南西隅付近に位置している。二ノ丸地区で最も奥まった箇所に位置している遺構であり、玉石の使用の在り方、確認された礎石等、城内においても非常に重要な建物であったと考えられる。

曲輪６南側での平成26～28年度調査では多数の柱穴群を検出した。南北３間×東西１間の掘立柱建物跡を２棟確認し、これらの建物プランが一部重複しており、建て替えが行われたと考えられる。南側に広がる有明海を見下ろす地点でもあり、監視する機能を備えた建物の可能性も考えられる。

上述した掘立柱建物跡の東側（54区－２）で廃棄土坑を検出した。近世初頭頃の陶磁器片、完形品を含む土師質土器が多く出土し、また大型魚類の椎体、烏賊、植物の種子など動植物遺存体も出土しており、日野江城内における食の一端を知り得る一次資料として評価できる。

今後も継続的な調査が必要であり、今までの調査成果も踏まえ、日野江城跡の整備に向けて検証していく必要がある。

〔参考文献〕

森田勉　1982　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No. ２』　日本貿易陶磁研究会
上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No. ２』　日本貿易陶磁研究会
小野正敏　1982　「14～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No. ２』　日本貿易陶磁研究会
長崎県教育委員会編　1994　『長崎県遺跡地図』島原市・南高来郡地区　長崎県文化財調査報告書第111集　長崎県教育委員会
山崎信二　2008　『近世瓦の研究』奈良文化財研究所
長崎県教育委員会編　2010　『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ』地名表・分布地図編
長崎県文化財調査報告書第206集　長崎県教育委員会
本多和典編　2011　『日野江城跡総集編Ⅰ』　南島原市文化財調査報告書第６集　南島原市教育委員会
大石一久編　2012　『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市世界遺産地域調査報告書　南島原市教育委員会

図　版

44区－1　全景（北から）

44区－2　全景（北から）

44区－2　遺構検出状況（北から）

45区　全景・小砂利面検出状況（西から）

46区　礫検出状況（南から）

47区　全景（北から）

図版 2

48区　礫検出状況（北から）

49区　調査状況（南から）

50区　調査状況（北から）

50区－4　SD01検出状況（西から）

50区－4　石材投棄土坑（西から）

52区　全景（北から）

53区　調査状況（南から）

54区－1　全景・柱穴群（北から）

54区－2　廃棄土坑ベルト断面（東から）

54区－2　廃棄土坑断面（南から）

54区－2　廃棄土坑遺物出土状況

54区－2　大型土坑（西から）

図版 4

55区　全景（西から）

55区　焼土・遺物出土状況（南から）

56区　遺物出土状況（東から）

56区　全景（東から）

57区　調査状況（東から）

57区　全景・土層（北から）

58区　混土礫層検出状況（北から）

58区　瓦・礫群出土状況（北から）

59区　礫堆積状況（北から）

60区　調査状況（西から）

61区　調査状況（東から）

61区　土層堆積状況（西から）

図版 6

62区　調査状況（東から）

63区　溝状遺構調査状況（南から）

63区西　近世祠検出状況（東から）

52区　作業風景（西から）

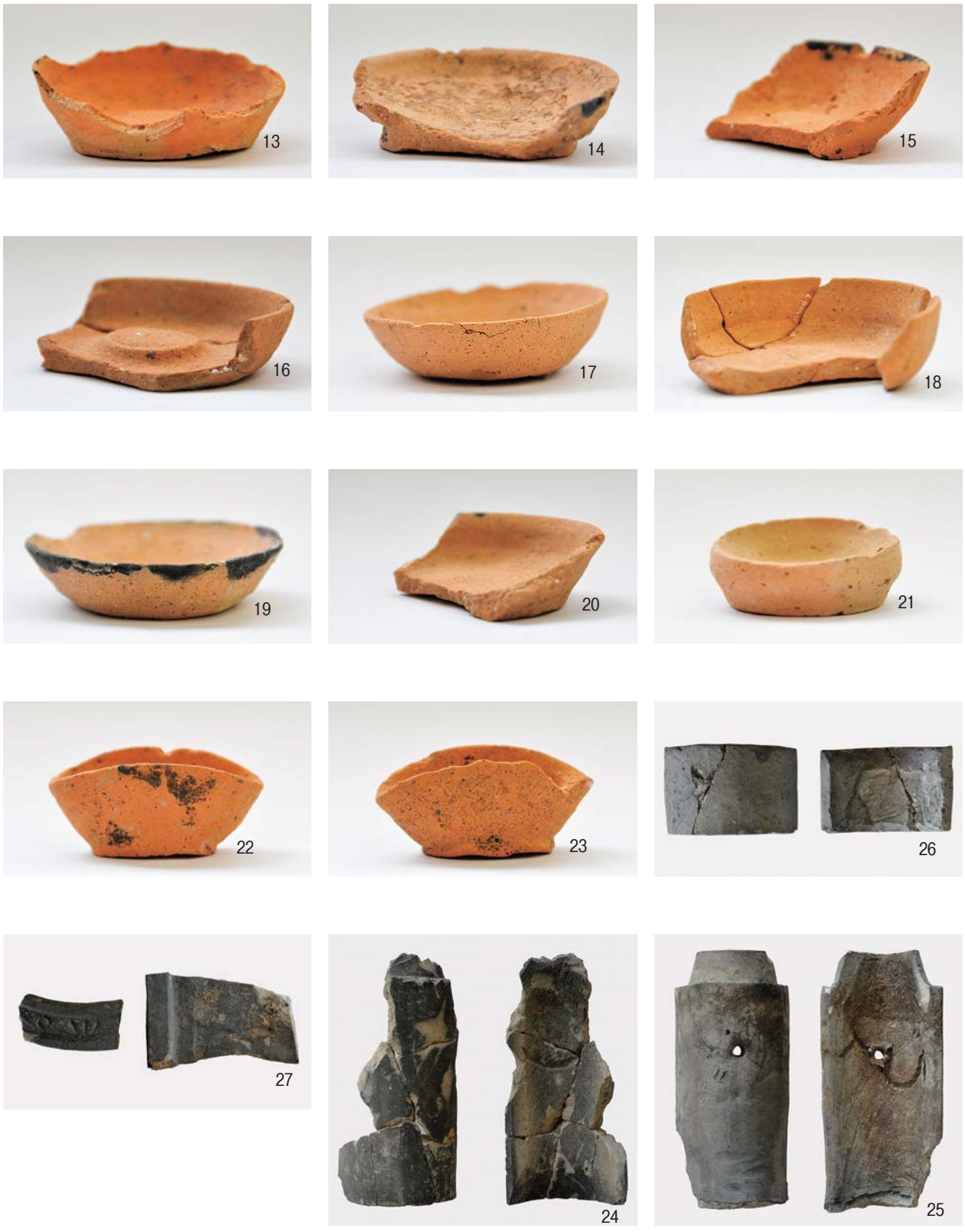
54区　作業風景（北から）

63区　作業風景（東から）

45区　出土遺物

46区・47区　出土遺物①

図版 8



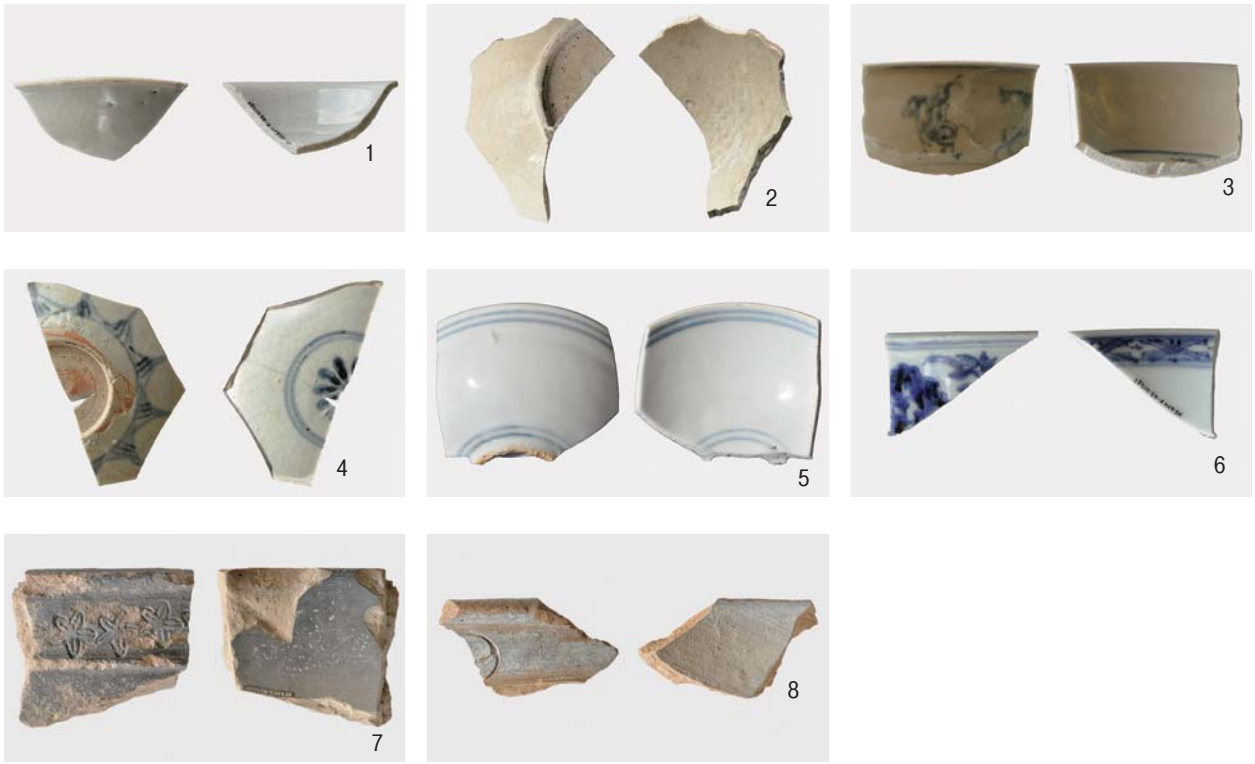
46区・47区　出土遺物②

50区　出土遺物

52区　出土遺物

図版10

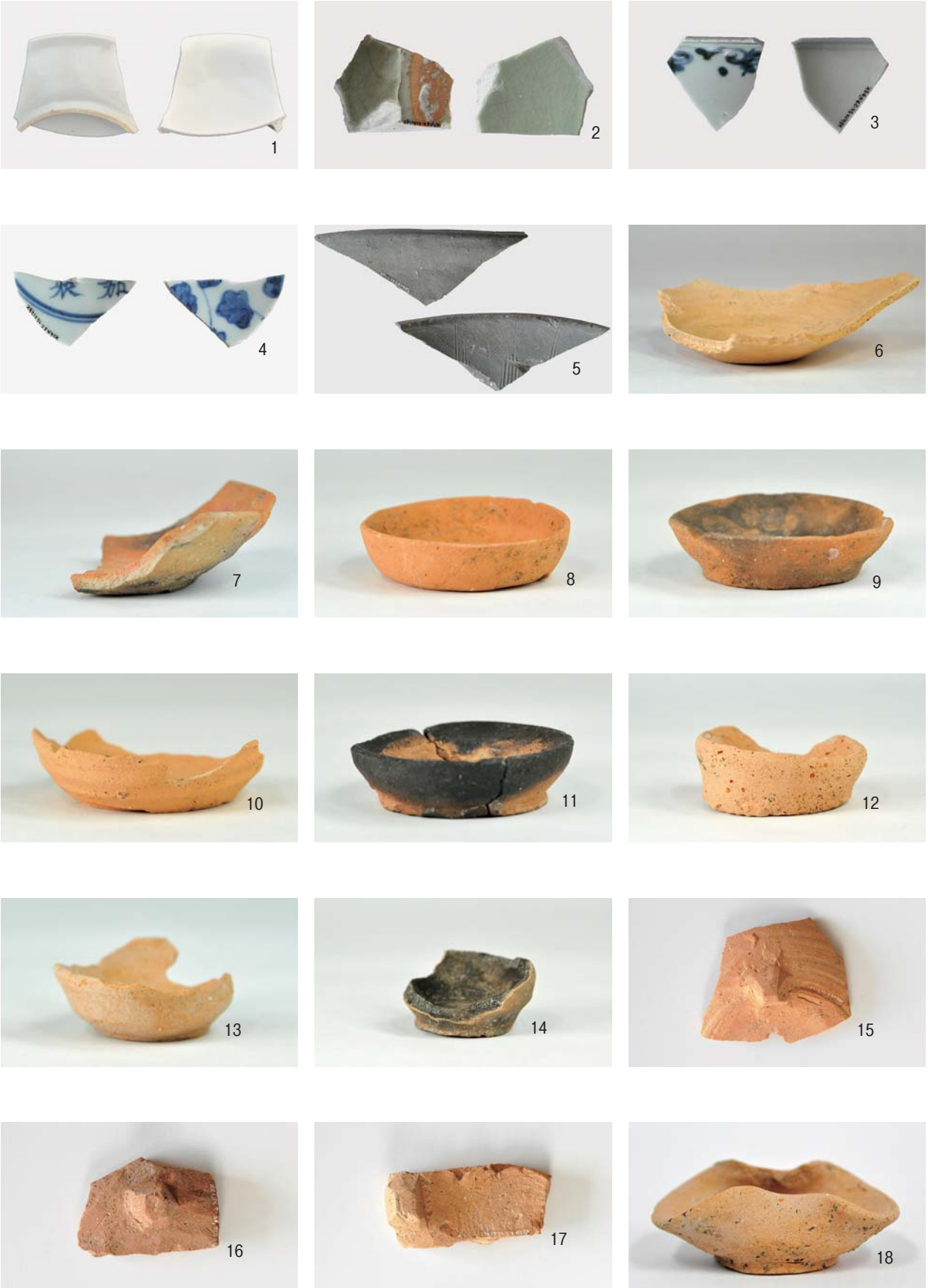
54区－1　柱穴群　出土遺物



54区－2　廃棄土坑　出土遺物①

54区－2　廃棄土坑　出土遺物②

図版12

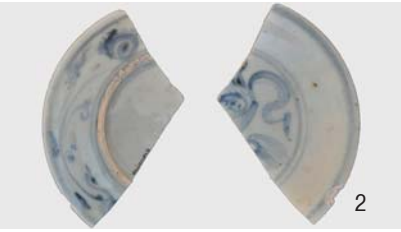


54区－2　大型土坑　出土遺物①

54区－2　大型土坑　出土遺物②

54区－2　SX01　出土遺物

図版14



54区・55区　包含層　出土遺物

56区　出土遺物

58区　出土遺物

63区　出土遺物

附　編

地中レーダー探査の成果について

保存対象の遺跡における物理探査の利用は、掘削を伴わない非破壊調査である特長を最大限活用するものであり、大きく以下の３つの役割がある。

・発掘調査の事前調査として遺構の状況を把握し、発掘調査範囲を特定する。

・発掘調査をせず現状保存する範囲で、遺構の埋蔵状況を反映する唯一の情報となる。

・範囲が限定される発掘調査結果と対比させ、発掘しない範囲における遺構の埋蔵状況を推定する。

日野江城跡の二ノ丸地区及び大手川地区では、トレンチ調査によって遺構の一部が確認されているものの未発掘範囲は全体として広く、遺構の詳細な分布状況が把握されるには至っていない。地中レーダー探査による地中内部の非破壊調査を実施することで遺構等の分布状況の推定し、今後の発掘調査の効率化を図り、また研究及び保存活用等のための基礎データを得ることを目的として、地中レーダー探査業務を、平成26年度に応用地質㈱長崎支店に委託した。基本方針は以下のとおりである。

・探査範囲が広域であることから測線は２m 間隔の格子状に配置し、遺構の概略分布を推定する。

・詳細探査範囲を２箇所選定して高密度な測線を配置し、礎石等の小規模な遺構の分布状況の推定及びタイムスライス解析の適用性を確認する。

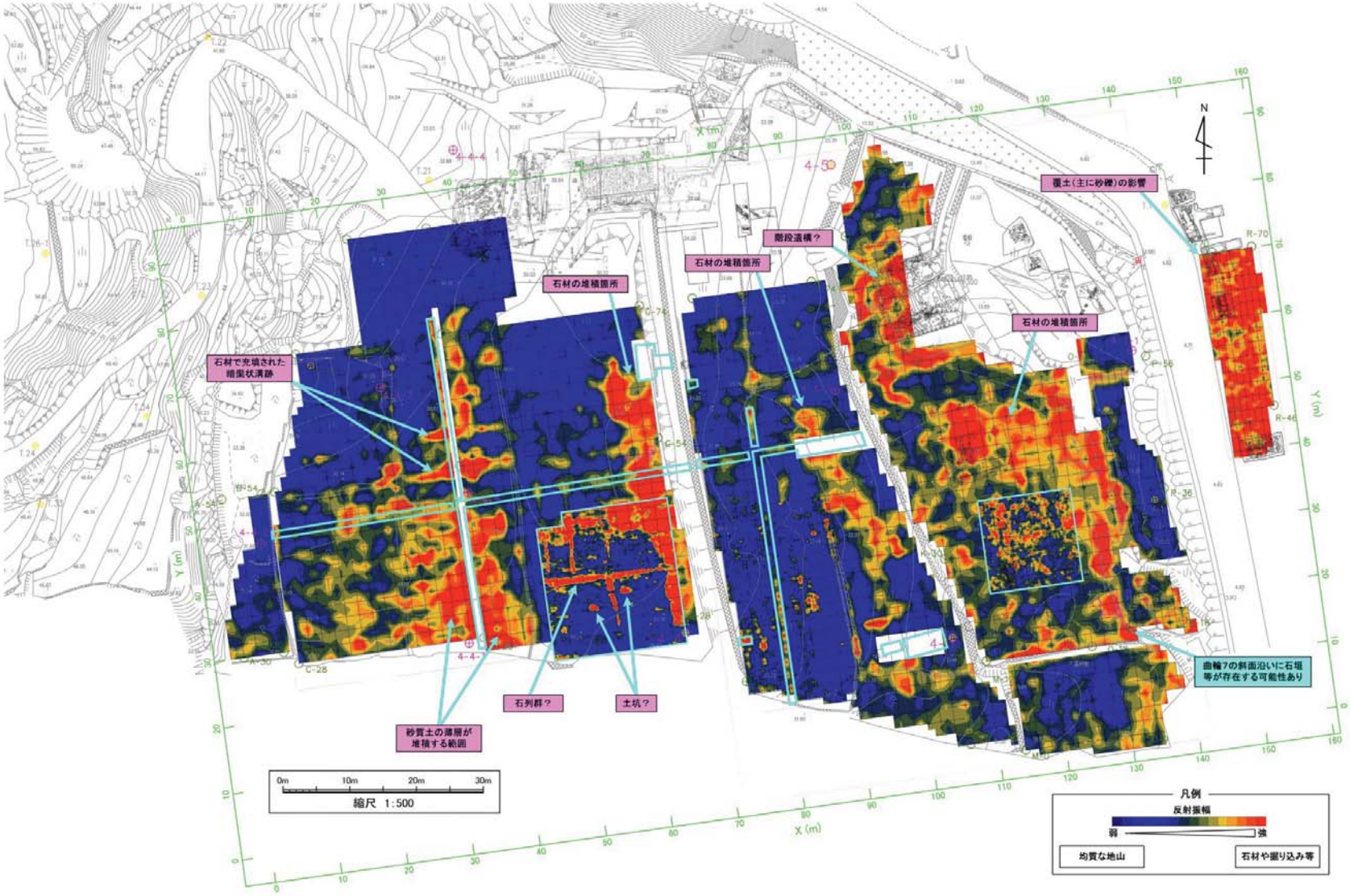
・既往の発掘調査で確認された遺構との連続性を推定する。

基本方針に基づき、探査した結果を要約する。曲輪５、６、７において、それぞれ「石材の堆積」する範囲が検出された。いずれも表土層直下から深度１m 以深まで続いており、大規模な構造となっている。大量の石材が集積されている状況はトレンチ調査で部分的に確認している。曲輪５において、複数条の「石材で充填された暗渠状溝跡」や「石列」が検出された。排水暗渠としての機能が考えられるが、日野江城跡の遺構か近世の耕作に伴う暗渠か、利用時期については探査から推定するには至らない。曲輪６及び曲輪７の北側において「階段遺構」と推定される箇所が検出された。部分的にトレンチ調査で確認されており、２つの曲輪をつなぐ階段遺構が存在すると推定される。

本調査の目的のひとつは、柱基礎等の把握により建物遺構を推定することにあったが、探査結果から礎石や柱穴跡などを検出することができなかった。これは対象となる遺構が比較的小規模であることから、今回の測線間隔では充分に把握できなかったといえる。一方では局所的な反射体が点在している箇所もあり、当該箇所を重点的に調査することによって柱基礎の有無を確認できると考える。

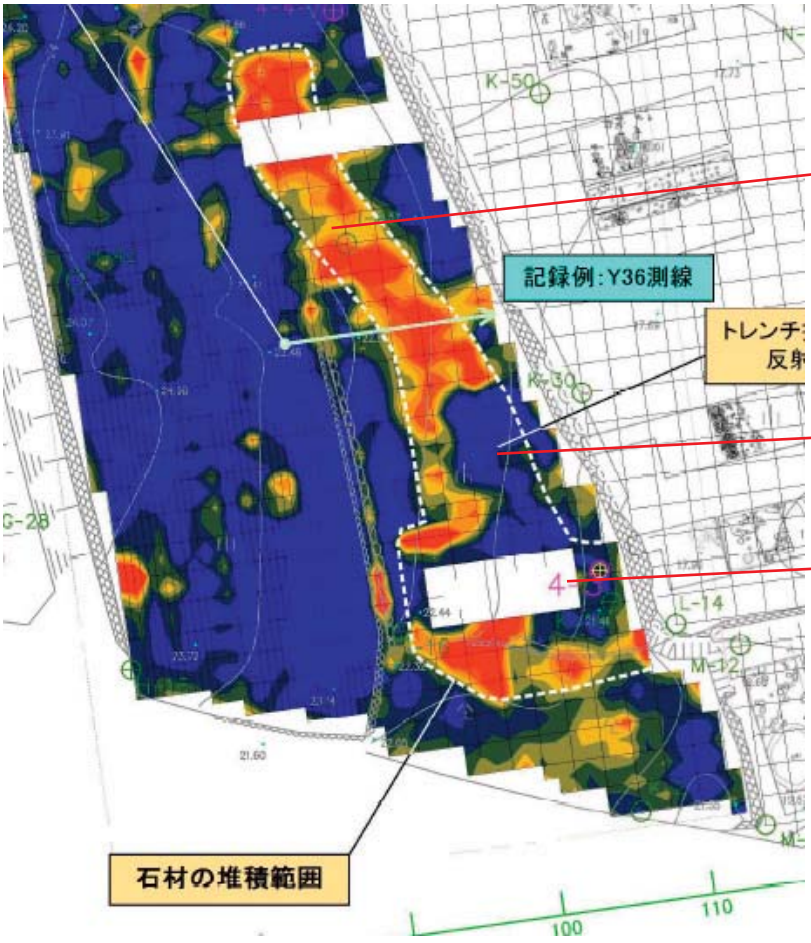
本調査では礎石や柱穴跡は検出できなかったが、比較的規模の大きな石材が堆積する範囲や石列等は明瞭に検出することが出来た。これらは日野江城跡の全容を解明する上で鍵となる遺構の可能性があり、この探査結果を踏まえたピンポイントのトレンチ調査を実施することによって、効率的な調査が可能になると考える。

（測定方法、解析方法、詳細な調査結果は省略し、代表的なものを掲載した。）



地中レーダー探査　タイムスライス結果（抜粋）　（深度：0.4m～0.6m）

礫の大量投棄状況
58区を北側から撮影



曲輪６地中レーダー探査結果を一部抜粋・加筆

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひのえじょうあと
書　　名	日野江城跡
副 書 名	平成25年度から平成28年度にかけての調査成果
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第９集
編 著 者 名	荒木伸也　小川慶晴
編 集 機 関	南島原市教育委員会
所 在 地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地　TEL. 0957-73-6705
発 行 年 月 日	西暦2018年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
日野江城跡 ひのえじょうあと	南島原市 みなみしまばらし 北有馬町 きたありまちょう	42214	043	32° 39′ 13″ ～ 32° 39′ 29″	130° 15′ 8″ ～ 130° 15′ 30″	25年度 20130716 ～ 20140331 26年度 20140417 ～ 20150330 27年度 20150610 ～ 20160328 28年度 20160721 ～ 20170329	1058.3㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日野江城跡	城　跡	中　世	石　垣 掘立柱建物跡 廃棄土坑 溝　跡	土師質土器 青磁、白磁 青花、瓦 動植物遺存体	国史跡

南島原市文化財調査報告書　第９集

日 野 江 城 跡

－平成25年度から平成28年度にかけての調査成果－

2018. 3. 31

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　株式会社　昭 和 堂